

宗 像

城ヶ谷古墳群Ⅱ

宗像市文化財発掘調査報告書

第 8 集

1985

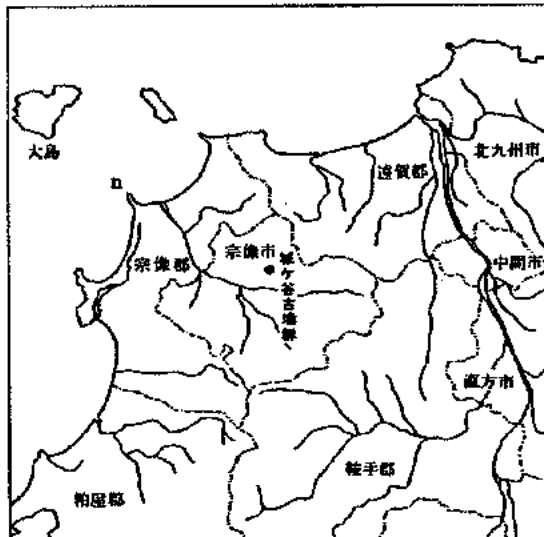
宗像市教育委員会

宗 像

城ヶ谷古墳群Ⅱ

宗像市文化財発掘調査報告書

第 8 集



1985

宗像市教育委員会



图 1-1-1 人脸的局部特写 (1984年 8月 1日摄)

序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏内にあって十数年来、ベッドタウンとして人口が増加しており、宅地開発や公共事業が目白押し
の状況となっている。これらの開発事業に並行して、文化財の多くが、その姿を現わし、永遠にその姿を消し去っている。

開発によって文化財が破壊されていくのはどうすることもできないと言ってしまえば簡単であるが、その破壊される文化財は、私達の祖先が我々に残してくれた古代人の知恵であり、今現在、我々の科学技術の基礎ともなる重要な意義あるものである。また、これら文化財は国の宝であり、私達公共の宝であることを忘れてはならない。

今後とも以上の事を心に刻み、文化財と取り組んで行くとともに、本書が広く文化財保護及び学術研究の一資料として活用いただければ幸いです。なお、発掘調査、本書発刊にあたり御協力をいただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

1985年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. 本書は、平等寺・三郎丸地区宅地造成に伴い1983年度に実施した緊急発掘の調査報告書である。
2. 発掘調査は、クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社の委託を受けて、宗像市教育委員会が実施した。
3. 本書に使用した図の作製、製図には主に飛野博文、安部裕久、板橋晴世、清家直子、徳永映子があたった。
4. 本書に使用した写真は主に飛野、安部の撮影による。
5. 本書の執筆は原俊一、飛野、安部が行った、各分担は文末に記した。
6. 本書の編集は第1・2章を安部、第3章を飛野が行った後に原が取りまとめた。
7. 図版の遺物番号は挿図遺物番号に一致する。
8. 本書に使用した古墳の番号については、前回調査分から続けることとしたため、前回調査分の古墳番号を次のとおりに変更した。

前回調査分	今回調査分
城ヶ谷A号墳	→ 城ヶ谷21号墳
城ヶ谷B号墳	→ 城ヶ谷22号墳
城ヶ谷C号墳	→ 城ヶ谷23号墳
城ヶ谷D号墳	→ 城ヶ谷24号墳
城ヶ谷E号墳	→ 城ヶ谷25号墳
城ヶ谷F号墳	→ 城ヶ谷26号墳
城ヶ谷G号墳	→ 城ヶ谷27号墳
城ヶ谷H号墳	→ 城ヶ谷28号墳
城ヶ谷I号墳	→ 城ヶ谷29号墳

本文目次

		本文頁
第 1 章	序 説	1
1	はじめに	1
2	位置と環境	3
3	発掘調査の概要	6
第 2 章	城ヶ谷古墳群	9
1	はじめに	9
2	発掘調査の記録	12
3	まとめ	79
第 3 章	三郎丸堂ノ上遺跡	85
1	はじめに	85
2	発掘調査の記録	87
3	まとめ	104
第 4 章	結 語	106

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	4
第2図	遺構配置図 (1/4000)	7
第3図	城ヶ谷古墳群第2次調査遺構配置図 (1/500)	10・11
第4図	城ヶ谷古墳群第20号墳土層図 (1/60)	13
第5図	城ヶ谷古墳群第20号墳主体部実測図 (1/40)	14
第6図	城ヶ谷古墳群第20号墳出土遺物実測図 (1/2)	15
第7図	城ヶ谷古墳群第30号墳主体部実測図 (1/40)	16
第8図	城ヶ谷古墳群第30号墳出土遺物実測図 (1/3)	16
第9図	城ヶ谷古墳群第31号墳主体部実測図 (1/40)	17
第10図	城ヶ谷古墳群第31号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	18
第11図	城ヶ谷古墳群第31号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	20
第12図	城ヶ谷古墳群第32号墳主体部実測図 (1/40)	21
第13図	城ヶ谷古墳群第33号墳主体部実測図 (1/40)	23
第14図	城ヶ谷古墳群第33号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	24
第15図	城ヶ谷古墳群第33号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	24
第16図	城ヶ谷古墳群第34号墳主体部実測図 (1/40)	27
第17図	城ヶ谷古墳群第34号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	28
第18図	城ヶ谷古墳群第34号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	28
第19図	城ヶ谷古墳群第35号墳主体部実測図 (1/40)	30
第20図	城ヶ谷古墳群第35号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	31
第21図	城ヶ谷古墳群第35号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	31
第22図	城ヶ谷古墳群第36号墳主体部実測図 (1/40)	32
第23図	城ヶ谷古墳群第36号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	33
第24図	城ヶ谷古墳群第36号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	34
第25図	城ヶ谷古墳群第37号墳主体部実測図 (1/40)	35
第26図	城ヶ谷古墳群第37号墳出土遺物実測図 (1/2)	36
第27図	城ヶ谷古墳群第38号墳主体部実測図 (1/40)	37
第28図	城ヶ谷古墳群第38号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	38
第29図	城ヶ谷古墳群第38号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	38
第30図	城ヶ谷古墳群第39号墳主体部実測図 (1/40)	39

第31图	城ヶ谷古墳群第39号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	40
第32图	城ヶ谷古墳群第39号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	41
第33图	城ヶ谷古墳群第40号墳主体部実測図 (1/40)	42
第34图	城ヶ谷古墳群第41号墳主体部実測図 (1/40)	42
第35图	城ヶ谷古墳群第42号墳主体部実測図 (1/40)	43
第36图	城ヶ谷古墳群第43号墳主体部実測図 (1/40)	44
第37图	城ヶ谷古墳群第44号墳主体部実測図 (1/40)	44
第38图	城ヶ谷古墳群第45号墳主体部実測図 (1/40)	46
第39图	城ヶ谷古墳群第45号墳出土遺物実測図 (1/2)	47
第40图	城ヶ谷古墳群第46号墳主体部実測図 (1/40)	48
第41图	城ヶ谷古墳群第46号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	49
第42图	城ヶ谷古墳群第46号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)	49
第43图	城ヶ谷古墳群第46号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/4)	49
第44图	城ヶ谷古墳群第47号墳主体部実測図 (1/40)	51
第45图	城ヶ谷古墳群第47号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	53
第46图	城ヶ谷古墳群第47号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)	54
第47图	城ヶ谷古墳群第47号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	55
第48图	城ヶ谷古墳群第48号墳主体部実測図 (1/40)	56
第49图	城ヶ谷古墳群第49号墳主体部実測図 (1/40)	58
第50图	城ヶ谷古墳群第49号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	59
第51图	城ヶ谷古墳群第49号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)	59
第52图	城ヶ谷古墳群第49号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	59
第53图	城ヶ谷古墳群第50号墳主体部実測図 (1/40)	61
第54图	城ヶ谷古墳群第51号墳主体部実測図 (1/40)	62
第55图	城ヶ谷古墳群第52号墳主体部実測図 (1/40)	64
第56图	城ヶ谷古墳群第52号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	65
第57图	城ヶ谷古墳群第52号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	65
第58图	城ヶ谷古墳群第53号墳主体部実測図 (1/40)	65
第59图	城ヶ谷古墳群第54号墳主体部実測図 (1/40)	66
第60图	城ヶ谷古墳群第55号墳主体部実測図 (1/40)	67
第61图	城ヶ谷古墳群第56号墳主体部実測図 (1/40)	68
第62图	城ヶ谷古墳群第56号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	69
第63图	城ヶ谷古墳群第56号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)	70

第64図	城ヶ谷古墳群第56号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	72
第65図	城ヶ谷古墳群第57号墳主体部実測図 (1/40)	73
第66図	城ヶ谷古墳群第58号墳主体部実測図 (1/40)	74
第67図	城ヶ谷古墳群第59号墳主体部実測図 (1/40)	75
第68図	城ヶ谷古墳群第60号墳主体部実測図 (1/40)	76
第69図	城ヶ谷古墳群第60号墳出土遺物実測図 (1/3)	76
第70図	城ヶ谷古墳群第61号墳主体部実測図 (1/40)	77
第71図	三郎丸堂ノ上遺跡遺構配置図 (1/500)	86
第72図	三郎丸堂ノ上遺跡第1号墳主体部実測図 (1/40)	87
第73図	三郎丸堂ノ上遺跡第1号墳出土遺物実測図 (1/2)	87
第74図	三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳主体部閉塞状況 (1/40)	88
第75図	三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳主体部実測図 (1/40)	89
第76図	三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	90
第77図	三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳周辺出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	90
第78図	三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳主体部閉塞状況 (1/40)	91
第79図	三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳主体部実測図 (1/40)	92
第80図	三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	93
第81図	三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	93
第82図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号・第5号墳周辺地形測量図 (1/200)	94
第83図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳主体部実測図 (1/40)	95
第84図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳土層図 (1/60)	96・97
第85図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳主体部閉塞状況 (1/40)	98
第86図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	99
第87図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	99
第88図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	100
第89図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅳ (1/10)	101
第90図	三郎丸堂ノ上遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅴ (1/3)	101
第91図	三郎丸堂ノ上遺跡第5号墳主体部実測図 (1/40)	102
第92図	三郎丸堂ノ上遺跡第5号墳出土遺物実測図 (1/2)	102
第93図	三郎丸堂ノ上遺跡石積遺構 S X 1 実測図 (1/40)	103

図 版 目 次

図版1	城ヶ谷古墳群・三郎丸堂ノ上遺跡航空写真	
図版2	1 城ヶ谷古墳群第2次調査全景（西から） 2 城ヶ谷古墳群調査後全景（東から）	
図版3	1 城ヶ谷古墳群第20号墳（西から） 3 城ヶ谷古墳群第31号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第30号墳（南西から） 4 城ヶ谷古墳群第32号墳（西から）
図版4	1 城ヶ谷古墳群第35号墳 2 城ヶ谷古墳群第36号墳（西から）	
図版5	1 城ヶ谷古墳群第38号墳（西から） 3 城ヶ谷古墳群第40号墳（北東から） 5 城ヶ谷古墳群第42号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第39号墳（西から） 4 城ヶ谷古墳群第41号墳（北西から） 6 城ヶ谷古墳群第43号墳（南から）
図版6	1 城ヶ谷古墳群第44号墳（南から） 3 城ヶ谷古墳群第46号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第45号墳（南から） 4 城ヶ谷古墳群第46号墳遺物出土状況
図版7	1 城ヶ谷古墳群第47号墳（西から） 3 城ヶ谷古墳群第49号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第48号墳（西から） 4 城ヶ谷古墳群第50号墳（西から）
図版8	1 城ヶ谷古墳群第51号墳（西から） 3 城ヶ谷古墳群第54号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第52号墳（西から） 4 城ヶ谷古墳群第55号墳（西から）
図版9	1 城ヶ谷古墳群第56号墳（西から） 3 城ヶ谷古墳群第60号墳（西から）	2 城ヶ谷古墳群第57号墳（西から） 4 城ヶ谷古墳群第60号墳遺物出土状況
図版10	1 三郎丸堂ノ上遺跡全景（南から） 3 三郎丸堂ノ上遺跡第1号墳（南から）	2 三郎丸堂ノ上遺跡第1号墳（南から）
図版11	1 三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳（南から） 3 三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳（南から）	2 三郎丸堂ノ上遺跡第2号墳（南から） 4 三郎丸堂ノ上遺跡第3号墳（南から）
図版12	1 第4号墳（西から） 3 第4号墳遺物出土状況（南から）	2 第4号墳（西から） 4 第5号墳（東から）
図版13	1 三郎丸堂ノ上遺跡石積遺構S X 1（西から） 2 三郎丸堂ノ上遺跡石積遺構S X 1 検出状況（西から）	
図版14	城ヶ谷古墳群出土遺物 I	
図版15	城ヶ谷古墳群出土遺物 II	
図版16	城ヶ谷古墳群出土遺物 III	
図版17	三郎丸堂ノ上遺跡出土遺物 I	
図版18	三郎丸堂ノ上遺跡出土遺物 II	

第1章 序 説

1. は じ め に

1982年6月15日、住友不動産株式会社・クボタハウス株式会社から、宗像市大字平等寺・三郎丸地区の土地開発に係る協議書が宗像市に出された。

申請地は、かつて、1973年12月に赤間宅地造成事業として開発申請が出されている。この時点では、業者・福岡県教育委員会・宗像町教育委員会・福岡教育大学を交えた協議により、平等寺地区の14基の古墳については緑地帯として保存し、緑地内には資料館・遊歩道を設置して古墳公園とする。そのほかの古墳群は、工事着手前に緊急発掘調査をして記録保存することを決めた。これによって、三郎丸地区の古墳群の発掘調査を1974年3月に開始し、同年10月にこの地区の発掘調査を終了した。ところが、平等寺地区の発掘調査に入る段階になって、開発に伴う諸々の条件が整わないために本工事が中止となった。このため残りの発掘調査も中断することとなった。

1982年7月、事業区内を貫通する都市計画道路が事業認可を受けたため、宅地造成と道路建設が同時進行することとなり、緊急発掘は工期との関係上、急を要する事態となった。

1982年の申請時点において、平等寺地区の約14500㎡については自然公園として整備保存することが、福岡県教育委員会の指導として明記されていた。このため発掘調査は保存地区以外の平等寺地区の古墳群から着手した。

1983年3月1日着手時には、約15基の古墳を確認していたが、調査の進行とともに、丘陵尾線上に、古墳の盛土をほとんど流失した古墳群の存在を知ることとなり、大規模調査の様相を示してきた。それにともない、調査計画は大きく変更され、工期との調整も困難をきわめた。

これとは別に、発掘調査の途中において、宗像市都市計画課から、保存地区の自然公園計画に異議が出された。宗像市が近隣公園として都市計画決定を受けるためには、自然公園としては認められないというものであった。現行の都市計画法では、開発事業区内には児童および近隣公園は開発面積の3%以上必要となっている。法の中では自然公園は含まれないとしている。

このために急遽、福岡県教育委員会、宗像市教育委員会、宗像市都市計画課を交えた協議を行ったが、結果として、保存地区の5基の古墳について約5000㎡のみは今後緑地帯として整備保存する。他の古墳については、発掘調査を実施して記録保存することとなった。また、緑地内に建設予定であった資料館は、宗像市中央公民館敷地内にプレハブを建設して、整理・保存することとなった。これを受けて、1983年8月、近隣公園は、都市計画決定した。

以後、発掘調査は大規模となり、数多くの指導・助言・応援を得て、翌1984年1月23日に至

1. はしめに

り、総計106基におよぶ発掘調査を終了し、引き続き整理に入った。

遺跡の名称については、大字平等寺・三郎丸に所在するところから、個々の地区については小字をのせて遺跡名としたが同一事業内で福岡教育大学による1974年の発掘が実施され、『城ヶ谷古墳群』として報告されており、今回の発掘調査を合わせて次のとおりに、遺跡名と報告書名を名称した。

報告書名	所収遺跡名
城ヶ谷古墳群Ⅰ	城ヶ谷古墳群（1973年調査）
城ヶ谷古墳群Ⅱ	城ヶ谷古墳群・三郎丸堂ノ上遺跡
平等寺向原遺跡	平等寺向原遺跡（1985年度報告予定）

発掘調査関係者

宗像市教育委員会		教 育 長	竹 原 漢
		教 育 部 長	白 木 国 明
		社会教育課長	牧 田 俊 次 (前任)
			野 中 秀 秋 (現任)
庶務會計		社会教育係長	竹 村 功 (前任)
			井 上 弘 (現任)
		社会教育主事	立 石 実
		主 事	城 月 かよ子
発掘調査		主 事	原 俊 一
		嘱 託	飛 野 博 文
		嘱 託	安 部 裕 久
調査指導	福岡教育事務所	社会教育主査	浜 田 信 也
	北九州教育事務所	社会教育主査	副 島 邦 弘
	京築教育事務所	社会教育主査	酒 井 仁 夫
	九州大学解剖学教室	助 手	田 中 良 之

発掘調査において、多くの方々の御指導・助言・応援をいただいた。また、地元福岡教育大学をはじめ、別府大学、福岡大学の学生の応援を得た。さらに奥村組には測量等において、便宜を図っていただいた。地元の方々には炎天下で、あるいは雪の降りしきる中の調査に参加いただきました。皆さまには心から御礼申し上げます。

2. 位 置 と 環 境

城ヶ谷古墳群は、福岡県宗像市大字三郎丸字大田原に所在する61基からなる古墳群である。

1974年にも三郎丸・平等寺地区宅地造成工事に伴い破壊されることになり、波多野院三氏らの指導のもとに福岡教育大学歴史研究部考古学班の手によって緊急調査が実施されており、その時の調査で29基が確認された。詳細は『城ヶ谷古墳群』^{註1}1977年、を参照されるとよい。このうち城ヶ谷21号墳は城ヶ谷古墳群の乗っている丘陵とは別の丘陵に位置しているため平等寺向原Ⅷ-2号墳として、城ヶ谷古墳群の中に入れないようにした。

今回の調査対象地点は、前回調査の北東側尾根筋に営まれている32基の古墳と前回調査対象から外された城ヶ谷20号墳1基、それらの南東隣りに延びる尾根上の三郎丸堂ノ上において5基、合計38基の古墳などを調査した。

当古墳群は、標高369.3mを最高所として遠賀郡と境をなす城山の南西麓にのびる舌状丘陵の尾根上に点在する古墳群の一支群である。

よって1971年に調査された三郎丸古墳群^{註2}、西に1983年3月から宗像市教育委員会の手によって調査された平等寺向原遺跡^{註3}、その西に1981年～1982年と1983年2月の2次に渡って福岡県教育委員会と宗像市教育委員会の手によって調査された平等寺半田古墳群等の古墳群が分布している。

宗像市は、福岡市と北九州市の中間に位置しており、両大都市の通勤圏内にあり、ベクトク化し、ここ十数年来急激な人口増加とそれに伴う宅地開発や公共施設の建設が急務となっている。1966年に東郷地区の土地区画整理に伴い緊急調査されたのを景気に福岡教育大学によって調査された三郎丸古墳群・城ヶ谷古墳群、天理大学、藤井祐介氏らの手によって調査された稲元古墳群第1期・第2期調査^{註5}、中松元古墳群や福岡県教育委員会の手によって調査された石丸遺跡^{註6}・相原古墳群^{註7}・久戸古墳群^{註8}、宗像市教育委員会の手によって調査された朝町百田遺跡^{註9}・朝町浦谷古墳群^{註10}・朝町町ノ坪遺跡^{註11}・朝町山添遺跡^{註12}・相原遺跡、陶埴を出土した光岡長尾遺跡^{註13}、大徳町古墳群、鍛冶工具を出土した朝町山ノ口遺跡^{註14}、平等寺半田古墳群に平等寺向原遺跡、野坂中山遺跡^{註15}、曲香烟遺跡^{註16}、朝町妙見遺跡^{註17}、用山堂ノ上遺跡^{註18}、武丸大上げ遺跡^{註19}、鉄戈を出土している名残遺跡群や鏡片を出土している稲元久保遺跡等と休む暇もなく緊急調査が継続されている。これらの緊急調査によって姿を現わした文化財は宅地開発と公共施設建設の犠牲となって保護されることなく、その姿を消していく環境下に今現在おかれているのである。

註1 波多野院三 『城ヶ谷古墳群』 クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社 1977年
 竪穴系横口式石室、横穴式石室を内部主体とする30基の古墳の調査。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000) 1. 城ヶ谷古墳群 2. 三郎丸堂ノ上遺跡

第1章 序 説

- 註2 波多野暁三 『三郎丸古墳群』 福岡教育大学紀要21号 1971年 古墳9基の調査。
- 註3 平等寺地区に点在する古墳群で彌文群からなる69基の古墳群である。
- 註4 酒井仁夫 『半田古墳群』 宗像市文化財調査報告書6集 1983年
- 註5 西谷真治 『稲元古墳群第1期調査報告』 稲元古墳群調査団 1976年 竪穴系横口式石室と横穴式石室を内部主体とする6基の古墳の調査。
藤井祐介 『稲元古墳群第2期調査報告』 稲元古墳群調査団 1976年
- 註6 橋口達也 『石丸遺跡』 宗像町文化財調査報告書第4集 1980年
- 註7 酒井仁夫 『柏原古墳群』 宗像町文化財調査報告書第1集 1979年
- 註8 酒井仁夫 『久戸古墳群』 宗像町文化財調査報告書第2集 1979年
酒井仁夫 『久戸古墳群Ⅱ』 宗像町文化財調査報告書第3集 1979年
- 註9 1980・1981年調査。古墳25基、小石室9基、火葬墓1基の調査。鉄滓の副葬があった。
- 註10 原俊一 『浦谷古墳群Ⅰ』 宗像市文化財調査報告書第5集 1982年 竪穴系横口式石室・横穴式石室を内部主体とする47基の古墳、小石室5基、竪穴1基、火葬墓1基の調査。
- 註11 弥生時代中期前半から中期中頃の円形住居と古墳時代後期のカマドをもつ方形住居跡の調査。
- 註12 平安時代前半の溝一条の調査。
- 註13 弥生時代の住居跡、貯蔵穴群と横穴式石室を内部主体とする古墳の調査。貯蔵穴群をかこんで陸橋2ヶ所を付設する環溝を検出。貯蔵穴から陶器出土。
- 註14 横穴式石室を内部主体とする22基の古墳の調査。鉄鉋や鉄鋸などの鍛冶工具がセットで出土。
- 註15 『埋蔵文化財発掘調査既報』 宗像市文化財調査報告書第7集 1984年。
- 註16 註15に同じ
- 註17 註15に同じ
- 註18 註15に同じ
- 註19 註15に同じ
- 註20 富地原・徳重地区に分布する遺跡群の総称である。各丘陵には弥生時代から中世までの遺構が分布している。富地原梅木遺跡では鉄戈を副葬する土壇墓あり。
- 註21 大和団地造成に関連する4期調査で、3つの丘陵の調査で横穴墓50数基と割竹型木棺と竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳の調査である。

3. 発掘調査の概要

3. 発掘調査の概要

平等寺・三郎丸地区の土地開発工事に伴う緊急発掘調査を1983年3月1日から1984年1月21日までの期間おこなった。当該事業区は1974年にも調査がおこなわれ、『城ヶ谷古墳群』として報告されている。今回の調査はこの城ヶ谷古墳群を含む、三郎丸堂ノ上遺跡、平等寺向原遺跡、城ヶ谷古墳群Ⅱに渡る大規模な発掘調査となった。これらの発掘調査の結果、開発に伴う調査は下記のようになった。

発掘に伴う調査遺跡	城ヶ谷古墳群 (1974年調査)	古墳29基
	城ヶ谷古墳群Ⅱ	古墳33基
	三郎丸堂ノ上遺跡	古墳5基
	平等寺向原遺跡	古墳69基、溝1基

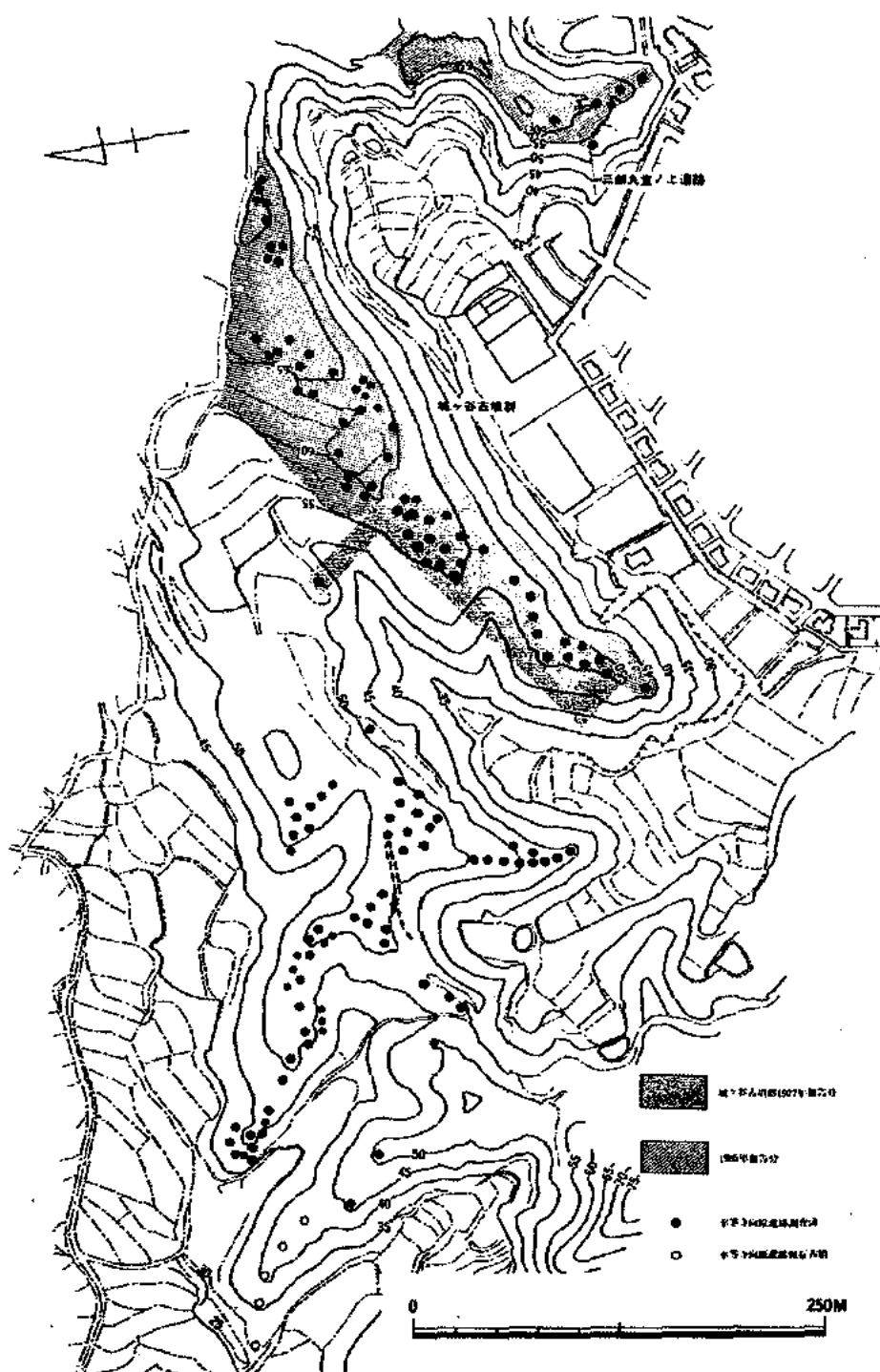
これらの調査遺跡は、1983年3月1日に平等寺向原遺跡のⅠ支群(2基)・Ⅲ支群(4基)の古墳調査に着手したのをはじめに、Ⅳ支群(8基)、Ⅴ支群(12基)、Ⅵ支群(9基)、Ⅶ支群(8基)、Ⅷ支群(2基、内1基は1973年調査)、城ヶ谷古墳群Ⅱ(33基)、三郎丸堂ノ上遺跡(5基)の古墳調査が継続しておこなわれ、1984年1月21日Ⅱ支群(25基)の古墳調査の終了をもって今回の発掘調査を終了した。

各支群の調査は工事と並行しておこなわれた。よって調査は工事の進行速度によって、各支群の調査を点々と変更してこれに対応しなければならなかった。

Ⅰ支群の調査は3月1日からはじめた。この支群では7基の古墳が確認され、今回調査分は2基で他の5基は保存されることになっている。今回調査分の2基は丘陵西斜面に位置するものであった。尾根線上にトレンチを設定してこれを掘ったが遺構は検出できず、重機による表土剥ぎでも遺構は検出されなかった。よってこの丘陵では2基の古墳を調査した。この2基の古墳の調査が完全に終了したのは、6月18日であった。

Ⅱ支群の調査は8月19日に現況測のタイ打ちからはじまる。この支群では25基の古墳が確認された。この内道路分で消滅するⅡ-23号墳を先に調査することとなり、この支群の調査を進めた。この支群は墳丘の残りがよく、土層断面で古墳の新旧関係や築造工程などの観察もできた。この支群の調査が完全に終了したのは、1984年1月21日でこの支群の調査終了をもって今回の調査すべてを終了した。

Ⅲ支群の調査は4月18日Ⅲ-1号墳の調査着手からはじまった。この支群はこのⅢ-1号墳1基と思われていた。しかし、工事の仮設道路をつくるため重機を入れたところ3基の古墳が確認され計4基となった。この内Ⅲ-2号墳は、本支群の調査終了を待たずに実測図と写真撮



第2図 遺構配置図 (1/4000)

3. 発掘調査の概要

映終了後に、その姿を消してしまった。5月31日のことであった。この支群の調査が完全に終了したのは、6月18日であった。

Ⅳ支群の調査は6月3日Ⅳ-7号墳の発掘からはじまる。この支群はⅢ支群と同様に、その存在を確認することができなかったもので、Ⅲ支群の確認によって、本支群も確認されたものである。この支群の調査は中止と再開をくり返し行なった支群で、工事用仮設道路をつくるためにこの支群の調査を進め、仮設道路ができると他の支群の調査に入らねばならないためこの支群の調査は中止。又運搬用道路と本線をつくるため、この支群が破壊されるので、この支群の調査を再開するというような寸断された調査になった。この支群の調査が完全に終了したのは9月24日であった。

Ⅴ支群の調査は5月21日Ⅴ-12号墳発掘からはじまった。この支群の調査は、はじまってすぐⅢ支群の古墳が確認されたので中止され、これが終了して再開された。この支群は南にのびる丘陵尾根線上に古墳が乗っていた。又丘陵東端にはこの古墳群に来る道と思われる溝が丘陵の下方から上方へと伸びている。これから考えなければならない重要な遺構が検出された。この支群の調査が完全に終了したのは7月19日であった。

Ⅵ支群の調査はⅤ支群の調査と並行して行われた。この支群はⅤ支群に走る溝によって隔絶された古墳群からなる支群である。調査終了はⅤ群と同様である。

Ⅶ支群の調査は7月13日Ⅶ-5号墳の発掘からはじまる。この支群は丘陵尾根線に竪穴系横口式石室、丘陵斜面に横穴式石室があるものである。この支群の調査が完全に終了したのは8月5日であった。

Ⅷ支群の調査はⅧ-1号墳が今回城ヶ谷古墳群Ⅱの調査と並行して進められ、調査終了も同様である。Ⅷ-2号墳は城ヶ谷古墳群Ⅰの中で調査されている。

三郎丸堂ノ上遺跡は12月7日に器材を搬入、2つの小さなマウンドの平板測量および重機を用いての周辺の表土発掘を併行して行なった。途中、正月休みを挟んで翌年1月18日までのほぼ1ヶ月にわたって、5基の古墳と1基の石積遺構の調査を行った。

城ヶ谷古墳群Ⅱの調査は7月22日城ヶ谷31号墳の調査からはじまった。この古墳群は城ヶ谷古墳群Ⅰと同一丘陵上のもので、この調査において32基の古墳と前回未調査の城ヶ谷20号墳の計33基を調査した。この調査の中で排水溝をもつ4基の古墳などが検出された。

第2章 城ヶ谷古墳群

1. はじめに

当古墳群が点在している丘陵は、前回調査された『城ヶ谷古墳群』の点在している丘陵と同一の丘陵であり、前回調査分の北東部にあたる。これは、城ヶ谷古墳群で最高所とされていた1号墳よりも更に、高所にあたる位置にある。

当古墳群の調査前の現状は、『城ヶ谷古墳群』の1号墳の調査の中で、「近くの古老によれば更に高位に円墳が存在したが、開墾の際、破壊されたと聞く。」を裏づけるものであった。

古墳は、大規模な開墾により、そのほとんどが墳丘及び上部構造を失い、古墳の規模を明確に把握することができないばかりでなく、その丘陵上に古墳が点在することを目認できないくらいに平坦な原野であった。

調査は、当古墳群の現状から重機を使用して、試掘坑を尾根線上に開けることによって、古墳の有無を確認することから始めた。この試掘坑により、表土下30cm程で古墳の石材にあたり、その面が地山面とほぼ同じ高さであることを確認した。この状況から墳丘は完全に削平され、墓壇も完存しているとは思われない状況と判断し、重機による表土剥ぎをすることにした。よって、本調査では、石室・墓壇の調査と馬蹄形溝の遺存しているものについての調査を行なった。

前回調査分の『城ヶ谷古墳群』で、未調査であった20号墳も今回調査を行なった。この古墳は、未掘墳と言われていたが、前回調査から今回調査まで10年もの年月が経過しており、その間に盗掘を受けていた。よって盗掘坑から発掘を進め、トレンチを開けて墳丘調査をし、墳丘裾部を捉え墳丘規模を明らかにすることができた。

今回調査分の古墳を整理するにあたって、前回調査分の古墳番号に続けて整理していく際に前回調査分でアルファベットによる古墳番号が不便になったのでこれを改変し、又城ヶ谷21号墳が当古墳群の丘陵上になく、他の古墳群に含まれるものと思われることから改変をおこなった。よって城ヶ谷21号墳を平等寺向原Ⅷ-2号墳とし、城ヶ谷A号墳を城ヶ谷21号墳とした。城ヶ谷B号墳から城ヶ谷I号墳までを城ヶ谷22号墳から城ヶ谷29号墳までとし、今回調査分を城ヶ谷30号墳からとした。前回調査分の報告書『城ヶ谷古墳群』を便宜上、『城ヶ谷古墳群Ⅰ』とし、今回調査分を『城ヶ谷古墳群Ⅱ』としたい。

2. 発掘調査の記録

1) 第20号墳

当古墳は、標高47.5mで丘陵の先端部に存在しており、北側は第19号墳と接している。

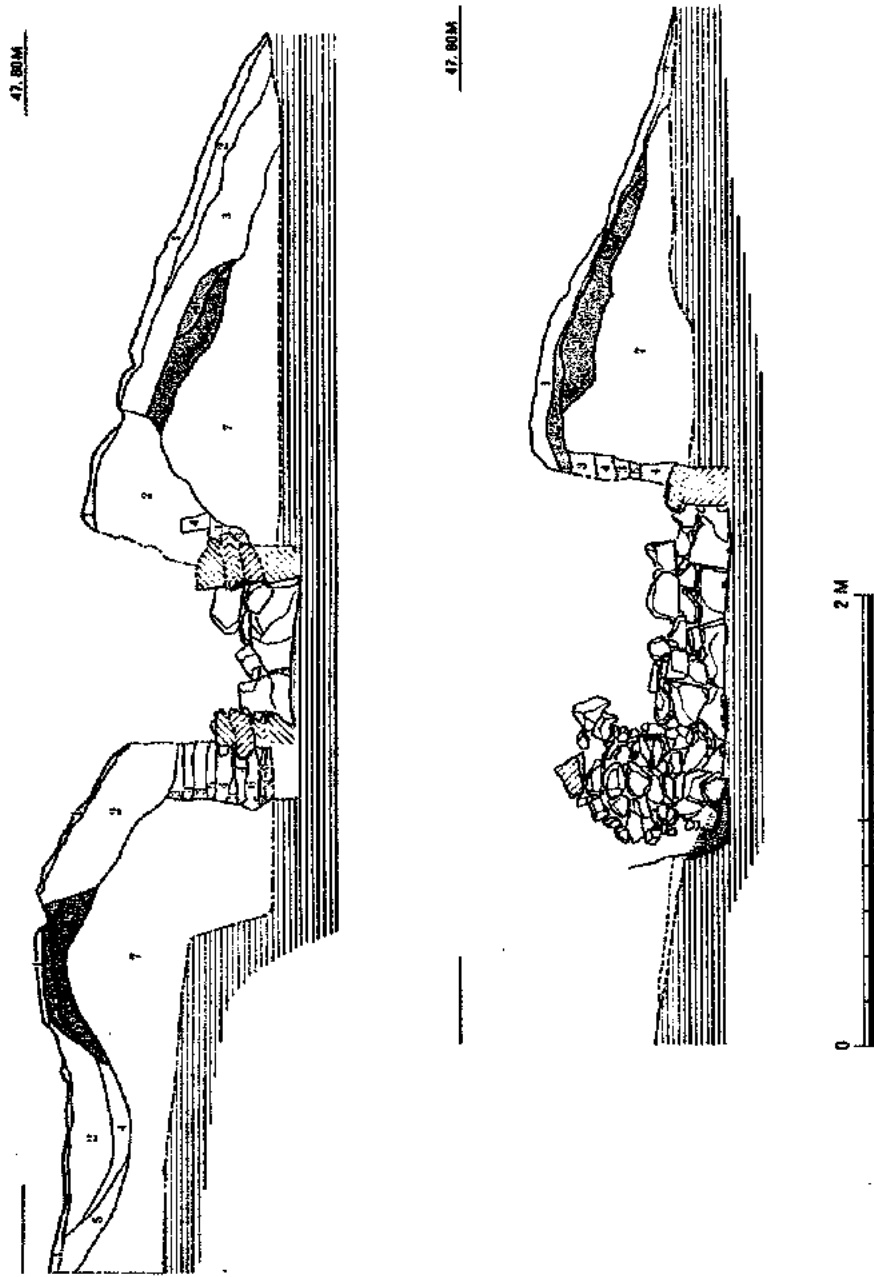
盗掘のため墳頂部は大きく陥没しており、天井石に使用されていたと思われる石材が、石室内に落ち込んだ状況がみえる程であった。

(1) 遺構

墳丘(第4図) 墳丘は、頂部が陥没しているためその高さは明確ではないが、50cm内外の低墳丘で、みかけは9m程の円墳である。地山を整形して高まりを造成し、その上に2枚から3枚の低い盛土を行っている。地山整形の墳裾ラインは、南北両トレンチで7.16mを測り、東側トレンチで4.4mを測る。これから推測すると当古墳の規模は、7mから9mの円墳と思われる。

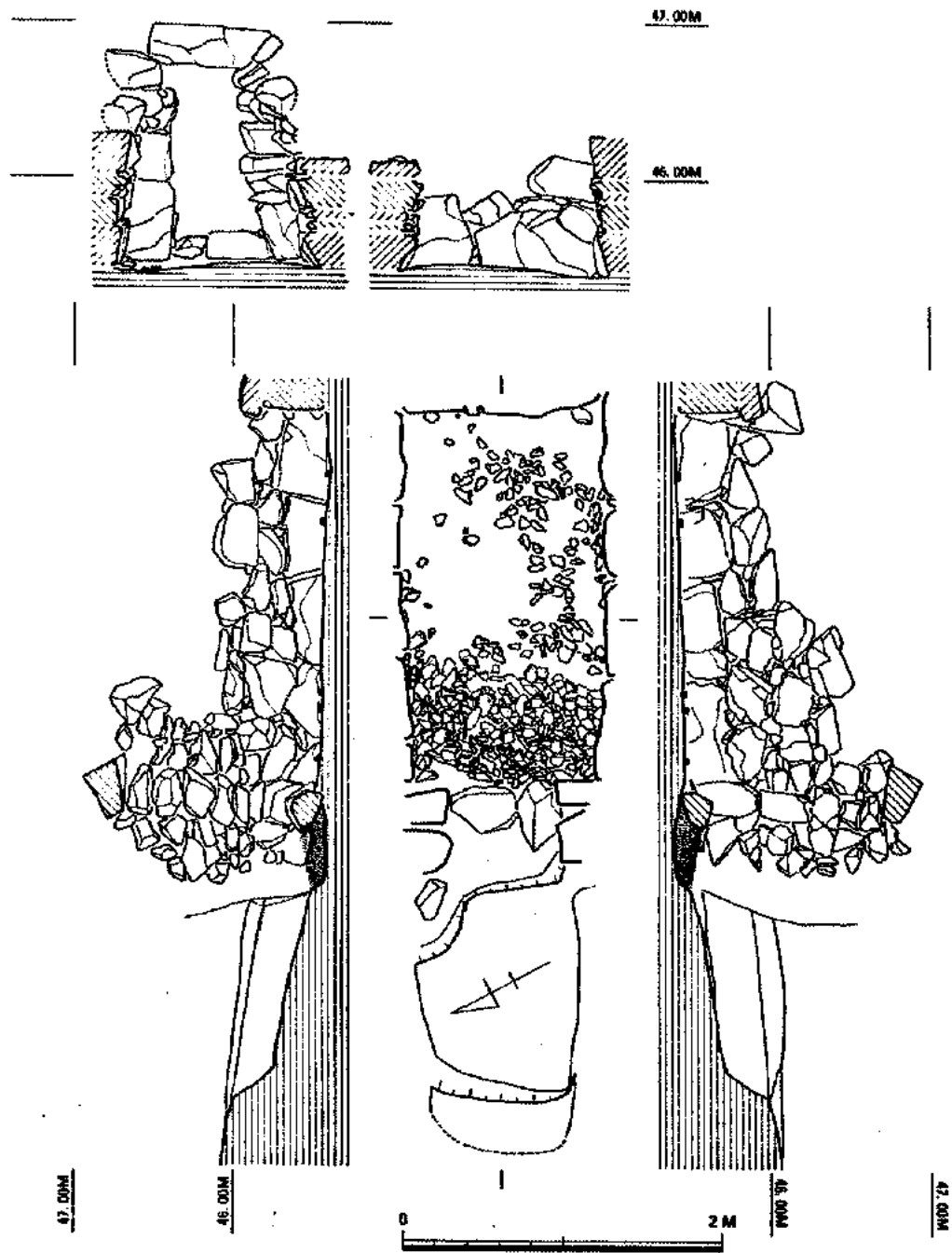
主体部(第5図) 主軸をN-60°-Wにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、長軸3.7m、幅2.6m、深さ1mを測る長方形の掘り方と思われる。墓道は、西北西に開口し、約10度の傾きを持って前方に延びている。墓道の長さは、先端部が削平されているため詳細を知ることができないが、現存状況で1mを測る。

石室は、中央部で全長2.9m、長軸2.4m、幅1.3mを測る両袖式の長方形プランを呈する。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスの大板な石材2石を使用して腰石となす。腰石上面のすき間には、小礫を使用して目張りしており、この面が水平になるように整えられている。北側壁は、砂岩ホルンフェルスのやや大板な石材5石を使用して腰石となす。腰石上面は、奥壁側から横口部に向って順次低くなっている。その上に礫塊を雑に積み上げている。南側壁も腰石4石である以外は北側壁と同様の構築方法である。玄門部は、南北両側壁からそれぞれ30cm程石材を突出させて両袖を形成している。袖石間の幅は45cmで、この間に幅30cm程の石材1石を置き仕切石となす。この仕切石によりこの上面と床面敷石との間に15cm程の段差をつけている。又この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。玄門部高は、仕切石上面から天井石下面までの1.2mである。玄門部の構築方法は、両袖石に30cm程の礫塊を使用し、その上段に北側で6石、南側で4石の礫塊を積み、この上に天井石を架けている。



第4図 第20号墳土層図 (1/60)

2. 発掘調査の記録



第5図 第20号墳主体部実測図 (1/40)

(2) 出土遺物

玄室内からガラス製白玉10個、鉄鏃20本、刀子2本を検出した。又墳丘表面から2個の須恵器の甕の破片を検出した。

装身具	玉 類	10個
武 具	鉄 鏃	20本
農工具	刀 子	2本
須恵器	甕	2片

装身具 (第6図)

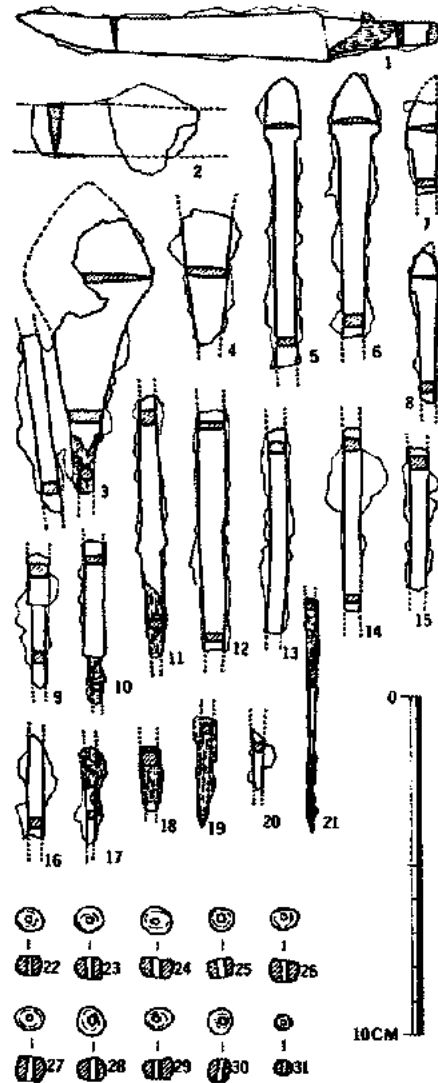
玉類 (22~31) いずれもガラス製品である。22・25・30は径8mmで、23・24・26~29は径9mm、10は径5mmとやや小さい。色はいずれも濃紺色を呈している。

武 具 (第6図)

鉄鏃 (3~21) 3・4は平根式に属するものと思われる。3は圭頭斧箭式と思われる。身と茎の一部が欠損している。現存長8.1cm、身の断面は凸レンズ状で基部は長方形、茎は円形を呈する。4は斧箭式に属するものと思われる。現存長4cmで基部断面は長方形である。3に腐付したものと6~21はいずれも尖根式に属するものと思われる。6は片丸造長三角形広鋒式である。身幅は1cmで箆被断面は長方形を呈する。現存長8.6cmである。7は片丸造正三角形広鋒式である。身幅は1.6cmで箆被断面は長方形を呈する。現存長8cmである。8・9はいずれも身と箆被の破片である。身は片刃で箆被断面は長方形である。片刃矢式と思われる。10~21はいずれも箆被と茎の破片である。このうち10・11は箆被から茎に移る際に段を有する。12は刺箆被である。

農工具 (第6図)

刀子 (1・2) 1は完形品である。全長12.5cm、身幅1.4cm、身長9cmである。



第6図 第20号墳出土遺物実測図 (1/2)

2. 発掘調査の記録

2) 第30号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第32号墳の東北東7m、標高約59mの地点に等高線とはほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、若干の腰石を遺存するのみである。

(1) 遺構

主体部(第7図)

主軸をN-52°-

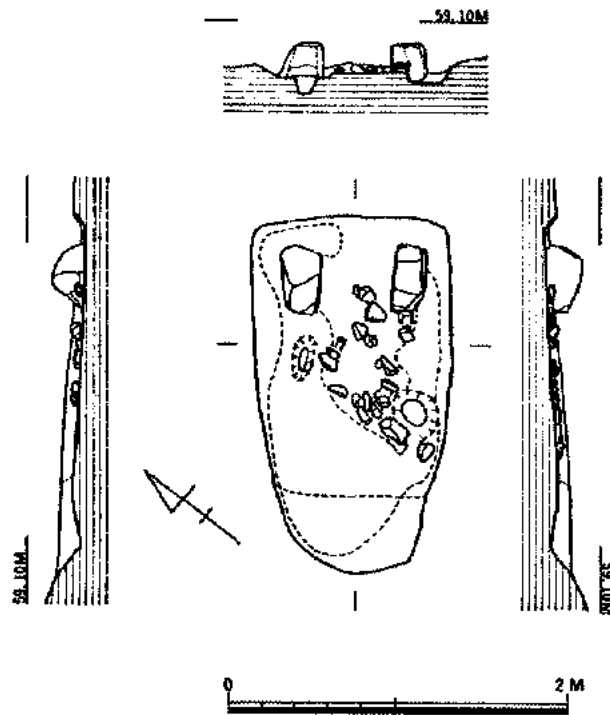
Eにとる小型の竪穴式石室と思われる。

墓壇は、現状で長軸1.7m、幅1.2m、深さ0.2mを測る長方形の掘り方である。

石室は、削平を受けているため、その形態を詳細に把握することはできないが、遺存する石材、敷石と石材抜き痕などから推測して、長軸1.2m、幅0.4mを測る北東を頭位にとる長方形プランを呈していたものと思われる。腰石は、砂岩ホルンフェルスの腰境を横長に使用したもので、両小口壁に各1石、両側壁に各3石を配していたものと思われるが、現状では両側壁に各1石を遺存するのみである。

(2) 出土遺物(第8図)

出土遺物はほとんどなく実測可能なものは、墓壇東側から出土した須恵器の甕の口縁部1点のみである。この甕の口縁部は、口頸部が短かく外反度は著しい。口頸部の高さは約5cmで、厚さは約1cm程でやや肉厚なものである。調整は内外面共に回転ナデ調整で、口唇部には1条のあまい沈線を有し、頸部には6本を1単位とする波状文を施し、その下に



第7図 第30号墳主体部実測図(1/40)



第8図 第30号墳出土遺物実測図(1/3)

1 条の沈線を描いている。色調は内外面共に黒灰色を呈している。口縁部内面上半部は、灰かぶりにより黄灰色を呈している。胎上には1mm前後の長石粒を多く含んだものを使用している。焼成は良好である。

3) 第31号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第30号墳の東約5m、標高約60mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

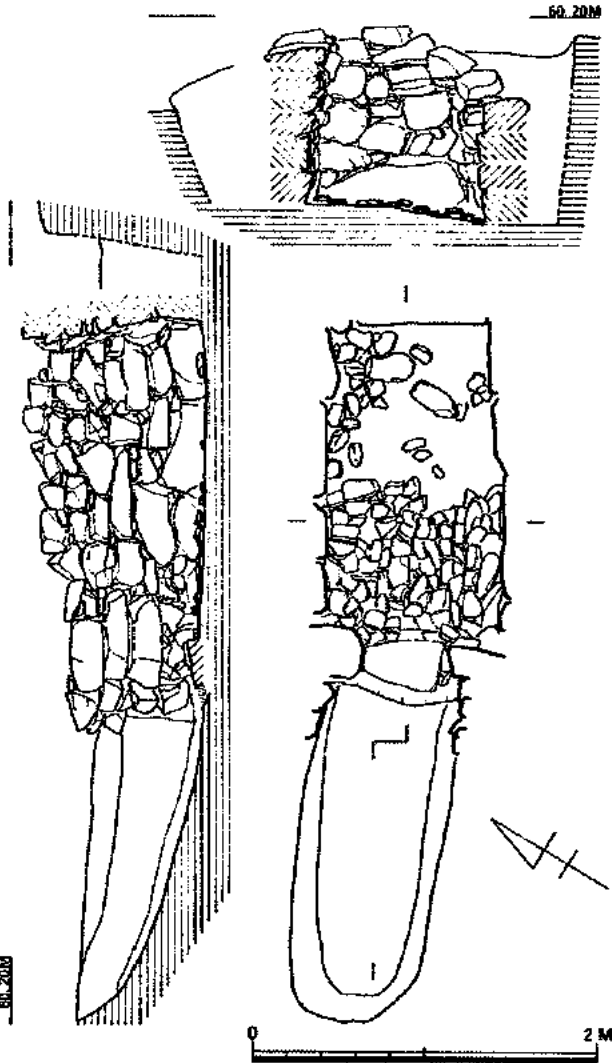
古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳南側の馬蹄形溝から推測すると6mから10mの円墳と思われる。

(1) 遺構

主体部 (第9図)

主軸をN-59°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓墳は、現状で長軸3m、幅2.4m、深さ1mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西南西に開口し、約15度の傾きを持って前方へ約2m程延びている。

石室は、中央部で全長2.3m、長軸1.9m、幅1mを測るやや狭い長方



第9図 第31号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

形プランを呈している。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大振な石材1石を使用し腰石となし、腰石上面が水平になるように側壁との間を礫塊により埋めている。この腰石上面より上は、雑に礫塊を横積みし、やや内傾させながら積み上げている。南側壁は、4石のやや大振な砂岩ホルンフェルスの礫塊を使用して腰石となす。腰石上面は不整でありそれより上段も雑に横積みして、ほぼ垂直に積み上げている。北側壁も南側壁と同様な構築方法をとっている。又積み石間には、小礫を持ちいて目張りされている。玄門部は、南北両側壁からそれぞれ30cm・20cm程石材を突出させて両袖を形成している。両袖石とも上に3段程積み石しており、床面からの高さは80cm程である。袖石間の幅は45cmで、この間に幅30cmの仕切石1石を置く。この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ1石の礫塊を置きそれより上段に順次石材数を増していく積み方をしている。閉塞状況は仕切石上面に横長に石材を立てて閉塞としている。

(2) 出土遺物

玄室内から土製丸玉1個、鉄鏃1本、刀子1本を検出した。馬蹄形溝からは東側で甕が破砕された状況で出土し、南側から高杯、琖、提瓶が出土している。

装身具	丸玉	1個
武具	鉄鏃	1本
農工具	刀子	1本
須恵器	高杯	1個体
	琖	1個体
	提瓶	1個体
	甕	2個体

装身具 (第10図)

丸玉 (3) 土製品である。径7mm、厚さ7mmの球形を呈する。色調は黒褐色を呈している。

武具 (第10図)

鉄鏃 (2) 鏃のみの破片である。遺存状態が悪く鏃の断面もとれない程であった。その形態は片丸造鑿箭式になると思われる。現存長2.7cm、幅1.2cmを測る。

刀子 (1) 完形品である。全長11.5cm、幅1.4cmである。身は7.2cmの長さで茎との間に2mmの段を持ち闊部を形成している。身の断面は背幅3mmの



第10図
第31号墳出土遺物
実測図 I (1/2)

長三角形で茎の断面は長方形である。

須恵器 (第11図)

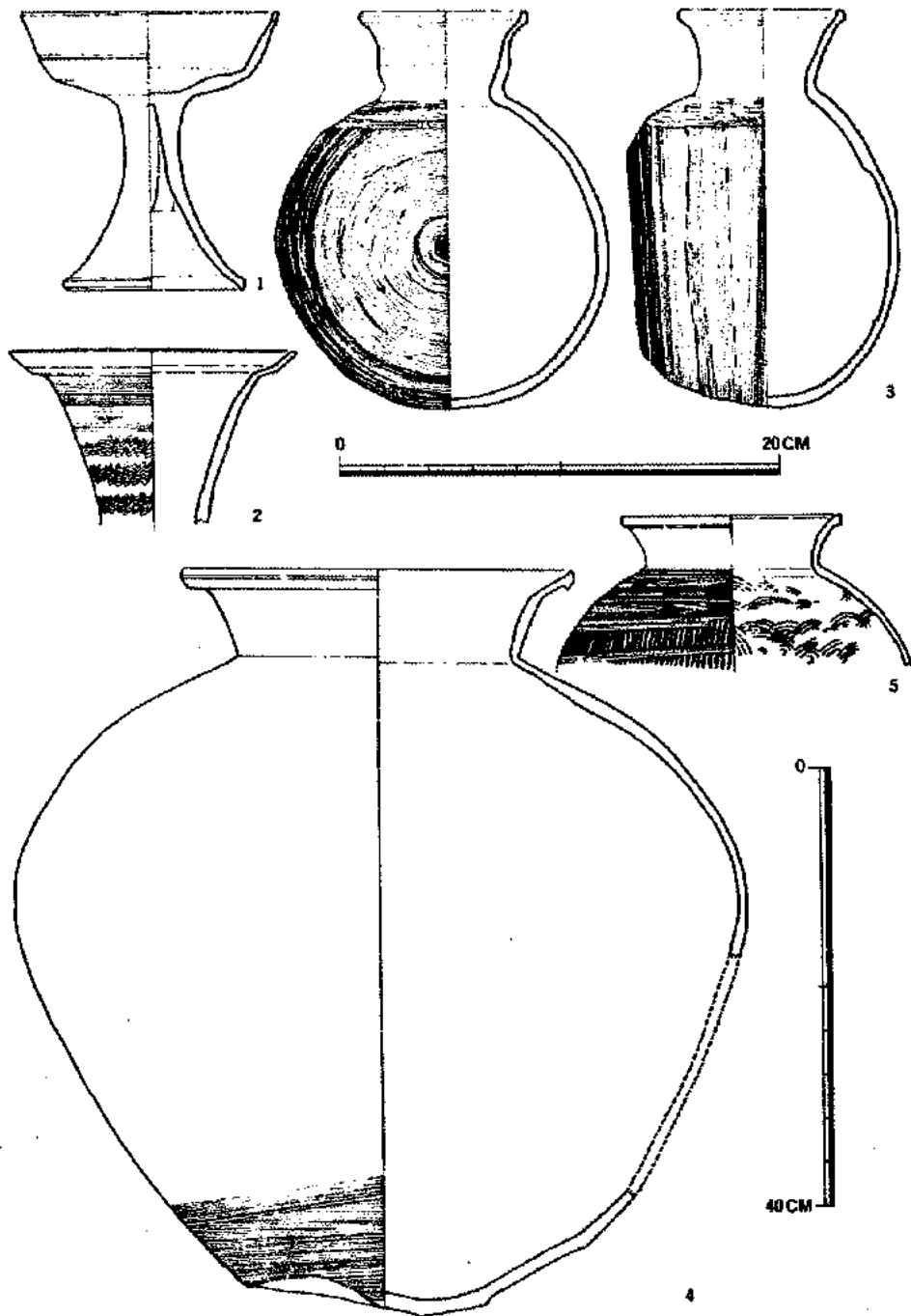
高杯 (1) 馬蹄形溝の南側から破片で出土したものである。杯部はゆるやかに内傾しながら立ち上がり、口縁部で直立している。口縁端部は丸くおさめられている。杯部外面は、底部を篋削り調整し、それ以上を回転ナデ調整している。杯部中程には1条の沈線を巡らしている。杯部内面は、底部が不定方向のナデ調整、それ以上を回転ナデ調整している。脚部は、脚柱部からゆるやかに外方へ開き、裾端部をややつまみ上げている。外面は回転ナデ調整で、内面は脚柱部にしぼり痕を残して裾部に回転ナデ調整している。色調は外面で灰かぶりのため、黒黄緑灰色を呈し、内面は暗灰色を呈している。胎土は微粒の長石砂を含む精練されたものである。焼成は良好である。

碗 (2) 馬蹄形溝の南側から破片で出土したものである。口頸部の破片である。ラッパ状に上方へ延び、口縁部で更に外方へ開き、口縁部でやや内傾させている。口縁端部は平坦におさえている。口頸部外面は、回転ナデ調整の後に頸部下半に6本1単位の波状文を3条施しそれ以上はカキメ調整である。口縁部は回転ナデ調整である。内面は回転ナデ調整である。色調は内外面共に暗茶褐色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は、やや焼きがあまいようである。

提瓶 (3) 馬蹄形溝の南側から破片で出土したものである。口頸部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反し、口唇部はつまみ上げて内傾している。体部は下面が平坦で上面は弱い膨みを持ち、体部最大径は中位よりやや上面にくる。調整は、体部すべてにカキメ調整を施し、口頸部は回転ナデ調整である。内面は回転ナデ調整で、体部上面中央に貼付痕を有する。色調は内外面共に淡い小豆色を呈している。胎土は微砂粒を含み、焼成はややあまいようである。

甕 (4・5) 馬蹄形溝の北側から破片で出土したものである。4は口頸部が胴部に比して短かく、口頸部の外反度は著しい。口縁端部は平坦に仕上げられ稜をなす。口頸部の高さは4.5 cm程で厚さは約8 mm程である。肩部は丸く張り口縁端から14 cm程のところが胴部最大径となるものと思われる。調整は外面が口頸部で回転ナデ調整、肩部は平行叩きの後、カキメ調整を施し叩き目を消している。胴部も平行叩きの後、カキメ調整を施しているが肩部ほど丁寧なものではなく、雑に施している。内面は同心円文叩きを時計回転方向に施し、その後にナデ調整を施している。色調は内外面共に淡灰色を呈している。胎土は微粒の長石砂を多く含む精練されたものである。焼成は良好である。5は口頸部が胴部に比して短かく、口頸部の外反度は著しい。口頸部の高さは6 cm程で厚さは7 mm程である。口縁端部を肥厚させて稜をなしている。調整は外面が口頸部で回転ナデ調整、肩部から下を平行叩きの後カキメ調整を施し、底部付近は叩きが消えてしまうほど丁寧に施している。内面は同心円文叩きを全面に施している。色調

2. 発掘調査の記録



第11図 第31号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

は外面が暗褐色を呈し、内面は暗灰色を呈している。胎土は微粒の長石砂を多く含んだものである。焼成は良好である。

4) 第32号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第30号墳の南西約7m、標高55.7mの地点に等高線とほぼ平行して存在しており、今回調査分の最西端に位置するもので、前回報告の『城ヶ谷古墳群』へと続いて行く。

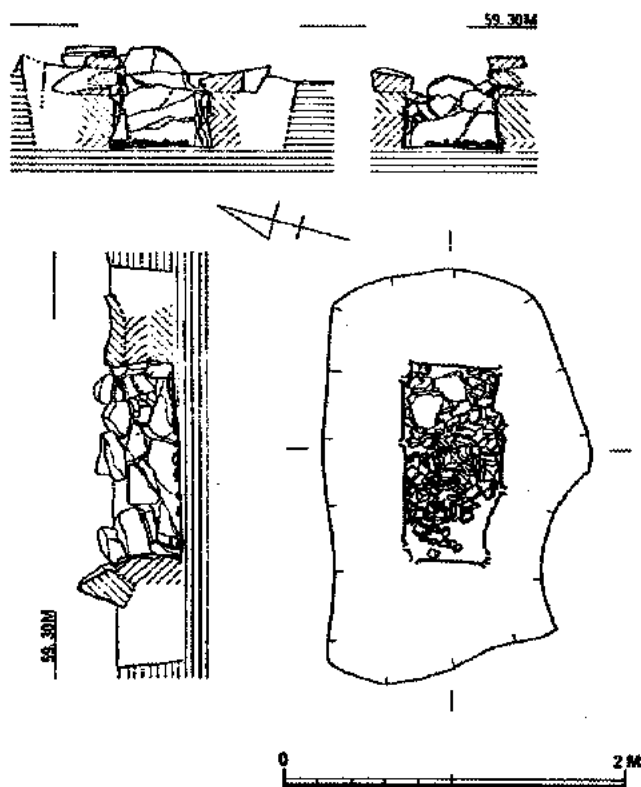
古墳の上部構造はすでになく、腰石と数段の石積みを遺存しているだけである。

(1) 遺構

主体部 (第12図)

主軸をN-76°-Eにとる小型の竪穴式石室である。墓壇は、現状で長軸2.4m、幅1.6m、深さ0.5mを測る長方形の掘り方である。一部南側壁を失っている。

石室は、中央部で長軸1.3m、幅0.6mを測るもので、西側小口壁がやや開き、東側小口壁がやや狭くなる長方形プランで西側を頭位にとるものと思われる。腰石は両小口壁にそれぞれ1石、北側壁に2石、南側壁に3石の砂岩ホルンフェルス礫塊を横長に配している。腰石上段は現状で2段遺存しており、石積みはほぼ水平で垂直に積み上げ



第12図 第32号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

られている。床面には5cm内外の小礫によって敷石されている。

当古墳の内外からは、遺物がまったく出土していない。

5) 第33号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第31号墳の南10m、標高60.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳南側の馬蹄形溝から推測すると9mから16mの円墳と思われる。

(1) 遺構

主体部(第13図) 主軸をN-39°-Eにとる単室の横穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸3.9m、幅2.8m、深さ0.8mを測る長方形の掘り方である。墓道は、南西に開口し約15度の傾きを持って前方へ約2m程延びている。

石室は、その石材をすべて抜き取られており、敷石の一部が遺存するのみで、玄室プランなどを詳細に知ることはできなかった。しかし床面敷石や石材抜き痕などから推測して、長軸2.4m、幅1.4mを測るやや胴の張る長方形プランを呈し、両袖を持つものと思われる。

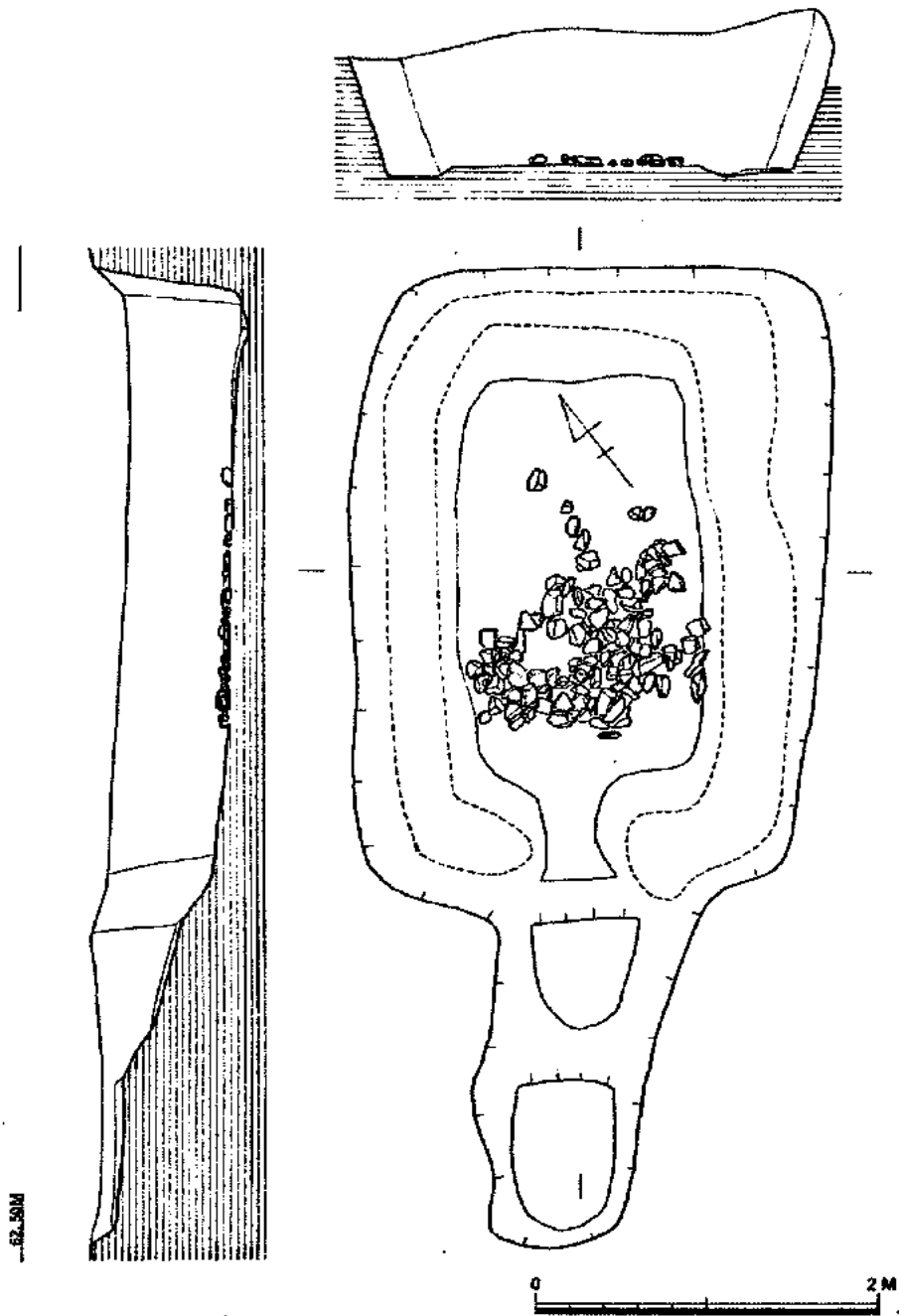
(2) 出土遺物

玄室内から鉄鏃3本、刀子1本を検出した。墓道からは須恵器の高杯1個体を検出した。馬蹄形溝からは須恵器の杯蓋2個体、杯身2個体、甕2個体、土師器の高杯1個体などが破碎された状況で出土した。

武具	鉄鏃	3本
農工具	刀子	1本
須恵器	杯蓋	2個体
	杯身	2個体
	高杯	1個体
	甕	2個体
土師器	高杯	1個体

武具(第14図)

鉄鏃(2~4) 2~4いずれも平根式に属するものである。2は阿丸造脇挾三角形式で現存長10.3cmである。3・4は共に圭頭斧箭式である。3の現存長は8.8cm、4の現存長は4



第13図 第33号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

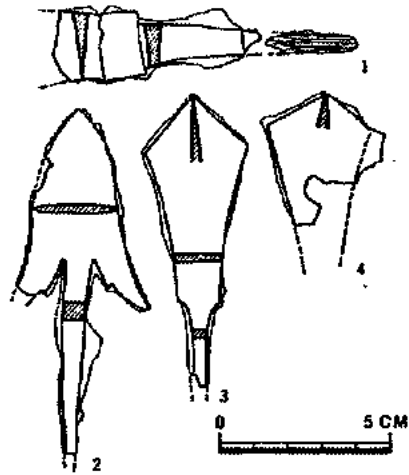
cmである。

農工具 (第14図)

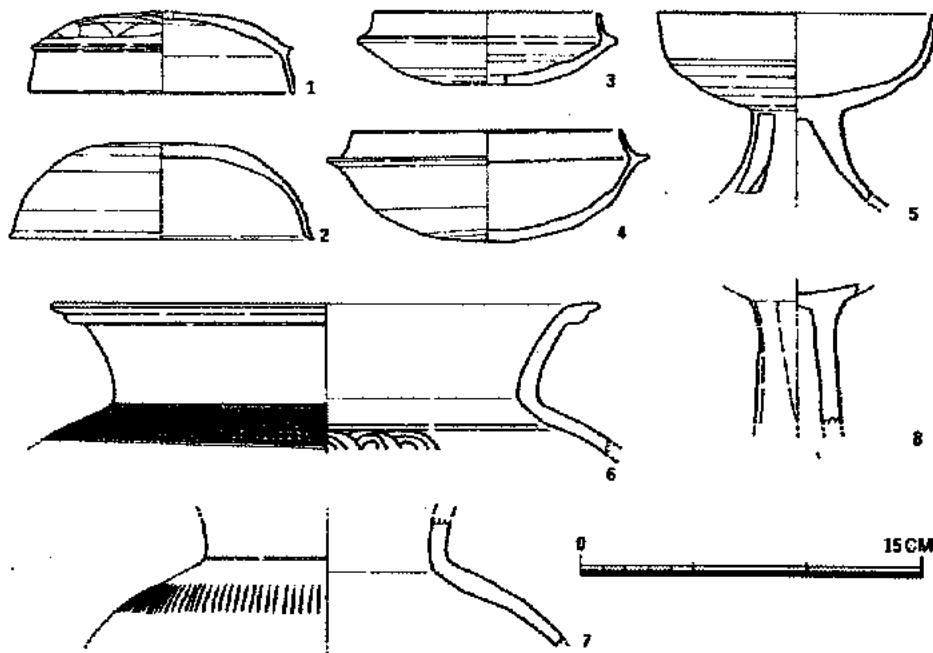
刀子 (1) 関から墓にかけての破片である。現存長9cm、幅2.1cmを測る。基部部に茎と平行の木目を持つ木質を遺存している。

須恵器 (第15図)

杯蓋 (1・2) 1は天井部が水平に近く口縁部はほぼ垂直に立ち上り、口縁端部は丸くおさめている。天井部と口縁部の境には稜を有しており、これによって明確に区分されている。外面の調整は器高の約程を反時計回り方向の刮削調整し、それ以下、口縁までを横方向のナデ調整している。内面の調整は天井部を不定方向のナデ調整、それ以下は横方向のナデ調整している。色調は外面が灰白色を呈しているのに対



第14図 第33号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)



第15図 第33号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

して内面は黄褐色を呈している。胎土は微粒の長石砂を含む精練されたものである。焼成は焼きがあまりよいである。2は天井部が丸味を持ちゆるやかに内傾して行き、口縁端部は切り落されて斜めに調整され内面に稜を持つ。調整は器高の4/5程に反時計回りの轆轤を使用して篋削り調整しており、それ以下は回転ナデ調整である。内面は天井部が下定方向のナデ調整、それ以下を回転ナデ調整している。色調は外面が暗灰色を呈し、内面は灰色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成はややあまい焼きである。

杯身(3・4) 3は立上り高1.1cmで基部から内傾して立ち上り中程から直立する。口縁端部は丸くおさめられている。受部と立上りの境は不明瞭である。底部は反時計回りの轆轤を使用して篋削り調整している。それ以上は回転ナデ調整している。内面は底部が不定方向のナデ調整で、それ以上を回転ナデ調整している。色調は外面が暗黄灰色を呈しているが一部火まわりのためか、黒灰色を呈する部位もある。内面は暗黄灰色である。胎土は微粒の長石砂を含むものである。焼成はややあまい焼きである。4は立上り高1.2cmで基部から内傾して立ち上る。口縁端部はやや尖りぎみに仕上げられている。受部と立上りの境は不明瞭で受部はほぼ水平に延び、端部を若干上方へつまみ上げている。体部はゆるやかに丸味をおびている。内面体部と立上りの境は明瞭である。調整は器高の4/5程までを反時計回りの轆轤を使用して篋削り調整しており、それ以上を回転ナデ調整している。内面は底部を不定方向のナデ調整、それ以上を回転ナデ調整している。色調は外面が暗黄灰色を呈し、内面は淡灰色を呈している。胎土は微砂粒を多く含む。焼成はややあまい焼きである。

高杯(5) 杯部は丸味を持ってゆるやかに内傾して、中程から直立する。口縁端部は丸くおさめられている。脚部はラッパ状に開き、脚柱部に長方形の1段透しが3ヶ所に入る。調整は、杯部外面で器高の4/5程を時計回りの轆轤を使用して篋削り調整している。それ以上は回転ナデ調整である。体部と口縁部の境には1条のあまい沈線が巡っている。内面は不定方向のナデ調整でそれ以上を回転ナデ調整している。脚部は内外面共に回転ナデ調整の後、外面から篋切りして透しを作っている。色調は、外面が暗灰色を呈しており、内面は灰色を呈す。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。

壺(6・7) 6は壺の口縁から肩部にかけての破片である。口頸部は胴部に比して短い形態のものと思われる。高さは4.5cm程で、肩部から約60度の傾斜を持ち直線的に外反し、口縁端部を肥厚させ、段をつくりだしている。調整は肩部で平行叩きの後カキメ調整しており、それ以上を回転ナデ調整している。内面は肩部で同心円文叩きを反時計回りに施している。色調は内外面共に淡灰色を呈している。胎土は長石砂を多く含んでいる。焼成はややあまい焼きである。7は壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部はほぼ垂直に延びている。調整は肩部で平行叩きの後ナデ調整を施している。内面は横方向のナデ調整である。色調は外面が灰かぶりのため黄緑色を呈し、灰かぶりのない部位は黒灰色を呈している。内面は黄灰色を呈し

2. 発掘調査の記録

ている。胎土は1mm前後の長石砂粒を少々含んでいる。焼成は良好である。

6) 第34号墳

当古墳は、丘陵尾根上より北側で、第35号墳の北10m、標高61.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳東側の馬蹄形溝から推測すると8mから10mの円墳と思われる。

(1) 遺構

主体部(第16図) 主軸をN-50°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸3.3m、幅2.5m、深さ0.4mを測る長方形の掘り方である。墓道は、南西に開口し、約20度の傾きを持って前方へ約1m程延びている。

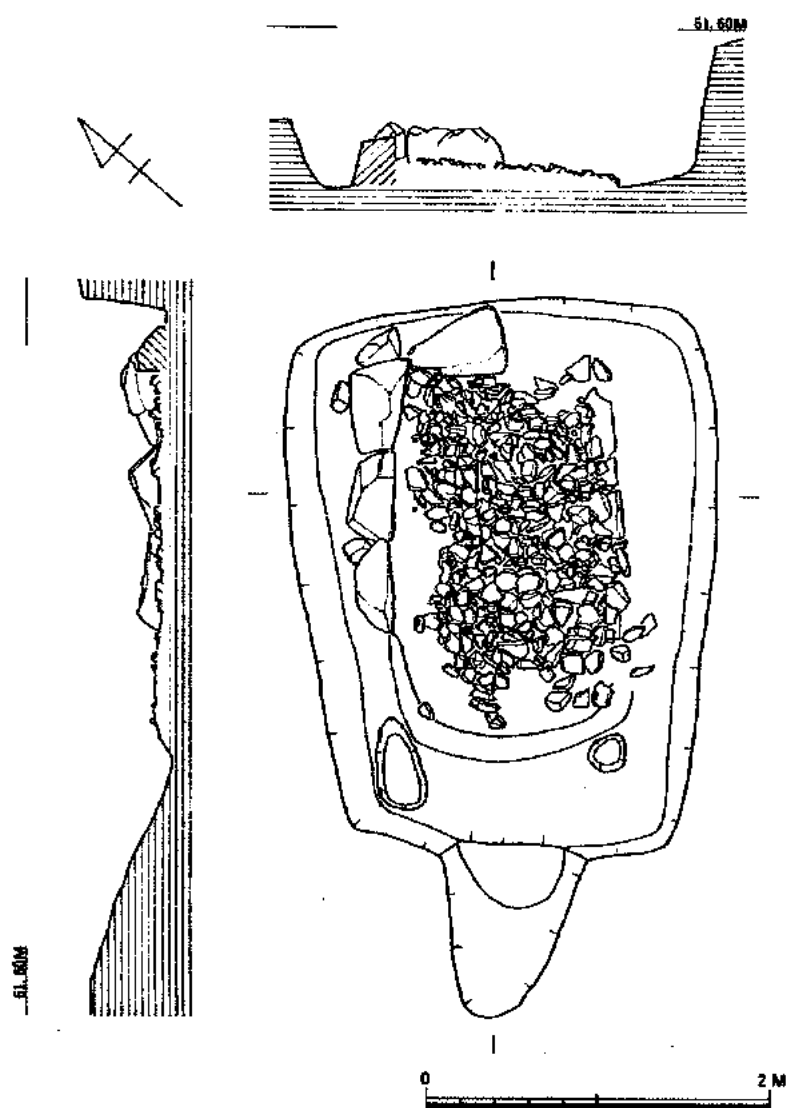
石室は、西側壁に3石、北奥壁に1石を遺存するのみで、石室構造を詳細に把握することはできないが、床面敷石と石材抜き痕などから推測すると中央部で長軸約2.2m、幅1.3mを測るやや胴の張る長方形プランを呈するものと思われる。遺存する腰石は、やや大振りの砂岩ホルンフェルスを使用し、奥壁に2石、西側壁に5石、東側壁にもこれに近い個数の石材を使用して壁体を構成していたものと思われる。石室前面には前庭壁を付加していたかいないかは現状では明確にできなかった。

(2) 出土遺物

玄室内床面奥壁西端からガラス製玉類が円径12cm程の範囲内に47個体一括して出土した。そのガラス製玉類が一括して出土した地点から東へ10cm、南へ20cm程離れた地点から耳環がそれぞれ1個ずつ出土した。奥壁中央部から40cm程入口側に出た地点からは、水晶製勾玉が1個出土している。馬蹄形溝からは須恵器の有蓋高杯の蓋と甕が出土した。

装身具	玉類	47個体
	勾玉	1個
	耳環	2個
須恵器	有蓋高杯蓋	1個体
	甕	1個体

第2章 城ヶ谷古墳群



第16図 第34号墳主体部実測図 (1/40)

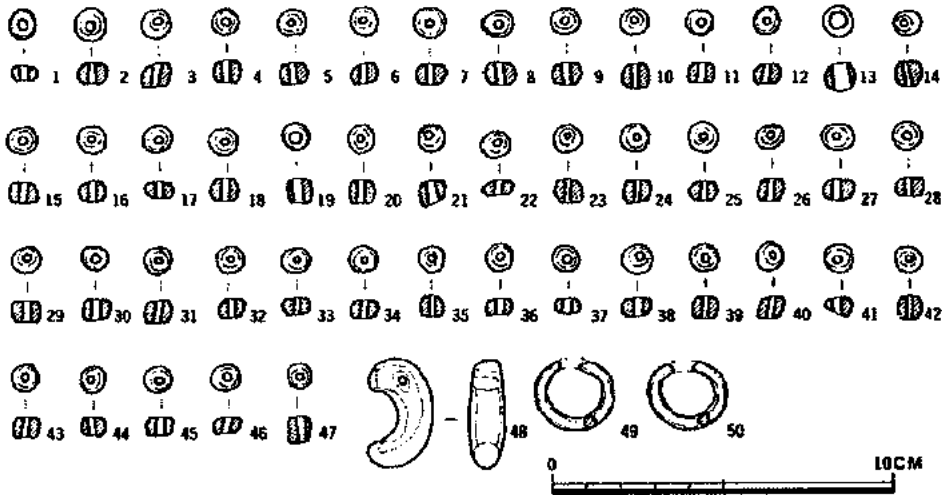
装身具 (第17図)

丸玉 (1～47) ガラス製品である。ほとんどが径10mm内外のものである。色調は暗青色を呈している。

2. 発掘調査の記録

勾玉 (48) 水晶製品で、色は透明である。長さは33mmを測る。穿孔は一方からのみ行なわれている。

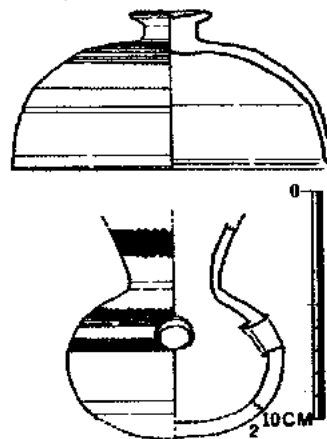
耳環 (49・50) 2個とも銅の地金に金箔を施した金環で、対をなすものである。長さ24mm、短径21mmである。環の断面は長径4mm、短径3mmの円形である。



第17図 第34号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)

須恵器 (第18図)

有蓋高杯蓋 (1) 馬蹄形溝から出土したもので、体部は丸味を持って内傾して行き口縁部で直立する。杯天井部の中心に頂部を若干くぼませた扁平なつまみがつく。口縁端部は筵切りされており、斜めになって断面は凹状を呈している。調整は器高の約1/2程を筵削り調整した後に天井部中心につまみをとりつけ横ナデ調整による仕上げを施し、その後カキメ調整を施している。それ以下は回転ナデ調整である。体部と口縁部の境には1条のあまい沈線を巡らしている。内面は天井部を不定方向のナデ調整、それ以下を回転ナデ調整している。色調は内外面共に黄灰色を呈している。外面の一部に灰かぶりのため黒緑色を呈する部位がある。胎土は微砂粒の長石砂を含む精練されたものである。



第18図 第34号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

焼成は良好である。

跡(2) 頸部と球体部を遺存する破片である。球体部は最大径9.5cmと大きく頸基部は細くしまり口縁部へと外方に開いて延びるものと思われる。現状では頸部に6本を1単位とした波状文を3条連続して施している。又、球体部上半に1条の沈線を施し、これの上下にそれぞれ6本を1単位とした波状文を各1条ずつ施している。調整は球体部1/4程を銚削り調整し、それ以上を回転ナデ調整している。内面は回転ナデ調整である。穿孔は球体部中央よりやや上方に外側から内側方向に径16mmの円形のものをおこなっている。色調は外面頸部が灰かぶりのため黒黄灰色を呈し、球体部は黄灰色を呈している。内面は暗青灰色を呈している。胎土は1mm前後の石英砂及び長石砂を含む。焼成は良好である。

7) 第35号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第34号墳の南10m、第39号の北10m、標高62.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでなく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

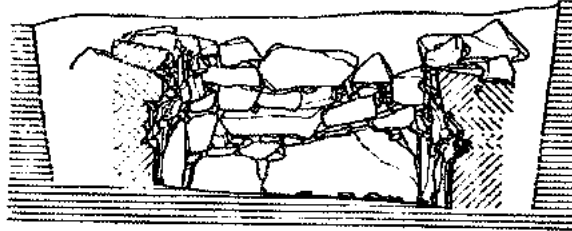
(1) 遺構

主体部(第19図) 主軸をN-32°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸4.6m、幅3m、深さ1.2mを測る長方形の掘り方である。墓道は、南西に開口し約15度の傾きを持って前方へ約1m程延びている。

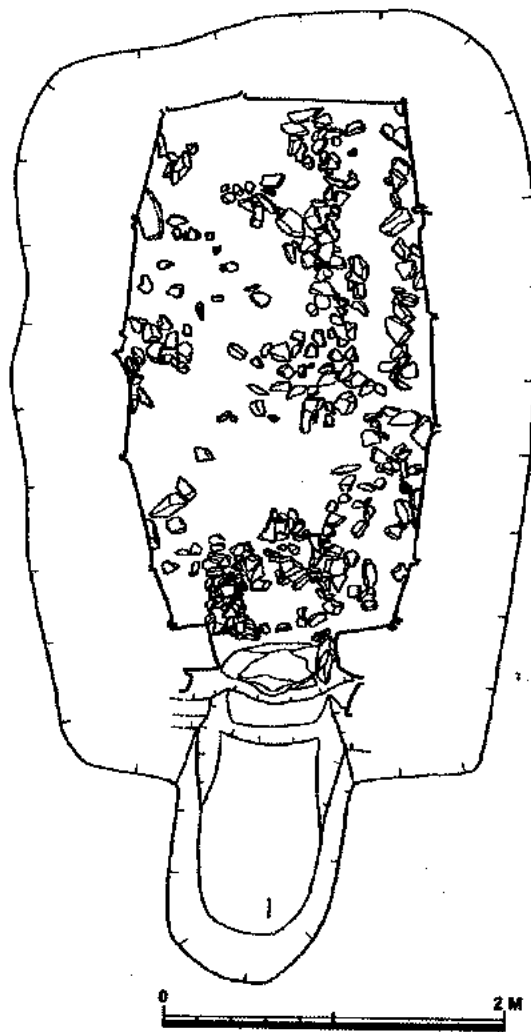
石室は、中央部で全長3.7m、長軸3.2m、幅1.8mを測る。中程でやや胴の張る両袖式の長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大振な石材を2石使用し腰石となし、腰石上面が水平になるように小礫を積み、その上に礫塊をほぼ水平になるように横積みしてほぼ垂直に積み上げている。西側壁は、3石の砂岩ホルンフェルスと2石の礫岩ホルンフェルスの計5石のやや大振な石材を使用して腰石となし、腰石上面をほぼ水平にしている。その上段をやや横口部に傾斜はしているが、ほぼ水平に石積みしている。東側壁も腰石の石材が砂岩ホルンフェルスである以外は西側壁と同様な構築方法をとっている。又積石間には小礫を持ちいて目張りされている。玄門部は、東西両側壁からそれぞれ30cm、20cm程石材を突出させて両袖を形成している。両袖石とも上に2段程積み石しており、床面からの高さは1m程である。袖石間の幅は70cmで、この間に幅25cmの仕切石1石を置く。この仕切石により、この上面と床面敷石との間に30cm程の段差をつけている。又この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ1石の礫塊を置き順次石材数を増す石積みである。

2. 発掘調査の記録

62.8066



62.8067



第19図 第35号墳主体部実測図 (1/40)

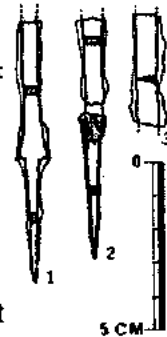
(2) 出土遺物

玄室内から鉄鏃3本を検出した。墓南側、表土から須恵器の埴輪1個体を検出した。

武具	鉄鏃	3本
須恵器	埴輪	1個体

武具 (第20図)

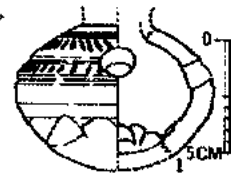
鉄鏃 (1~3) 1~3すべて破片である。1は筥被の一部と茎を遺存するもので、筥被断面は長方形で茎断面は円形である。筥被と茎の間に段を有する。現存長8cmを測る。2は筥被の一部と茎を遺存するもので、筥被断面は長方形で茎断面は円形である。筥被と茎の間には段が無く茎にはこれと平行の木目を持つ木片が遺存する。現存長7.5cmを測る。3は身の断面が背幅2mmの長三角形を呈しているところから片刃矢式の身の破片ではないかと思われる。現存長3.5cmを測る。



第20図 第35号墳
出土遺物実測図Ⅰ
(1/2)

須恵器 (第21図)

埴輪 球体部のみを遺存する破片である。最大径8.8cmを中央部とするもので、この中央部よりやや上方に径1cmの穿孔を施している。球体部上半に2条の沈線を巡らし、その上に施状工具による刺突文を施す。調整は底部より球体1/2程を静止磨削調整、肩部から頸部にかけてはカキメ調整を施している。内面は底部に指おさがみられ、それ以上はナデ調整である。指おさがみられることから、型に粘土をおさえこんで球体部を成形したものと思われる。色調は内外面共に黄灰色を呈している。胎土は長石砂を少量含むものである。焼成は良好である。



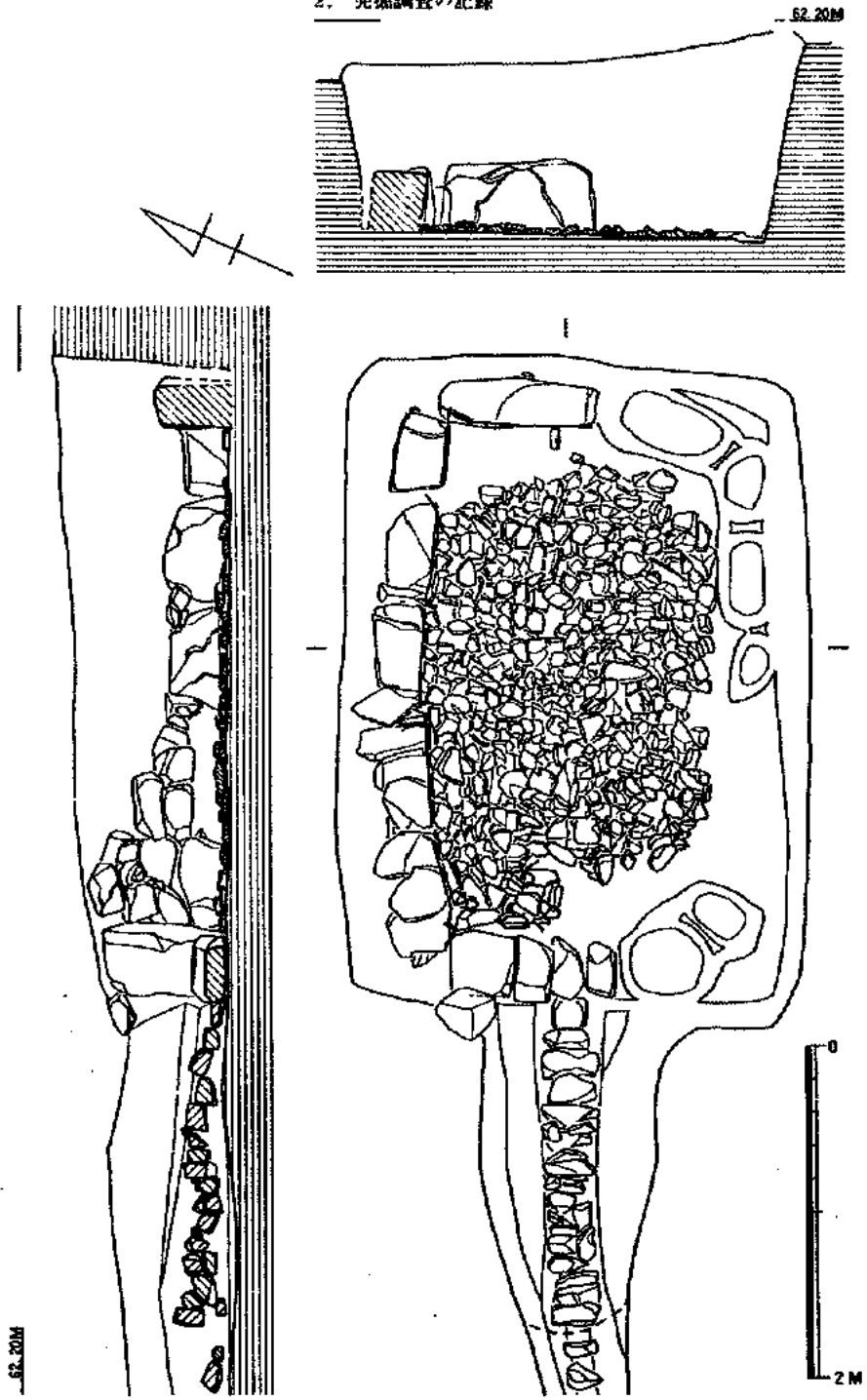
第21図 第35号墳出土
遺物実測図Ⅱ (1/3)

8) 第36号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第33号墳の南13m、標高62mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳南側の馬蹄形溝から推測すると8mから10mの円墳と思われる。

2. 発掘調査の記録



第22図 第36号墳主体部実測図 (1/40) - 32 -

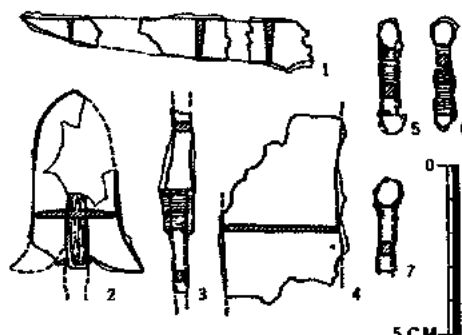
(1) 遺構

主体部(第22図) 主軸をN-67°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸4.1m、幅2.8m、深さ1.2mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西に開口し約9度の傾きを持って前方へ約2m程延びている。当古墳では、特に墓道下に排水施設をつくりつけている。これは西に開口する墓道下に3.5m西に延び、南西へ2m程曲って延びる溝を掘り、この溝の上に石材を置き、暗渠をつくっている。

石室は、中央部で全長3.5m、長軸3.1m、幅1.8mを測る中程でやや順の張る長方形プランを呈している。壁体の構築は、南側壁で石材が抜き取られているので詳細を把握することはできないが、敷石や石材抜き痕などから推測すると、奥壁には砂岩ホルンフェルスの大板な石材2石を使用して腰石となしていたものと思われる。北側壁は5石のやや大板な石材を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、その上段に雑に礫塊を横積みしている。南側壁はすべてないが、北側壁と同様の構造を呈していたものと思われる。玄門部は、南北両側壁からそれぞれ50cm、35cm程石材を突出させて両袖を形成していたものと思われる。玄門部高は、床面敷石上面から70cm程である。袖石間の幅は60cmで、この間に40cm前後の幅を持つ石材3石を置き仕切石としている。この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には、袖石に続く前庭側壁などの施設を持たない。

(2) 出土遺物

玄室内から鉄鍔2本、刀子1本、不明鉄器4個を検出した。墓道埋土からは須恵器2個体、土師器1個体を検出、馬蹄形溝からは須恵器の杯蓋1個体を検出した。

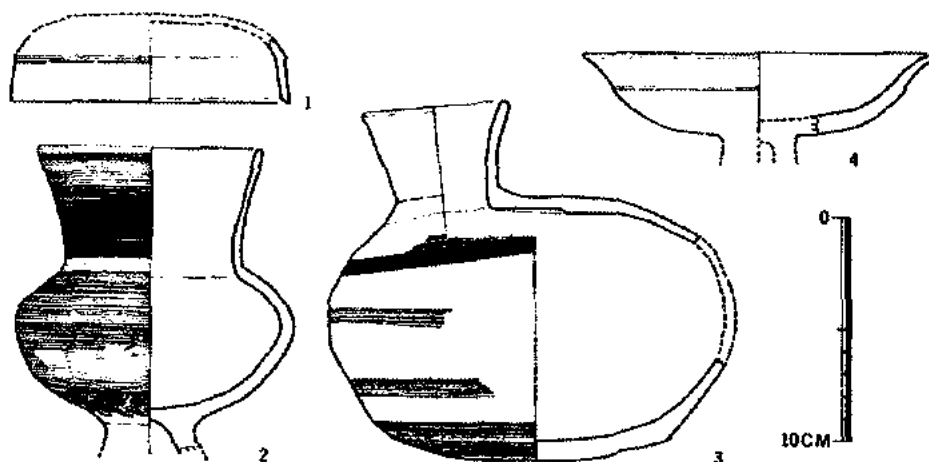


武器(第23図)

鉄鍔(2・3) 2は鍔の身を遺存している。平根式に属するもので、両丸造脇挾三角形 第23図 第36号墳出土遺物実測図Ⅰ(1/2)式であろう。3は筥被の一部と茎を遺存している。筥被の断面は長方形を呈し、茎断面は円形である。現存長は5.5cmである。

刀子(1) 鋒と身の一部と間を遺存している。間の部位に木質が遺存している。身の断面は、背幅2mmの長三角形を呈している。現存長8.5cmである。

不明鉄器(4~7) 4は現存長5cm、幅3.5cm、厚さ1mmの鉄板状のものである。5~7は断面円形の棒状のもので両端は球形を呈している。棒状の部位には木質が遺存している。



第24図 第36号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

須恵器 (第24図)

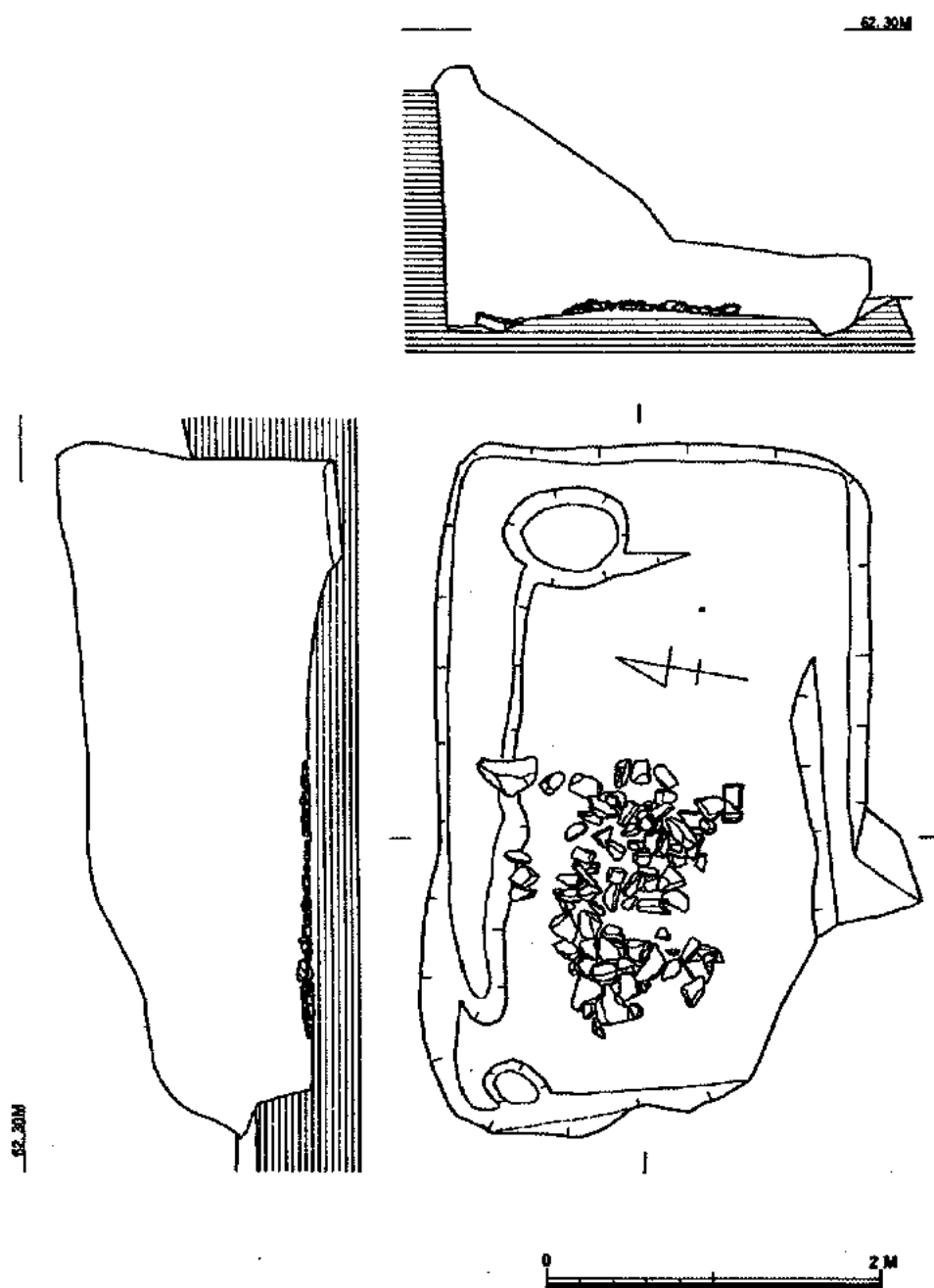
杯蓋 (1) 馬蹄形溝からの出土である。口縁部から体部にかけての破片で体部と口縁部の境に1条のあまい沈線を巡らしている。天井部は平坦になるものと思われる。口縁端部は斜めに篋切りされている。調整は現存する部位では、内外面共に回転ナデ調整している。色調は外面が黒灰色を呈し、内面は、淡灰色を呈している。胎土は1mm前後の長石砂を含むものである。焼成は良好である。

脚付直口壺 (2) 墓道埋土からの出土である。口頸部は、若干外に開くように直立しており、口縁端部は丸くおさめられている。胴部最大径は中央部よりやや上方に位置している。脚部はラッパ状に開くものと思われる。体部には全面カキメ調整で底部には4本1単位の波状文を2条施している。脚部は横方向のナデ調整である。内面調整は横方向のナデ調整である。色調は外面が黒紫色を呈している。灰かぶりのため肩部以上は黄灰色を呈する。内面は灰色を呈している。胎土は微砂粒を少量含む精練されたものである。焼成は良好である。

平瓶 (3) 墓道埋土からの出土である。口頸部は外へ直線的に開くもので、口縁端部は丸くおさめられている。胴部最大径は中央部よりやや上方にある。調整は外面で叩き調整の後丁寧なカキメ調整とナデ調整により叩き痕を消している。肩部には篋による羽状文を施している。内面調整はナデ調整である。色調は内外面共に暗灰色を呈している。胎土は微砂粒を含むものである。焼成は良好である。

土師器 (第24図)

高杯 (4) 墓道埋土より出土したものである。杯部の破片で、底は平坦で体部はゆるや



第25図 第37号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

かに内傾し口縁部で外反する。体部と口縁部の境にはあまい段を有し区分されている。調査は風化が激しいため不明瞭である。色調は内外面共に赤褐色を呈している。胎土はほとんど砂粒を含まない精練されたものである。焼成は良好である。

9) 第 37 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上のやや南側で、第36号墳の南10m、標高61.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳北側の馬蹄形溝から推測すると8mから10mの円墳と思われる。

(1) 遺 構

主体部 (第25図) 主軸をN-81°-Eにとる単室の横穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸4m、幅2.6m、深さ0.9mを測る長方形の掘り方である。

石室は、削平を受けほとんどの石材を抜かれているため詳細を把握することはできないが、敷石や石材抜き痕等から推測して、長軸2.7m、幅1.7mを測る長方形プランを呈するものと思われる。床面は、10cm内外の角のとれた小礫を使用して敷石としている。

(2) 出土遺物

玄室内から鉄鏝1本を検出した。

武 具 (第26図)

鉄鏝 これは尖根式に属するもので、両丸造三角形式である。篋被は短かくすぐ茎へと続く。篋被の断面は長方形を呈している。現存長7cmを測る。



第26図
第37号墳出土
遺物実測図
(1/2)

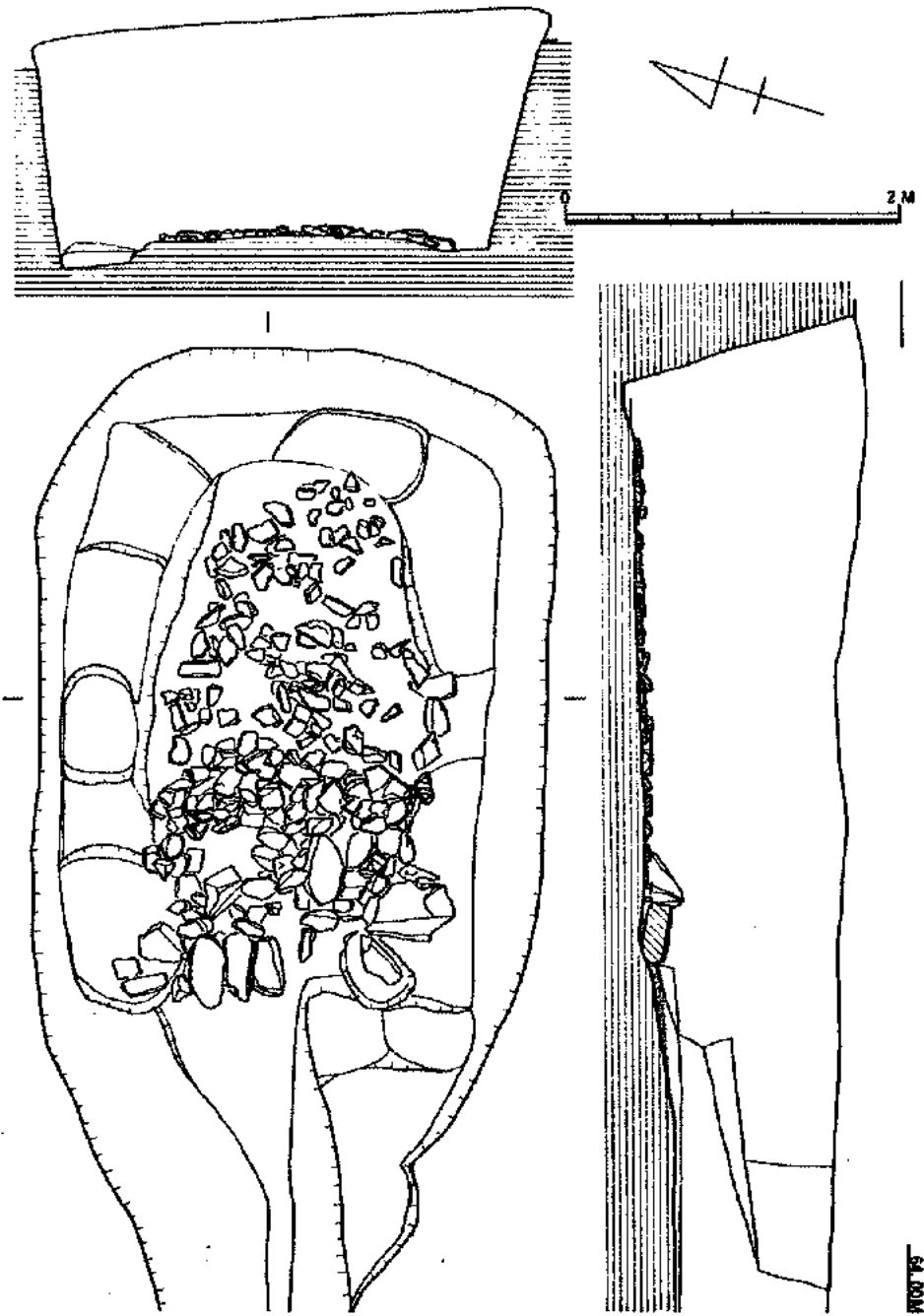
10) 第 38 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第36号墳の東10m、標高63.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳南側の馬蹄形溝から推測すると6mから8mの円墳と思われる。

(1) 遺 構

主体部 (第27図) 主軸をN-73°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長



第27図 第38号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

軸5m、幅3m、深さ1.4mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西南西に開口し、約12度の傾きを持って前方へ約1.5m程延びている。当古墳では、特に墓道下に排水施設をつくりつけている。これは、西南西に開口する墓道下に3m程西南西に延び、北西に5m程曲って延びる溝を掘り、この溝の上に石材を置き暗渠をつくっていたものと思われる。

石室は、削平を受け、ほとんどの石材を抜かれているため詳細を把握することはできないが、敷石や石材抜き痕などから推測して、長軸2.8m、幅1.7mを測る中程でやや胴の張る長方形プランを呈するものと思われる。

(1) 出土遺物

玄室内から丸玉1個、管玉1個、小玉48個と須恵器の甕を検出した。

装身具	小玉	48個
	丸玉	1個
	管玉	1個
須恵器	甕	1個

装身具 (第28図)

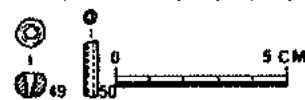
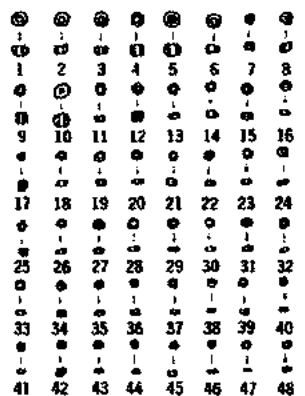
小玉 (1~48) ガラス製品である。大きさが径5mm内外のものと3mm内外のものに大別できる。前者は7個であり、後者は41個である。又色調は青色と青緑色の2色がある。

丸玉 (49) 水晶製品で、色は透明である。径8mmで穿孔は一方向からのみ行なわれている。

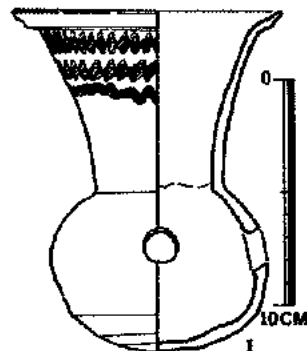
管玉 (50) 碧玉製である。長さ16mmで一方向からの穿孔である。

須恵器 (第29図)

甕 ほぼ完形品である。球体部は9.5cmと大きく胴部最大径はほぼ中央付近にありややしまりのない頸部からラッパ状に口頸部が開き、口縁部で段を有し、さらに外反して口縁端部付近でやや直立させ、端部は丸くおさめている。穿孔は1.5cm程の円を外方から内へと穿っている。調整は球体部底面に反時計回りの旋削調整で、それ以上を横ナデ調整している。口頸部上半には、6本を1単位とする波状文が3条施されている。内面は横ナデ調整である。球体部と口頸部の境には明瞭に貼付痕



第28図 第38号墳出土遺物実測図 I
(1/2)

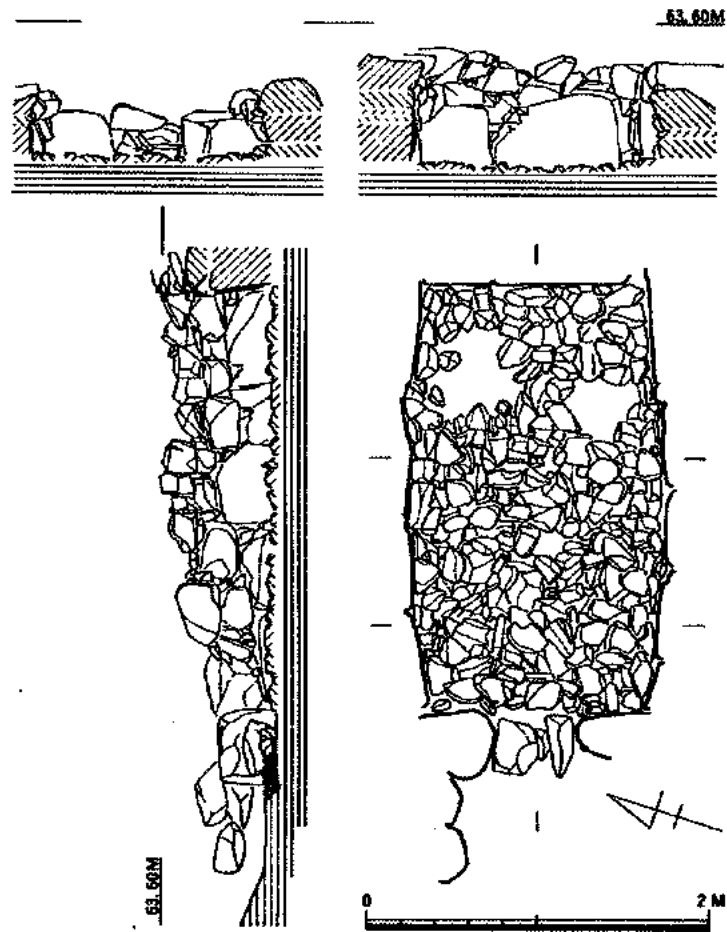


第29図 第38号墳出土遺物実測図 II
(1/3)

が観察された。色調は外面が淡青灰色を呈しており、内面が青灰色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。

11) 第39号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第35号墳の南10m、標高63mの地点に等高線と直交して存在している。



第30図 第39号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳北側の馬蹄形溝から推測して8mから10mの円墳と思われる。

(1) 遺構

主体部 (第30図) 主軸をN-73°Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸3.7m、幅2.8m、深さ0.5mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西南西に開口し、約20度の傾きを持って前方へ約0.8m程延びている。

石室は、中央部で全長3.5m、長軸2.5m、幅1.5mを測る中程でやや胴の張る長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスのやや大板な石材2石を使用し腰石となす。腰石上面はほぼ水平で、その上段は礫塊を雑に積み上げている。南側壁は砂岩ホルンフェルのやや大板な石材5石を使用して腰石となす。腰石上面は奥壁側から横口部に向って順次低くなっている。その上に礫塊を雑に積み上げている。北側壁も腰石が4石以外は南側壁と同様の構築方法である。玄門部は、南北両側壁からそれぞれ40cm程石材を突出させて、両袖を形成している。袖石間の幅は45cmで、この間に幅30cm程の礫塊2石を置き仕切石となす。この仕切石により、この上面と床面敷石との間に10cm程の段差をつけている。又この仕切石上面と墓道の高さは、同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ2石の礫塊を置きそれより上段は雑に石積みしている。床面は、15cm内外の角礫によって敷石されている。

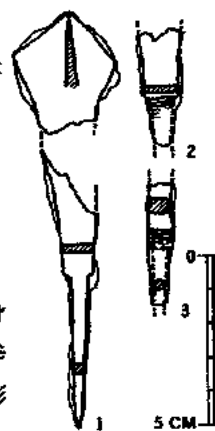
(2) 出土遺物

玄室内から鉄鏃3本を検出した。馬蹄形溝からは須恵器の提瓶1個体が出土している。

武器	鉄鏃	3本
須恵器	提瓶	1個体

武器 (第31図)

鉄鏃 (1~3) 1・2は平根式に属するものと思われる。1は身の一部を欠損しているため接合できなかったが同一個体である。主頭斧箭式であろう。現存長12.5cmである。2は斧箭式の鏃であるが、頭の形態は不明である。現存長3.5cmを測る。3は尖根式に属するものと思われる。箆被断面は長方形で茎断面は円形である。箆被と茎の境には段を有する。又、茎には木目が鏃と平行に走る木質が遺存している。現存長3.5cmを測る。



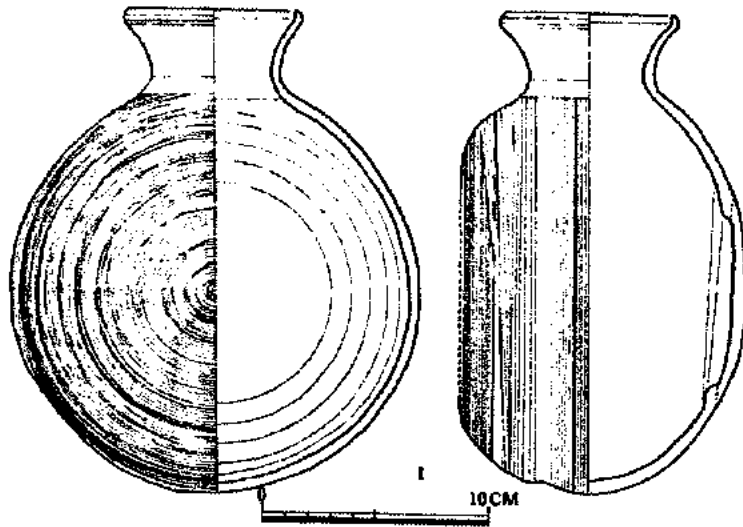
第31図 第39号墳出土
遺物実測図1 (1/2)

須恵器(第32図)

提瓶

馬蹄形溝から出土したものである。口頸部は外反しながら延び口縁端部で上方へつまみ上げている。胴部最大径は中央部にある。調整は全体にカキメ調整を施している。

口頸部は横方向のナデ調整であ



第32図 第39号墳出土遺物実測図Ⅱ(1/3)

る。内面上半は不定方向のナデ調整をおこない、下半は回転ナデ調整である。上半部ほぼ中央には径7cm程の貼付痕が観察できる。色調は内外面共に淡青灰色を呈している。胎土は1mm前後の長石砂を少量含むものである。焼成は良好である。

12) 第40号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第39号墳の南5m、標高62mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

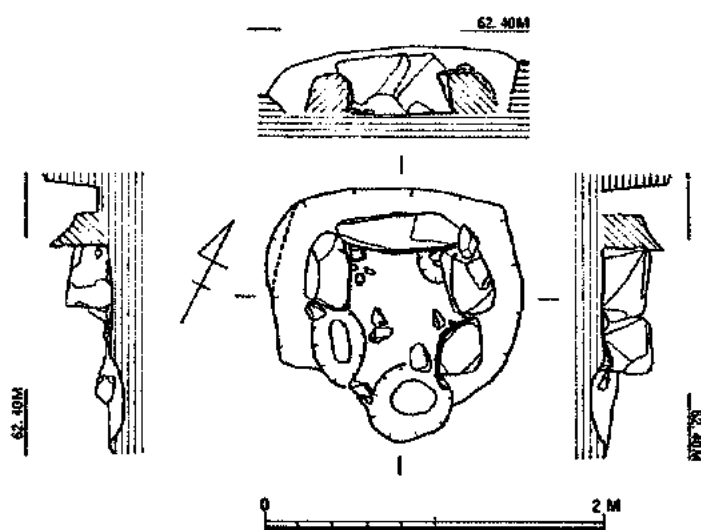
(1) 遺構

主体部(第33図) 主軸をN-27°-Wにとる小型の竪穴式石室と思われる。墓墳は、現状で長軸1.5m、幅1.5m、深さ0.5mを測る方形の掘り方である。

石室は、削平されており、その形態を詳細に把握することはできないが、遺存する石材及び石材抜き痕などから推測して長軸0.8m、幅0.6mの長方形プランを呈するものと思われる。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスの礫塊を腰石として使用し、両小口壁に各1石、両側壁に各2石を配したものである。床面には若干の小礫がみられる。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土しなかった。

2. 発掘調査の記録



第33図 第40号墳主体部実測図 (1/40)

13) 第41号墳

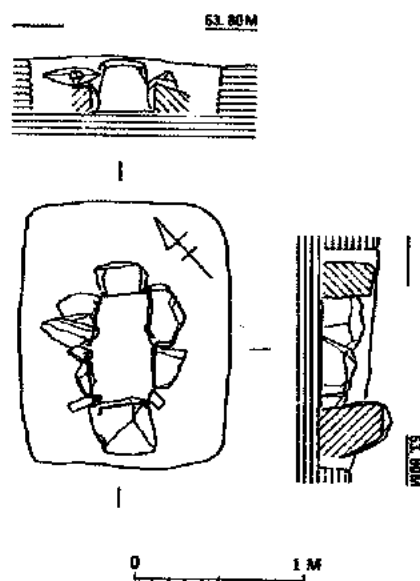
当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第39号墳の東6m、標高63.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺構

主体部(第34図) 主軸をN-44°-Eにとる小型の竪穴式石室である。墓壇は、現状で長軸1.6m、幅1.2m、深さ0.2mを測る長方形の掘り方である。

石室は、中央部で長軸0.7m、幅0.4mを測る長方形プランを呈する。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスの礫塊を腰石として使用し、両小口壁に各1石、両側壁に各



第34図 第41号墳主体部実測図 (1/40)

2石を配している。腰石から上段は現状で1列積み上げられているが、数列積み上げられていたものと思われる。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土しなかった。

14) 第42号墳

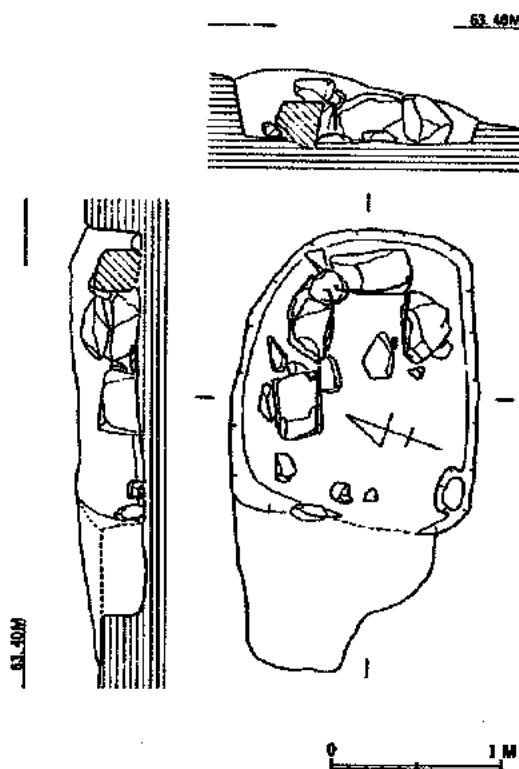
当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第41号墳の南3m、標高63mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺構

主体部(第35図) 主軸をN-71°Eにとる小型の竪穴式石室である。墓壇は、現状で長軸1.8m、幅1.5m、深さ0.4mを測る長方形の掘り方である。

石室は、削平されており、その形態を詳細に把握することはできないが、遺存する石材及び石抜き痕などから推測して長軸0.6m、幅0.5mの長方形プランを呈するものと思われる。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスの礫塊を腰石として使用し、両小口壁に各1石、両側壁に各2石を配したものと思われる。当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。



15) 第43号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第42号墳の東2m、標高63.5mの地点に等高線とほぼ平行して存

第35図 第42号墳主体部実測図(1/40)

2. 発掘調査の記録

在している。

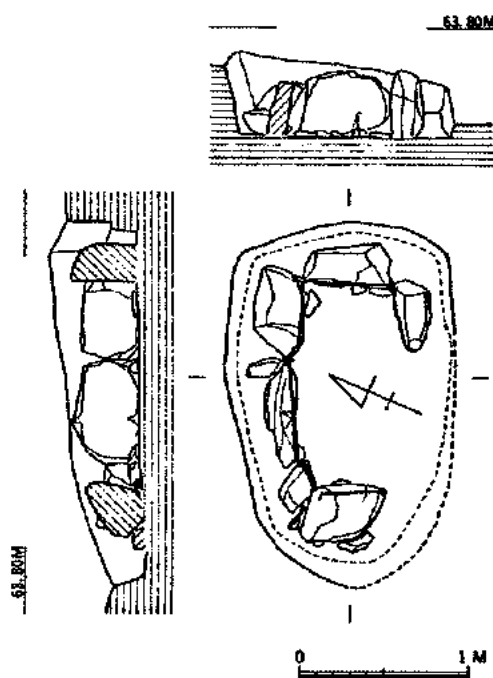
古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺 構

主体部（第36図） 主軸をN-67°-Eにとる小型の竪穴式石室である。墓壇は、現状で長軸2.2m、幅1.4m、深さ0.5mを測る長方形の掘り方である。

石室は、中央部で長軸1.3m、幅0.7mを測る中程でやや胴の張る長方形プランを呈する。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスの礫塊を腰石として使用し、両小口壁に各1石、両側壁に各3石を配したものである。東側小口壁が西側小口壁よりやや広くつくられていることから東側を頭位としたものである。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。



第36図 第43号墳主体部実測図（1/40）

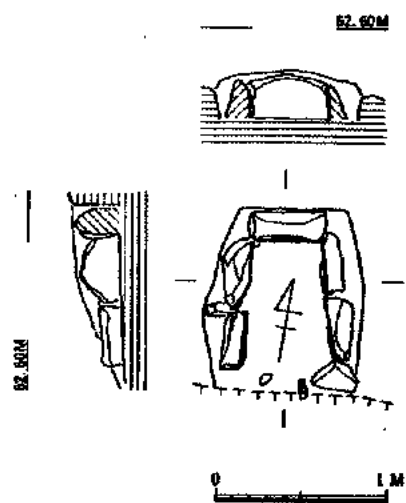
16) 第44号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第42号墳の南2m、標高62mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできない。

(1) 遺 構

主体部（第37図） 主軸をN-9°-Wにとる小型の竪穴式石室と思われる。墓壇は、南側壁を削平されており、詳細を把握することはできないが、現状で長軸1.1m、幅0.9mを測る長方形の



第37図 第44号墳主体部実測図（1/40）

掘り方である。

石室は、削平されており、その形態を詳細に把握することはできないが、現状では長軸 0.9 m、幅 0.5 m の長方形プランを呈している。壁体の構築は両小口壁に各 1 石、両側壁に各 2 石の砂岩ホルンフェルス礫塊を配して腰石としていたものと思われる。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

17) 第 45 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第38号墳の北東 8 m、標高 63.5 m の地点に等高線とほぼ平行して存在している。

(1) 遺 構

主体部 (第38図) 主軸を $N-25^{\circ}-E$ にとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸 4.7 m、幅 3 m、深さ 1.3 m を測る長方形の掘り方である。墓道は、南南西に開口し、約 20 度の傾きを持って前方へ約 1 m 程延びている。

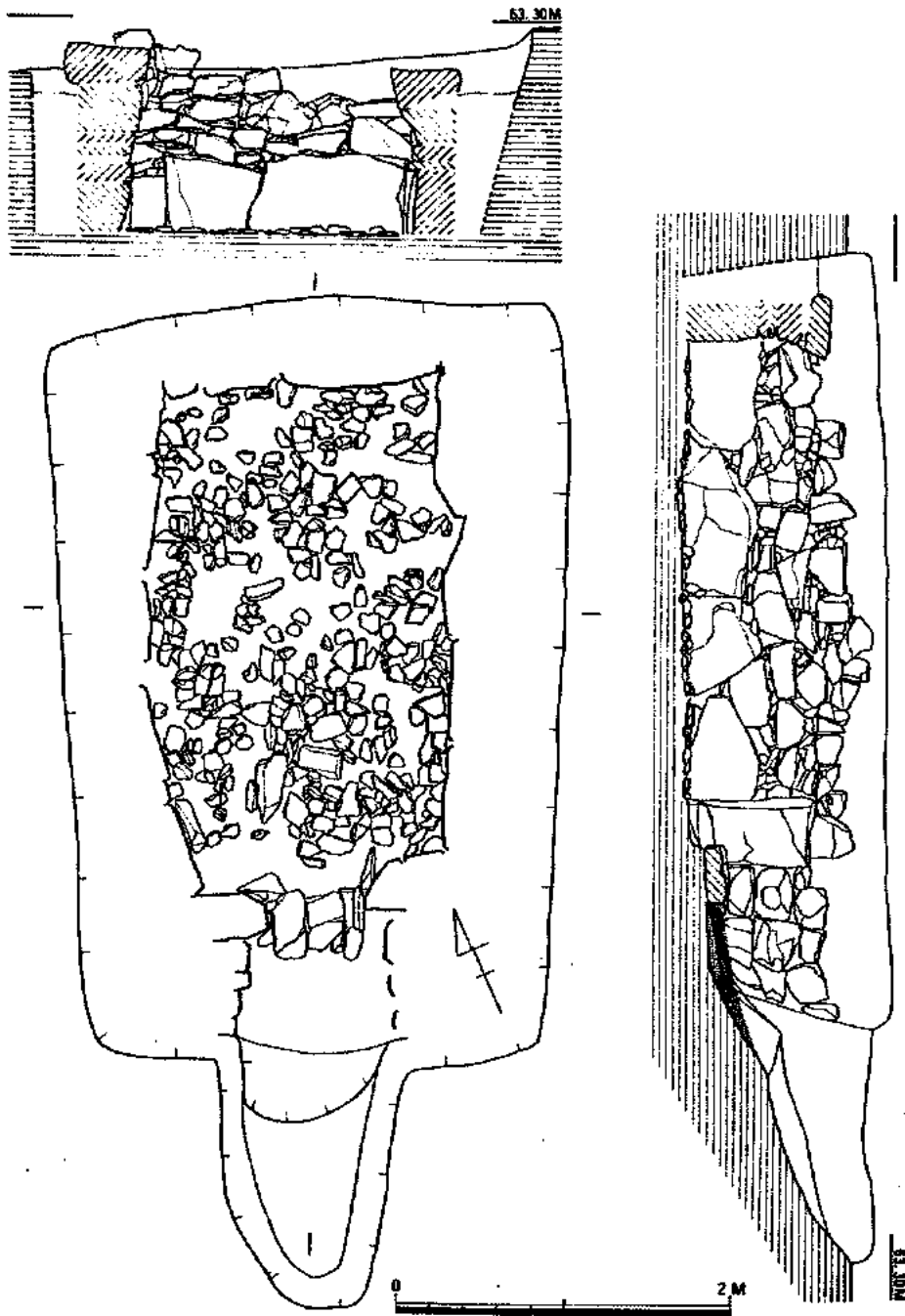
石室は、中央部で全長 4 m、長軸 3.1 m、幅 1.8 m を測る両袖式の長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に礫岩ホルンフェルスの大振な石材 1 石と砂岩ホルンフェルスの大振な石材 2 石を使用し腰石となす。腰石上面はほぼ水平で、その上段は礫塊を雜に積み上げている。東側壁は、砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材 4 石を使用し腰石となす。その上段 2 列までは垂直に石積みし、その上からはやや内傾させて積んでいる。西側壁も腰石が 5 石以外は東側壁と同様の構築方法である。玄門部は、東西両側壁からそれぞれ 40 cm 程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は現状で床面敷石から 1 m 程である。袖石間の幅は 60 cm で、この間に幅 40 cm の石材 3 石を置いて仕切石となす。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ 3 石の礫塊を置き、上段に順次礫塊を積み上げていくものである。

(2) 出土遺物

武 具 (第39図)

鉄鏃 (1~10) 玄室内床面から検出されたものである。1~4 はいずれも平根式に属するものであろう。1 は身の部位が正三角に近い形態をしており、それから内彎して短い筭被に続く。筭被から茎へは、3 mm 程の段がついて続いている。両丸造正三角形広鋒式のものと思われる。筭被断面は長方形で茎断面は円形を呈している。2~4 は身幅が狭い長三角形を呈し、身から斜めに切れこんで筭被に続くものである。両丸造長三角形広鋒式であらう。筭被断面は

2. 発掘調査の記録



第38図 第45号墳主体部実測図 (1/40)

長方形を呈している。5～10はいずれも尖根式に属するものである。7～10は刺筒鍔を持つものである。5・6は笠被から茎へと直線的に続くものである。

18) 第46号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第39号墳から東15m、標高64mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺構

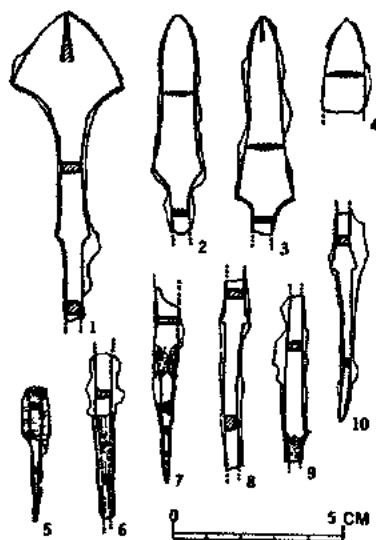
主体部(第40図) 主軸をN-75°Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸3.9m、幅2.5m、深さ1mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西南西に開口し、約10度の傾きを持って前方へ約1m程延びている。

石室は、中央部で全長3m、長軸2.7m、幅1.5mを測る両袖式のもので、奥壁がやや広がる羽子板状プランを呈する。壁体の構築は、砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材3石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平で、その上段の石積みも丁寧に積まれている。北側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材4石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平で、その上段は雑に石積みしている。南側壁も北側壁と同様な構築方法である。玄門部は、南北両側壁から約20cm程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は現状で80cm程である。袖石間の幅は50cmで、この間に幅30cm程の仕切石1石を置く。石室前面には袖石に続く前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ1石の礎塊を置き、この上段に垂直に石積みしている。

(2) 出土遺物

玄室内床面より土製丸玉10個、ガラス製小玉2個、鉄鏃13本、鉄刀1振、刀子2本を検出した。この内、鉄刀は北側壁の中央部付近から出土した。この鉄刀は中央部付近で折り曲っており、刀身が鋒を横口部に向けて北側に平行であり基部が北側壁方向に曲った状態で出土した。

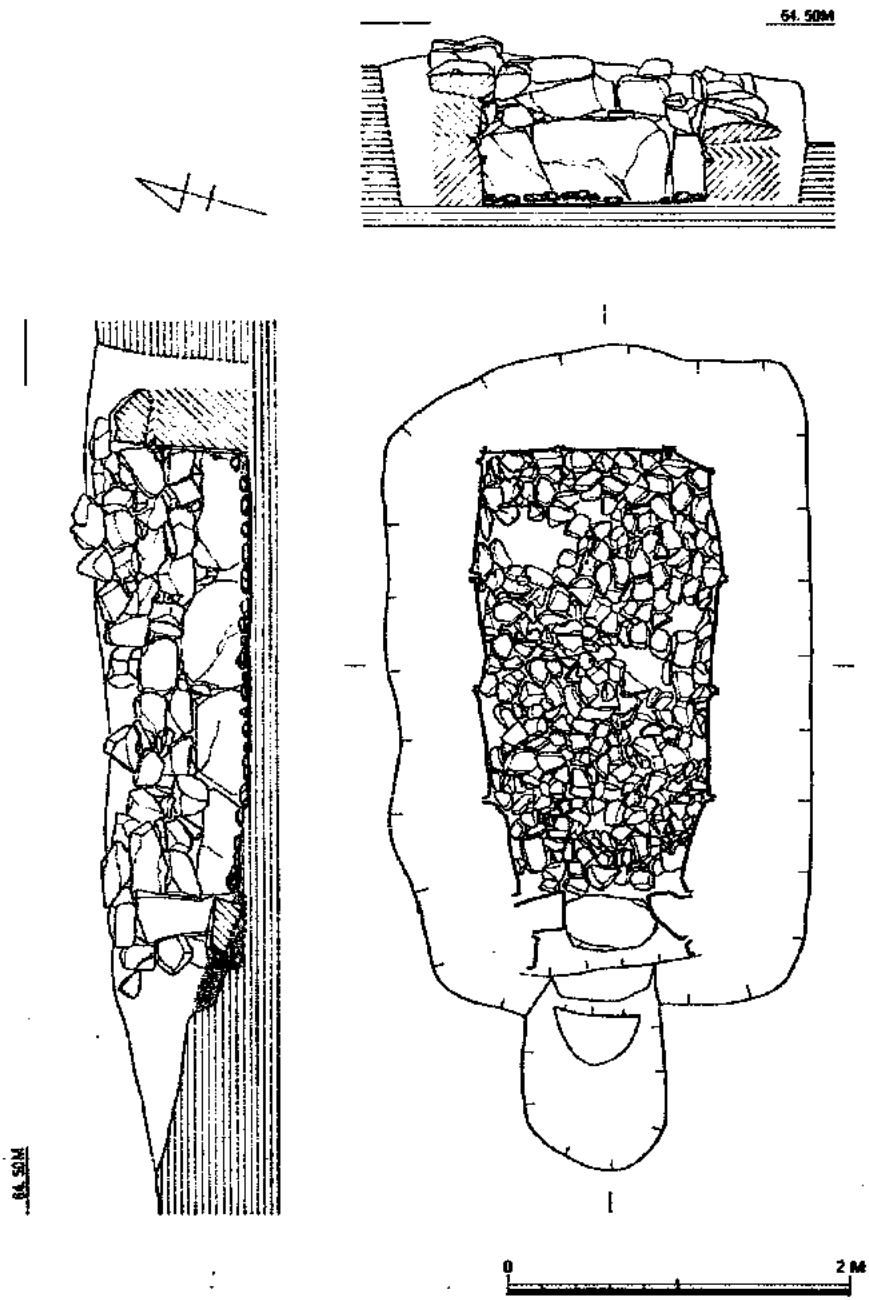
装身具	丸玉	10個
	小玉	2個



第39図 第45号墳出土遺物実測図

(1/2)

2. 発掘調査の記録



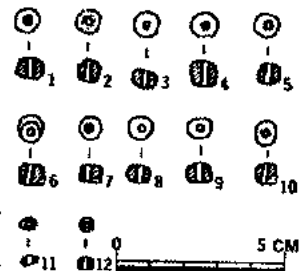
第40図 第46号墳主体部実測図 (1/40)

第2章 城ヶ谷古墳群

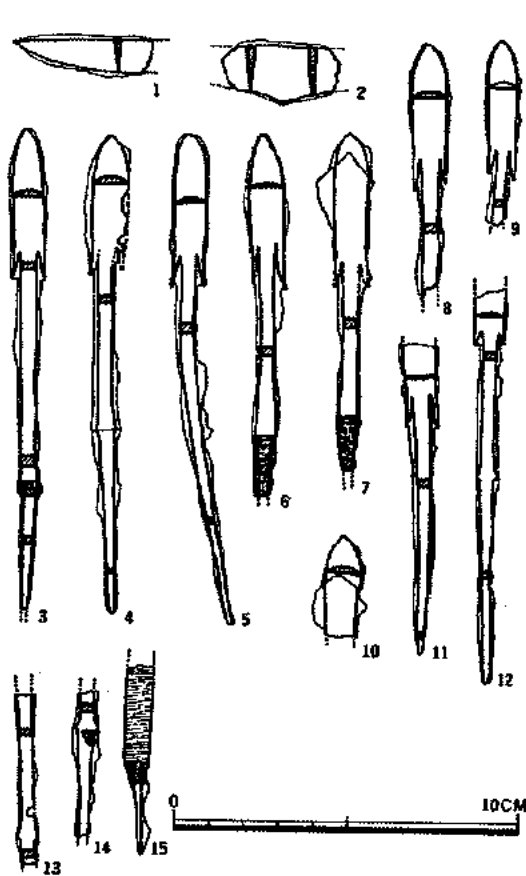
武器具	鉄 鏃	13本
	鉄 刀	1振
農工具	刀 子	2本

装身具 (第41図)

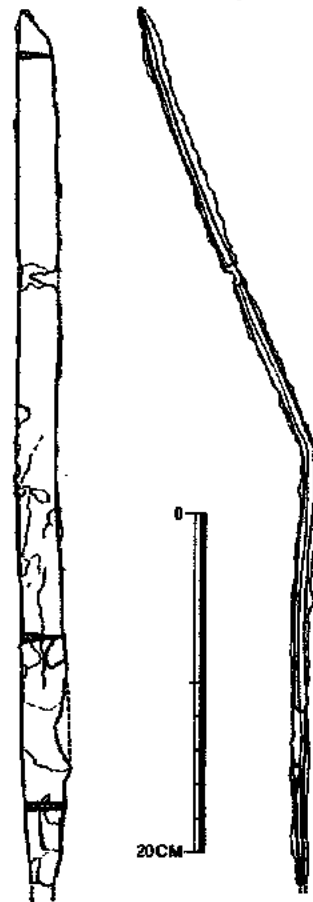
丸玉 (1~10) 1~10いずれも土製品である。ほとんどが同様の形状で径8mm内外のものである。色調は黒褐色を呈している。



第41図 第46号墳出土遺物
実測図Ⅰ (1/2)



第42図 第46号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)



第43図 第46号墳出土遺物実測図Ⅲ
(1/4)

2. 発掘調査の記録

小玉 (11・12) 11・12いずれもガラス製品である。どちらも形状は径5mm内外で色調は明るい青色を呈する。

武器 (第42図)

鉄鏃 (3~15) 3~15いずれも尖根式に属するものと思われる。3~12は身の断面が片丸造りであり腸状を有している。片丸造腸状鏃式であろう。13~15は篋被の破片である。13・14は刺篋被である。15は木質を遺存している。

鉄刀 (第43図) 全長53.4cm、幅2.5cmの小振の直刀である。身の中央部付近で折り曲っている。刀身は平造りで背幅4mm程の長三角形の断面である。茎断面は長台形を呈している。身長46.4cmを測る。

農工具 (第42図)

刀子 (1・2) 1は鋒の一部を遺存するものである。現存長は4cmである。2は間を遺存するものである。現存長は3cmである。

19) 第47号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第49号墳の東15m、標高66.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳北側の馬蹄形溝から推測すると8mから10mの円墳と思われる。

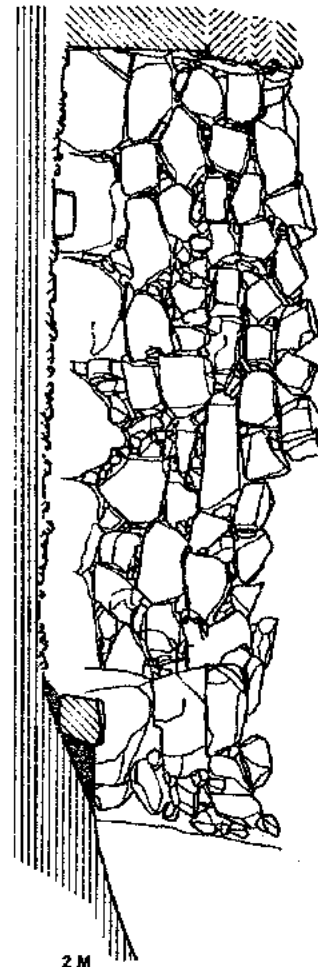
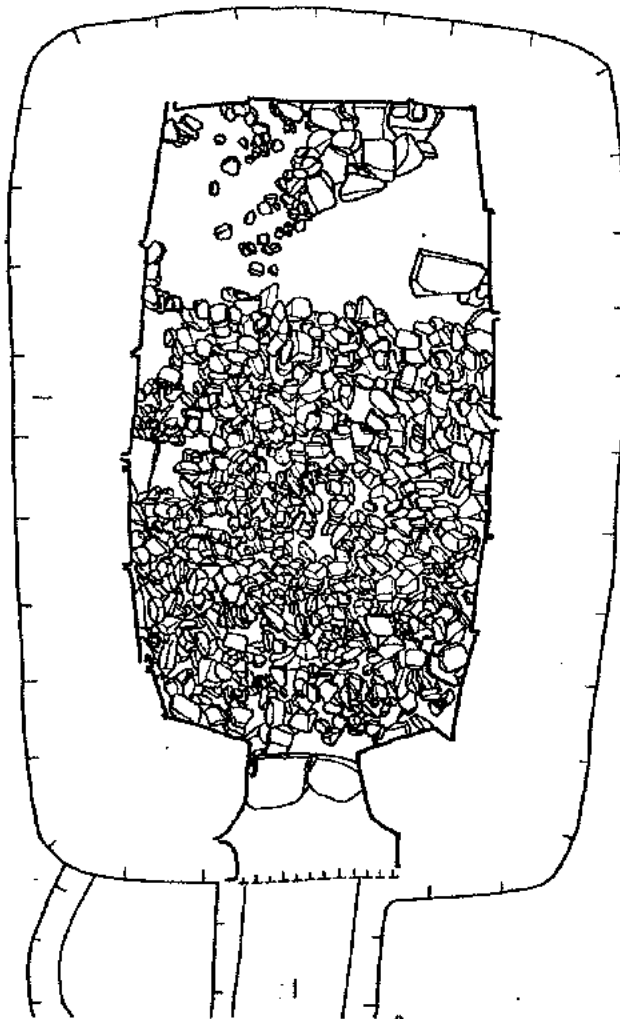
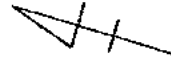
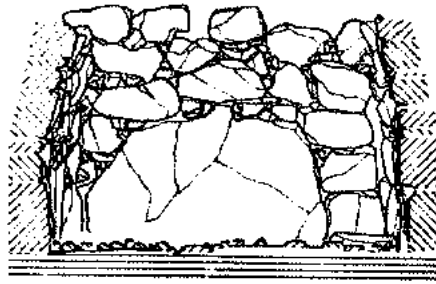
(1) 遺構

主体部 (第44図) 主軸をN-73°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸5.3m、幅3.6m、深さ1.8mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西に開口し、約20度の傾きを持って前方へ約3.2m程延びている。

石室は、中央部で全長4.6m、長軸3.9m、幅2.1mを測る中程でやや胴の張る両袖式の長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大振な石材1石を使用して腰石となし、側壁との間に礫塊をつめて腰石上面が水平になるように整えている。その上に礫塊を水平に積んでいる。南側壁は砂岩ホルンフェルス5石と礫岩ホルンフェルス1石の計6石のやや大振な石材を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に積んでいる。北側壁も南側壁と同様の構築方法である。玄門部は、南北両側壁からそれぞれ50cm程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は、現状で床面敷石上面から1.4m程を測る。袖石間の幅は70cmで、この間に幅35cm程の石材2石を置き、仕切石となす。この仕切石により、床面との間に約35cmの段差がつく。又この仕切石の上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を

第2章 城・谷古墳群

56.80M



0 2 M

56.80M

第44図 第47号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

持つ。石室前面には横石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ1石の礎塊を置き、それより上段は順次石材数を増す積み方で逆三角形を呈するものである。

(2) 出土遺物

玄室内より耳環10個、勾玉2個、管玉3個、竇玉1個、切子玉1個、丸玉98個、連玉5個、小玉31個、鉄鏃7本、刀子1本を検出した。又馬蹄形溝から須恵器の杯蓋1個体、竈2個体を検出した。

装身具	丸玉	47個
	丸玉	51個(土製)
	連玉	5個
	小玉	31個
	竇玉	1個
	切子玉	1個
	勾玉	2個
	管玉	3個
	耳環	10個
	鉄鏃	7本
武器	刀子	1本
農具	刀子	1本
	杯蓋	1個体
須恵器	杯蓋	1個体
	竈	2個体

装身具(第45図)

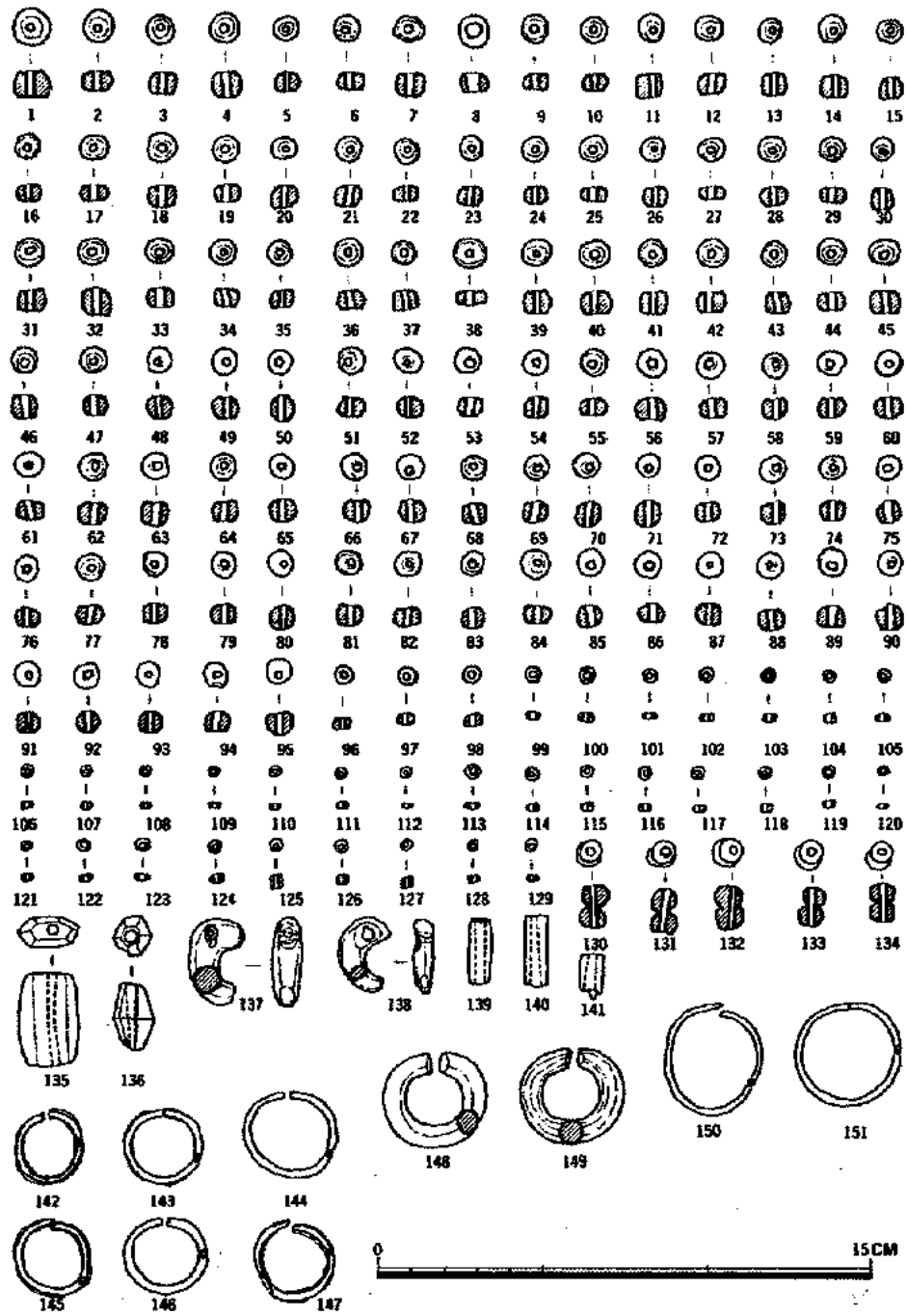
丸玉(1~98) 1はメノウ製品である。径12mmのもので2mmの穿孔がある。48~98はいずれも土製品である。径10mm内外でほぼ円形に近い。色調は黒褐色である。

2~47の丸玉はガラス製品である。径はいずれも10mm内外である。厚みが8mm内外でほぼ円形に近いものと、厚みが5mm内外で扁平なものとに大別できる。前者が26個、後者が20個である。

連玉(99~103) 土製品が4個、ガラス製品が1個である。丸玉が2個連なったもので意図的に製作されたものか、作業工程で偶然にできたものかは明確でない。

小玉(104~134) ガラス製品である。いずれも径4mm内外のものである。色調で暗青色を呈するものと、黄色を呈するものと淡い緑色を呈するものに大別できる。暗青色のものは27個、黄色のものは2個、淡い緑色のものは2個である。

竇玉(135) 水晶製品である。長さ29mmで両端からの穿孔である。



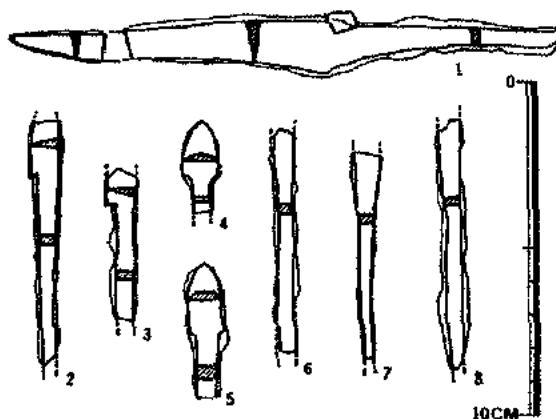
第45圖 第47号墳出土遺物実測図1 (1/2)

2. 発掘調査の記録

切子玉 (136) 水晶製品である。長さ21mmで一方からのみ穿孔している。

勾玉 (137・138) 137 はノウ製品で赤褐色を呈している。長さ28mmで一方からの穿孔である。138は黒色を呈している。長さ23mmで一方からの穿孔である。

管玉 (139~141) いずれも碧玉製品である。一方からのみの穿孔で、139 は長さ20mm、140 は22mm、141 は14mmである。



第46図 第47号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)

耳環 (142~151) 142 は長径22mm、短径20mm、断面2mmを測る細身なもので、当古墳出土の耳環の中では最も小さい。これに対をなす耳環は検出されていない。143・144は対をなすものであろう。いずれも長径24mm、短径23mm、断面3mmと2mmを測る細身なものである。145・147は長径が25mmと24mm、断面が3mmと2mmを測り、相違しているが、短径24mmと一致しており、形態が細身であることから対をなすものと思われる。146 は長径28mm、短径27mm、断面2mmを測る細身なものである。これに對をなす耳環は検出されていない。148・149は短径が32mmと30mmで、相違しているが、長径が32mm、断面7mmと一致しており、形態が肉厚であることから對をなすものと思われる。150・151 は短径が30mmと32mmで相違しているが、長径が32mm、断面2mmと一致しており、形態が細身であることから對をなすものと思われる。

武器 (第46図)

鉄鏃 (2~8) いずれも尖根式に属するものと思われる。2・3は身と筈被の破片である。身は背幅3mmの断面長三角形で筈被断面は長方形である。片刃矢式であろう。4・5は身の断面が片丸造りで筈被は長方形である。片丸造鑿箭式であろう。6~8はいずれも筈被と茎の破片である。

農工具 (第46図)

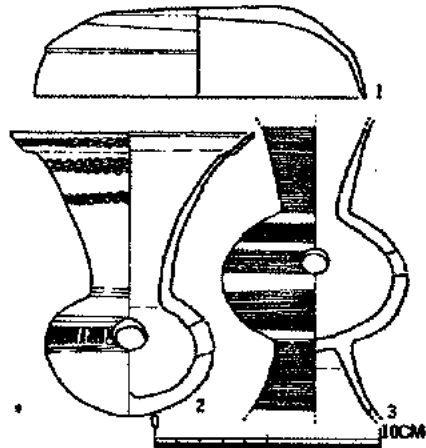
刀子 (1) ほぼ完形であるが、身の一部を欠損する。現存長16cm、茎長6cmを測る。

須恵器 (第47図)

杯蓋 (1) 天井部が平坦でゆるやかに内傾し、口縁部で直立するものである。口縁端部は筈切りにより斜めに整えられている。体部と口縁部の境にはあまい沈線が巡り明瞭に区分されている。調整は天井部で時計回りの轆轤を使用して筈削り調整している。それ以下は回転ナ

デ調整である。内面は天井部で不定方向のナデ調整をしている。それ以下は回転ナデ調整である。色調は内外面共に淡灰色を呈している。胎土は1mm前後の砂粒が少量含まれる精練されたものである。焼成は良好である。

肆(2・3) 2はほぼ完形に近いものである。球体部は7.4cmで中央部に最大径を持つものである。頸部はしまっており、それからラッパ状に口頸部が開き、口縁部でやや水平に引いた後、外方へ立ち上る。口縁端部は、篋切りされており、斜めに整えられている。穿孔は1.5cm程の円を外方から内へと穿っている。調整は外面でナデ調整しており、口縁部に6本1単位の波状文を1条施し、頸部上半に2条



第47図 第47号墳出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

施している。球体部中央には上下のあまい沈線の間に刺突文を巡らしている。内面は球体部底に板状工具によるナデ調整を施し、それ以上を横方向のナデ調整している。色調は内外面共に淡灰色を呈している。外面の一部で火まわりのためか黒灰色を呈している部位がある。胎土は1mm前後の砂粒を少量含むものである。焼成は良好である。3は脚付縁である。口縁部と脚裾部を欠く。球体部は8cmで中央部よりやや下位に胴部最大径を持つ。頸部はしまっており、それから口頸部がラッパ状に開くものと思われる。穿孔は1.1cm程の円を外方から内へと穿っている。調整は外面でナデ調整を施し、その後にかきメ調整を全面に施している。内面は横方向のナデ調整である。色調は外面が暗灰色を呈している。内面は脚部が灰色で、他は暗灰色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。

20) 第48号墳

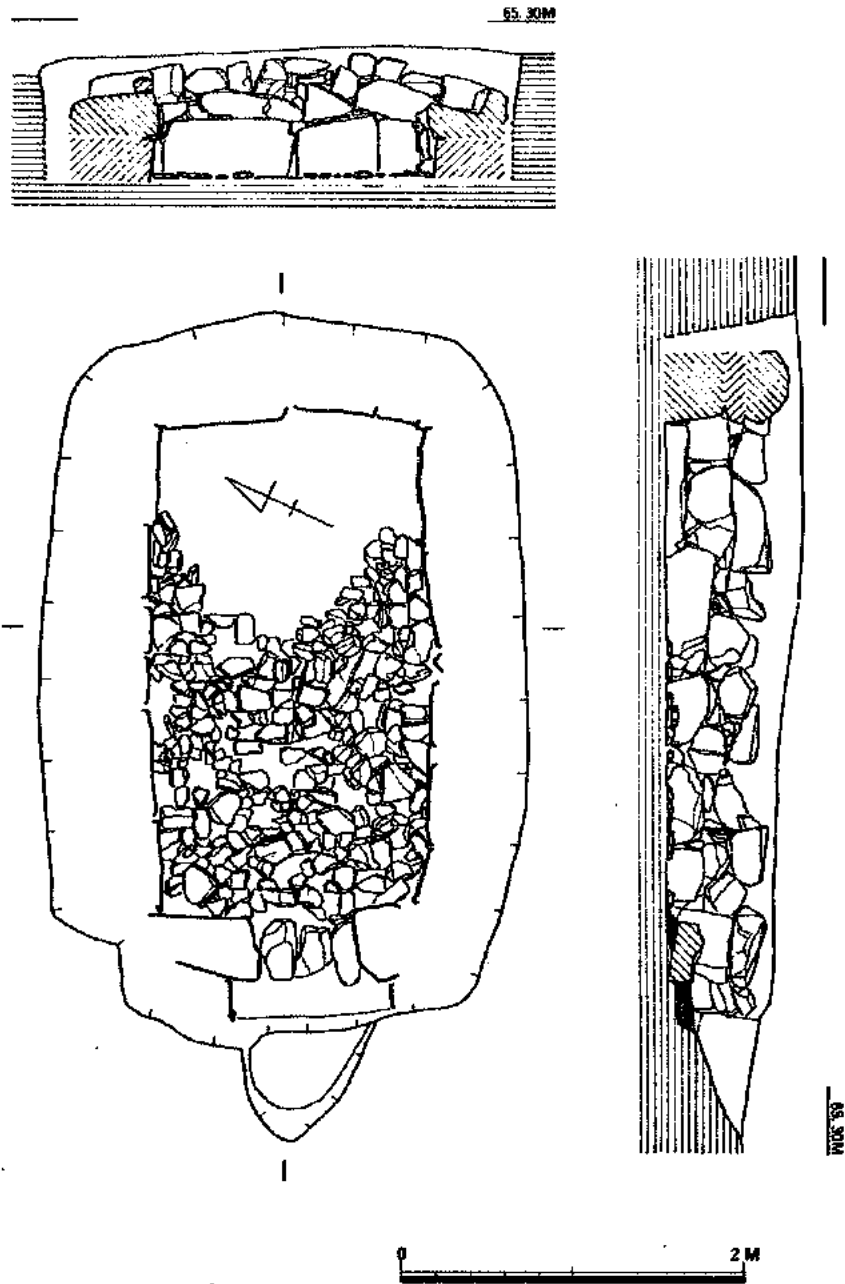
当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第45号墳の南東12m、標高65mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺構

主体部(第48図) 主軸をN-66°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸4.1m、幅2.9m、深さ0.9mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西に開口し、約20度の傾きを持って前方へ0.9m程延びている。

2. 発掘調査の記録



第48図 第48号墳主体部実測図 (1/40)

石室は、中央部で全長 3.6 m、長軸 2.9 m、幅 1.7 m を測る中程でやや胴の張る両袖式の長方形プランを呈している。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材を 3 石使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、この上段に礫塊を雑に積み上げている。南側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊 5 石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、この上面に礫塊を雑に積み上げている。北側壁も腰石 6 石を使用している以外は南側と同様な構築方法である。玄門部は、南北両側壁から約 50cm 程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は、現状で 60cm 程である。袖石間の幅は 50cm で、この間に幅 40cm 内外の石材 3 石を置き仕切石となす。この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ 1 石の礫塊を置き、それより上段は順次石材を増す積み方で逆三角形を呈するものである。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

21) 第 49 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第 48 号墳の南東 12m、標高 65.5m の地点に等高線に直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

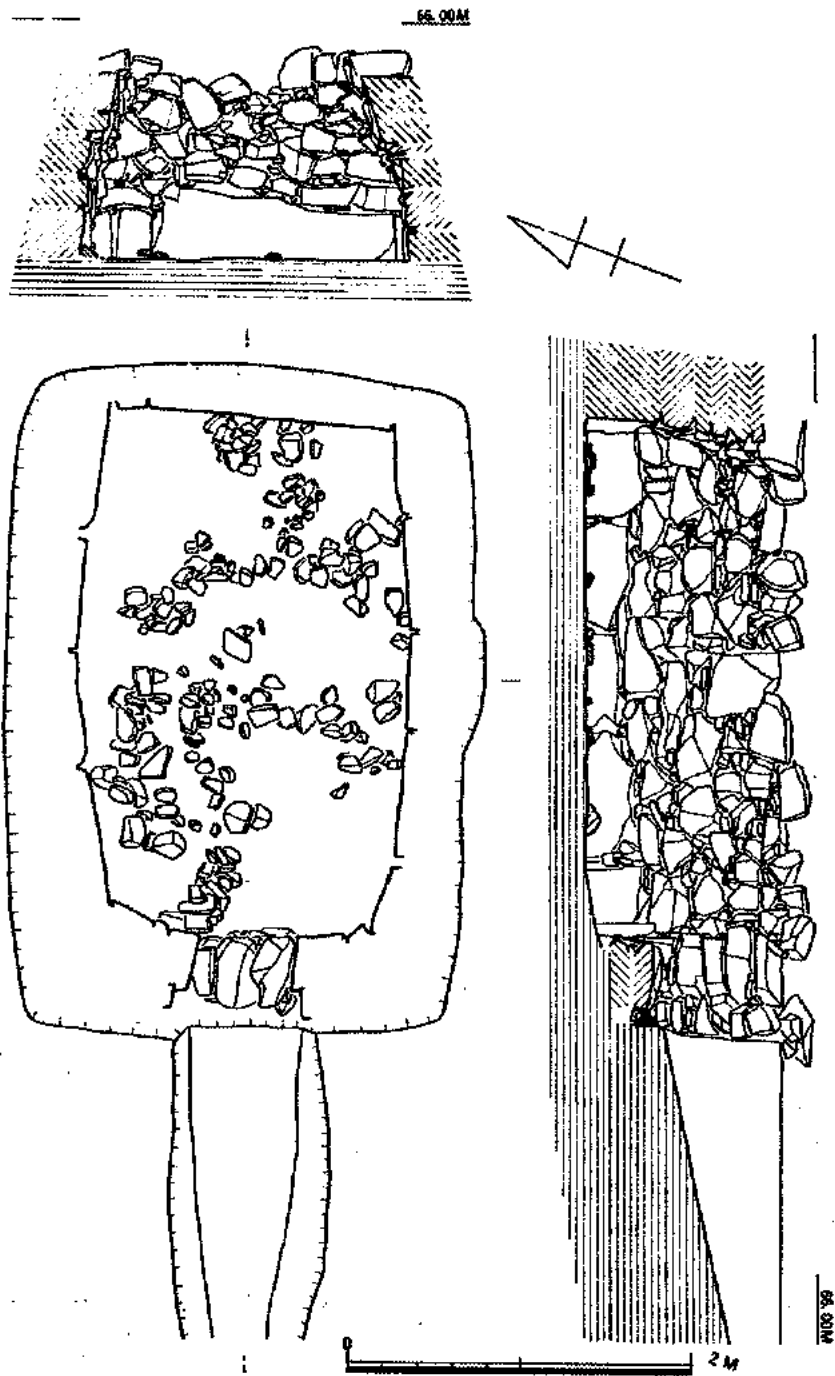
(1) 遺 構

主体部 (第 49 図) 主軸を N-70°-E にとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸 3.9 m、幅 2.7 m、深さ 1.5 m を測る長方形の掘り方である。墓道は、西南西に開口し、約 15 度の傾きを持って前方へ 3.3 m 程延びている。

石室は、中央部で全長 3.6 m、長軸 3.1 m、幅 1.9 m を測る両袖式のもので、中程でやや胴の張る長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大振な石材 2 石を使用して腰石となす。腰石上面は、ほぼ水平に整えられており、この上段に礫塊を整然と積み上げている。南側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊 5 石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、この上段に砂岩ホルンフェルスと花崗岩の礫塊により整然と積み上げている。北側壁も腰石 4 石を使用している以外は南側壁と同様な構築方法である。

玄門部は、南北両側壁から約 45cm 程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は現状で 1.3 m 程である。袖石間の幅は 60cm で、この間に幅 45cm 内外の石材 3 石を置き仕切石としている。この仕切石上面と床面敷石上面の段差は 30cm 程である。又仕切石上面と墓道との高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加

2. 発掘調査の記録



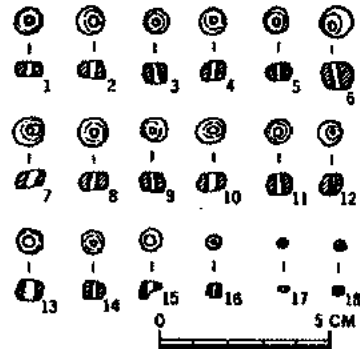
第49図 第49号墳主体部実測図 (1/40)

される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ1石の礫塊を置き、それより上段をほぼ垂直に積み上げている。

(2) 出土遺物

玄室内から丸玉16個、小玉2個、鉄鏃3本、刀子2本を出土した。墓道埋土からは土師器碗が出土している。

装身具	丸玉	16個
	小玉	2個
武器	鉄鏃	3本
農工具	刀子	2本
土師器	碗	1個体



第50図 第49号墳出土遺物実測図Ⅰ
(1/2)

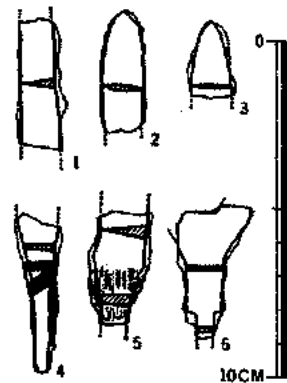
装身具 (第50図)

丸玉 (1~16) ガラス製品である。径10mm前後のもので2mm前後の孔があいている。色調は濃紺色を呈する。

小玉 (17・18) ガラス製品である。径5mm前後のものである。色調は淡い青色を呈する。

武器 (第51図)

鉄鏃 (2・3・6) 2・3は尖根式に属するものと思われる。鋒だけの破片であるため形態を明確にできなかった。6は平根式に属するものと思われる。身の中央部に透しが入るものである。現存長4cmを測る。



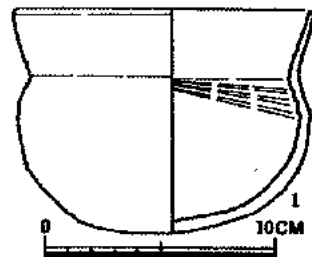
第51図 第49号墳出土遺物
実測図Ⅱ (1/2)

農工具 (第51図)

刀子 (1・4・5) 1は刃部片である。4は茎の破片で、横断面は台形である。1部に碧着痕がある。5は闇部の破片である。茎の断面は台形で、木篋を破す。

土師器 (第52図)

碗 墓道埋土から出土したものである。口縁端部がわずかに内傾するもので、体部と口縁部の境にはわずかな段がつく。口縁径に比して器高が高くなるものである。調整は、外面で、底部付近が縦方向の篋研磨。それ以上は横方向の篋研磨である。口縁部は横ナデ調整している。内面は丁寧なナデ調整をおこなっている。体部上方には横方向の篋研磨がみら



第52図 第49号墳出土遺物実測図Ⅲ
(1/3)

2. 発掘調査の記録

れる。色調は内外面共に赤褐色を呈している。外面底には一部黒斑がみられる。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。

22) 第 50 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第52号墳の東9m、標高66mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺 構

主体部(第53図) 主軸をN-66°-Wにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸3.3m、幅2.6m、深さ0.6mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西に開口し、前方でゆるやかに西南西へ曲っている。墓道底面は2m程水平に延びた後、上方に上っている。

石室は、中央部で全長2.4m、長軸2m、幅1mを測る長方形プランを呈する片袖石のものである。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊2石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられている。その上段は雑に礫塊を積み上げている。北側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊5石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、この上段に砂岩ホルンフェルスと礫岩ホルンフェルスの礫塊を整然と積み上げている。南側壁は砂岩ホルンフェルスの腰石5石を使用している。この壁には袖石がなく、すぐ墓道へと続いている。腰石上段の礫塊は整然と積み上げられている。玄門部は、北側壁から約30cm程石材を突出させて片袖を形成している。玄門部高は現状で50cmを測る。玄門幅は60cmで幅25cm内外の石材3石を置き仕切石としている。この仕切石上面と墓道との高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つものと思われる。石室前面には、袖石に続く前庭側壁は付加されていない。

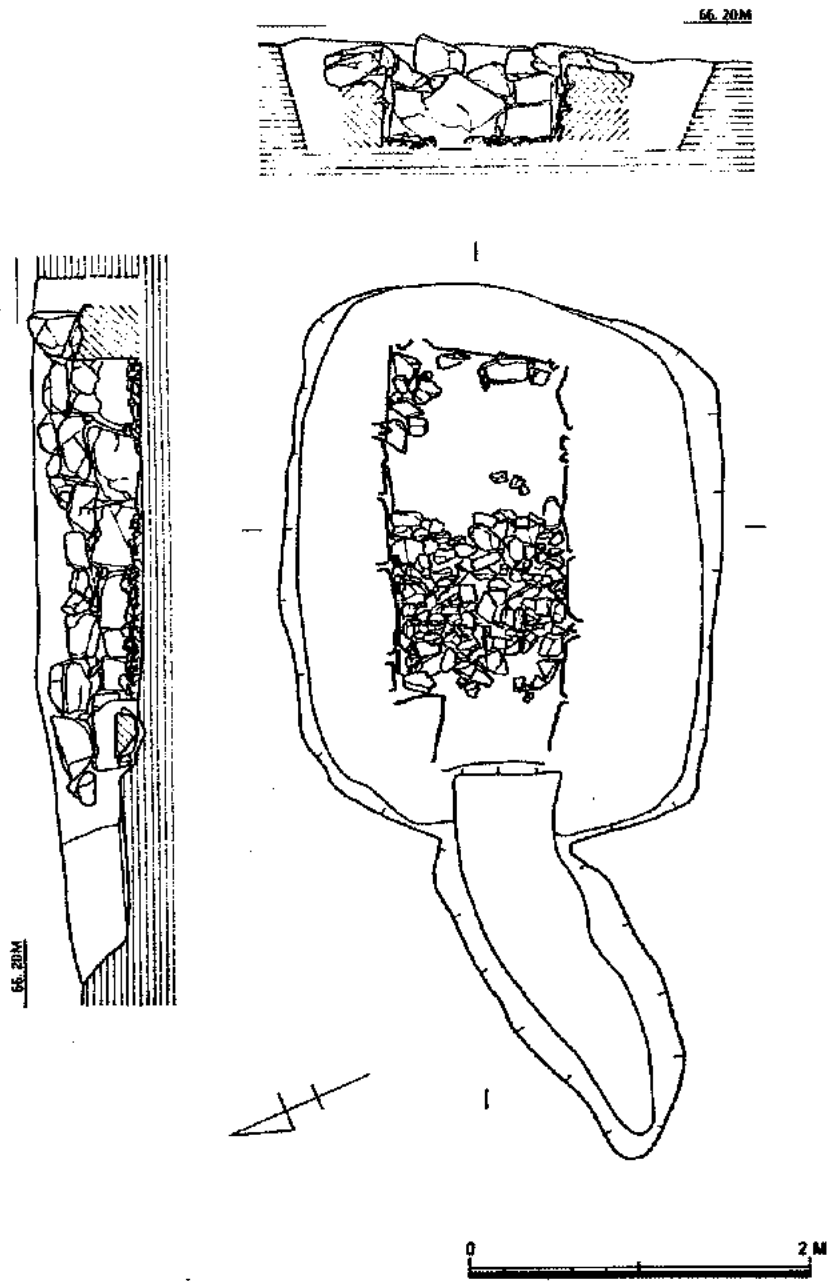
当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

23) 第 51 号 墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第50号墳の北東9m、標高66.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺 構

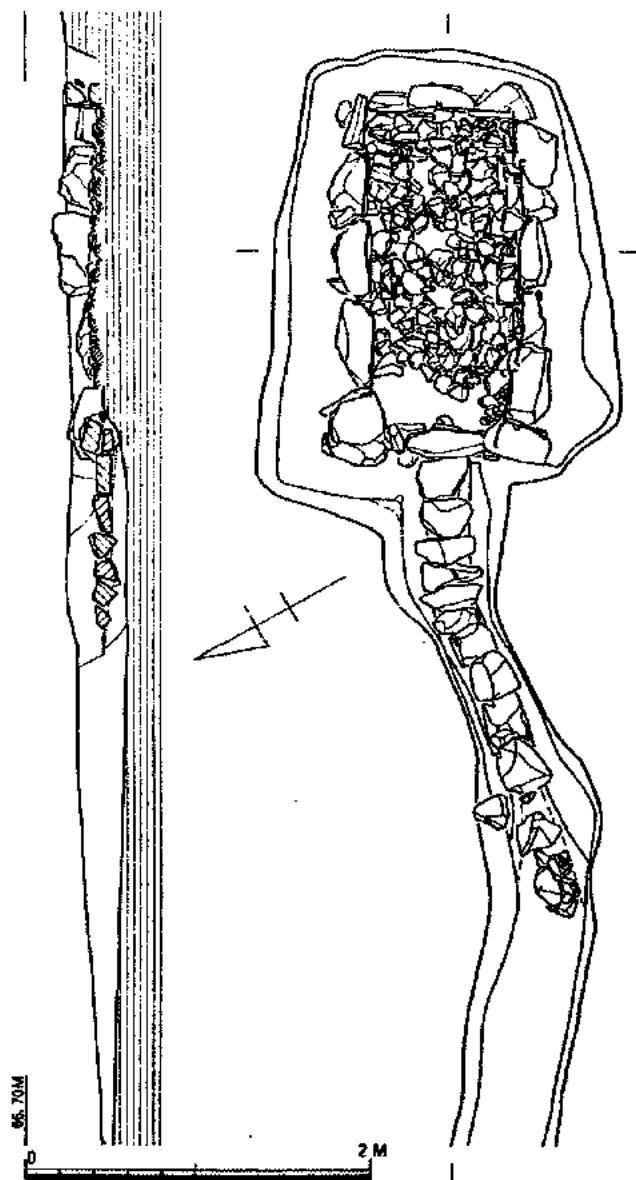


第53図 第50号墳主体部実測図 (1/40)

主体部 (第54図)

主軸をN-61°-Wにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸2.9m、幅2.1m、深さ0.4mを測る長方形の掘り方である。墓道は、北西に開口し約10度の傾きを持って前方へ約0.7m程伸びている。当古墳では、特に墓道下に排水施設をつくりつけている。これは北西に開口する墓道下に0.9m北西に延び、西に2m程曲り北西に2.4m延びる溝を掘っており、この溝の上に石材を置き暗渠をつくる。

石室は、中央部で全長2.1m、長軸1.9m幅0.9mを測る奥壁側がやや広がる羽子板状の長方形プランを呈している。壁体の構築は奥壁に砂岩ホルンフェルスと泥岩ホルンフェルスの礫塊3石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平になるように仕上げられている。北側壁は砂岩ホル



第54図 第51号墳主体部実測図 (1/40)

第2章 城ヶ谷古墳群

ンフェルスと泥岩ホルンフェルスの礫塊5石を使用して腰石となす。腰石上面は不整いである。玄門部の高さは現状で0.3mを測る。玄門の幅は60cmで、この間に幅15cm程の仕切石を置く。袖は無袖で、前庭側壁も付加されておらず、玄室に直接墓道が付設されている。この仕切石上面と墓道との高さは同一の高さであり、框石的構造を持っている。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

24) 第52号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや北側で、第48号墳の北東12m、標高65.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできないが、古墳南側の馬蹄形溝から推測すると9mから12mの円墳と思われる。

(1) 遺構

主体部(第55図) 主軸をN-55°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓墳は、現状で長軸4.1m、幅3.1m、深さ1.6mを測る長方形の掘り方である。墓道は、南西に開口し、約10度の傾きを持って前方へ約2.9m程延びている。

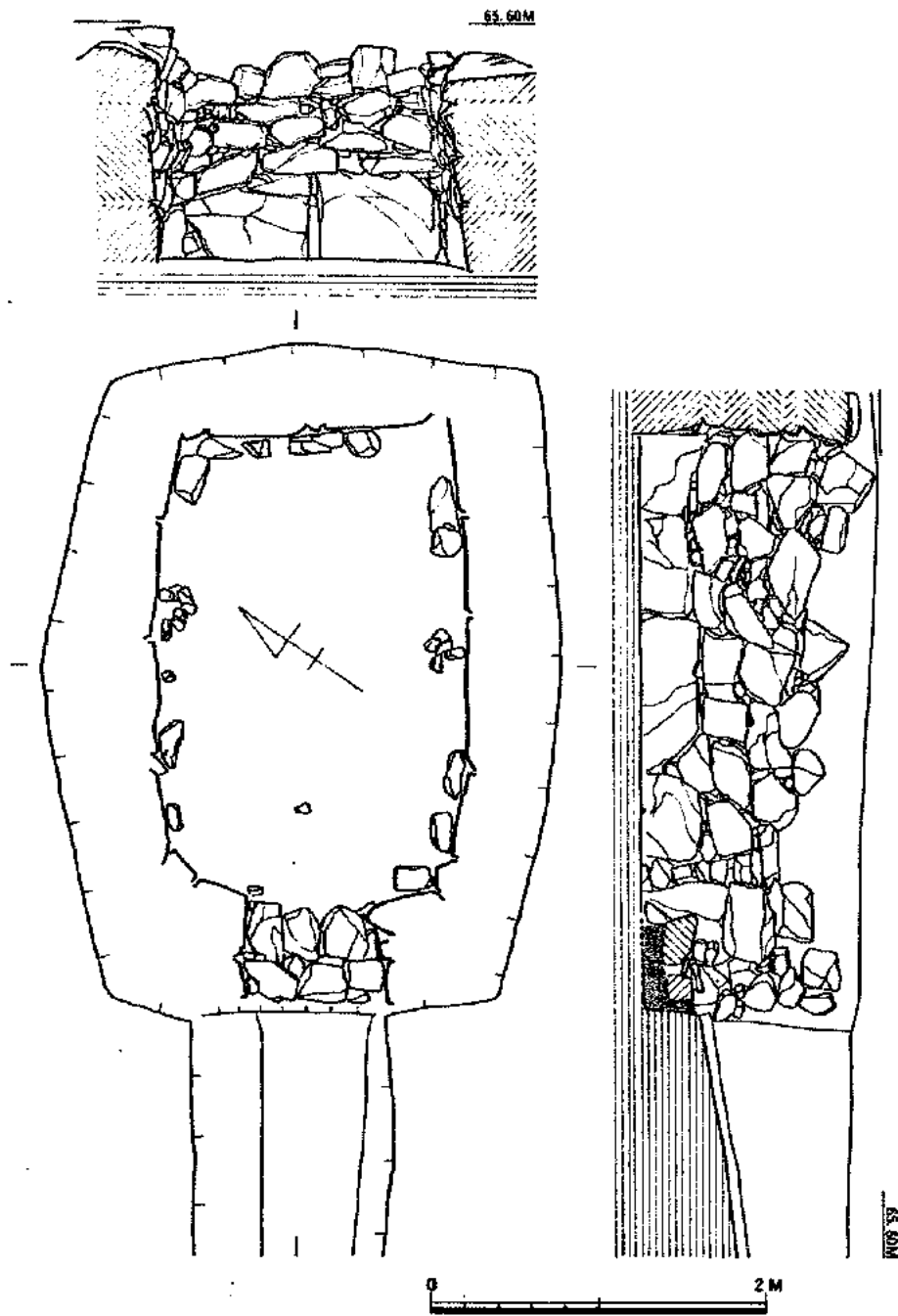
石室は、中央部で全長3.4m、長軸2.7m、幅1.5mを測る中程でやや胴の張る両袖式の長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大振な石材2石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、この上段に礫塊を整然と積み上げている。南側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材4石を使用して腰石となす。腰石上面は、ほぼ水平に整えられており、この上段に礫塊を整然と積み上げている。北側壁も南側壁と同様な構築方法である。玄門部は、南北両側壁から約45cm程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は現状で1m程である。袖石間の幅は70cmでこの間に約35cm内外の石材3石を置き、仕切石としている。この仕切石上面と床面との間に約30cmの段差がつく。又この仕切石上面と墓道の高さは同一の高さであり、いわゆる框石的構造を持つ。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は基底にそれぞれ1石の礫塊を置き、それより上段は雑に積み上げている。

(2) 出土遺物

玄室内より耳環1個を検出した。墓道埋土からは須恵器の杯蓋を検出した。

装身具	耳環	1個
須恵器	杯蓋	1個体

2. 発掘調査の記録



第55図 第52号墳主体部実測図 (1/40)

装身具 (第56図)

耳環 銅の地金に銀箔を施した肉厚なものである。長径28mm、短径26mmのはぼ円形である。断面は7mmの円形である。



第56図 第52号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)

須恵器 (第57図)

杯蓋 墓道埋土から検出された杯蓋である。天井部は平坦で、口縁部で直立する。口縁端部はやや外反し丸くおさまられている。天井部と口縁部の境にはあまい沈線を巡らしている。調整は外面で器高の4/5程を寛削りし、それ以下を回転ナデ調整している。内面は天井部を不定方向のナデ調整でそれ以下を回転ナデ調整している。色調は、内外面共に灰色を呈している。火まわりのためか外面が程が暗灰色を呈している。胎土は、微砂粒を含むものである。焼成は良好である。



第57図 第52号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

25) 第53号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第54号墳の東7m、標高69mの地点に等高線と直交して存在している。

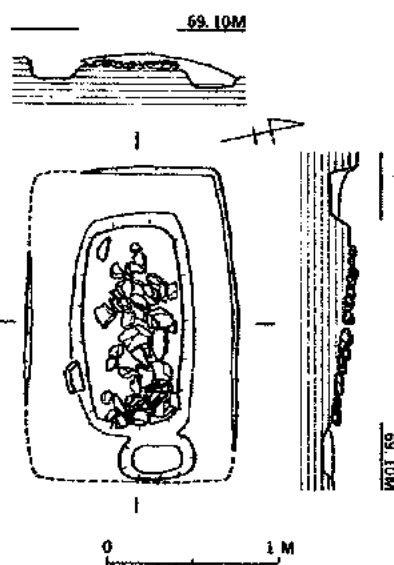
古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺構

主体部 (第58図) N-78°-Wに主軸をとる小型の竪穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸1.9m、幅1.3m、深さ0.1mを測る長方形の掘り方である。

石室は、削平されており、その形態を詳細に把握することはできないが、遺存する床面敷石や石材抜き痕などから推測して長軸1.2m、幅0.6mを測る長方形プランを呈するものと思われる。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土しなかった。



第58図 第53号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

26) 第54号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第56号墳の西15m、標高68.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺構

主体部 (第59図)

上軸をN-67°Eにとる単室の横穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸3m、幅2.1m、深さ0.4mを測る長方形の掘り方である。

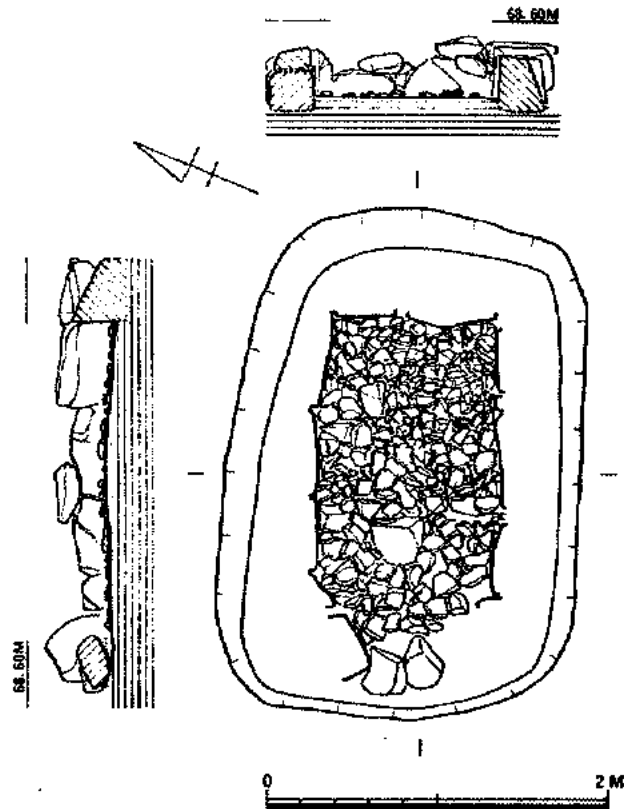
石室は、中央部で全長2.6m、長軸1.8m、幅

1.1mを測る長方形プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊2石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平で、その上段に雑な石積みをしている。北側壁は、砂岩ホルンフェルスのやや大振な礫塊4石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられている。南側壁も北側壁と同様な構築方法である。玄門部は、南側袖石が抜かれているため明確に把握できないが、玄門部幅50cmに2石の礫塊を置き仕切石としている。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

27) 第55号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第54号墳の南6.5m、標高68mの地点に等高線とほ



第59図 第54号墳主体部実測図 (1/40)

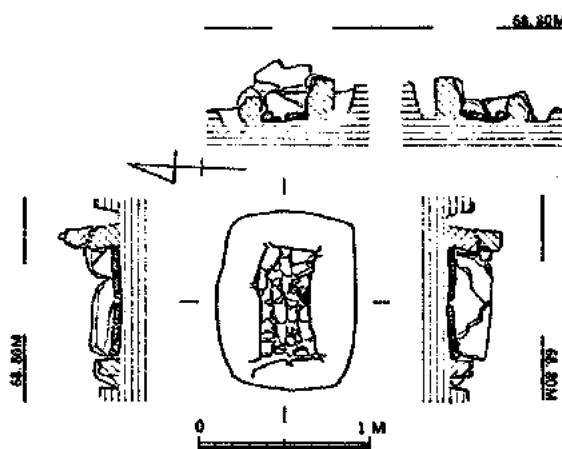
ほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく
古墳の規模を明確にすることは
できなかった。

(1) 遺構

主体部(第60図) 主軸を
N-87°-Eにとる小型の竪穴式
石室である。墓壇は、現状で長
軸1.1m、幅0.8m、深さ0.2
mを測る長方形の掘り方である。

石室は、中央部で全長0.7m
幅0.3mを測る長方形プランを
呈する。壁体の構築は、東小口



第60図 第55号墳主体部実測図(1/40)

壁に砂岩ホルンフェルスの礫塊2石を使用して腰石となし、西小口壁に砂岩ホルンフェルスの礫塊を1石使用して腰石となす。北側壁にやや大振な礫塊1石を使用し腰石となし、南側壁に2石の礫塊を使用して腰石となす。この腰石より上段には数列の積み石があったものと思われる。東小口壁に2石、西小口壁に1石の腰石を配しているところから東側を頭位にしたものと思われる。床面には10cm内外の小礫を使用して敷石としている。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

28) 第56号墳

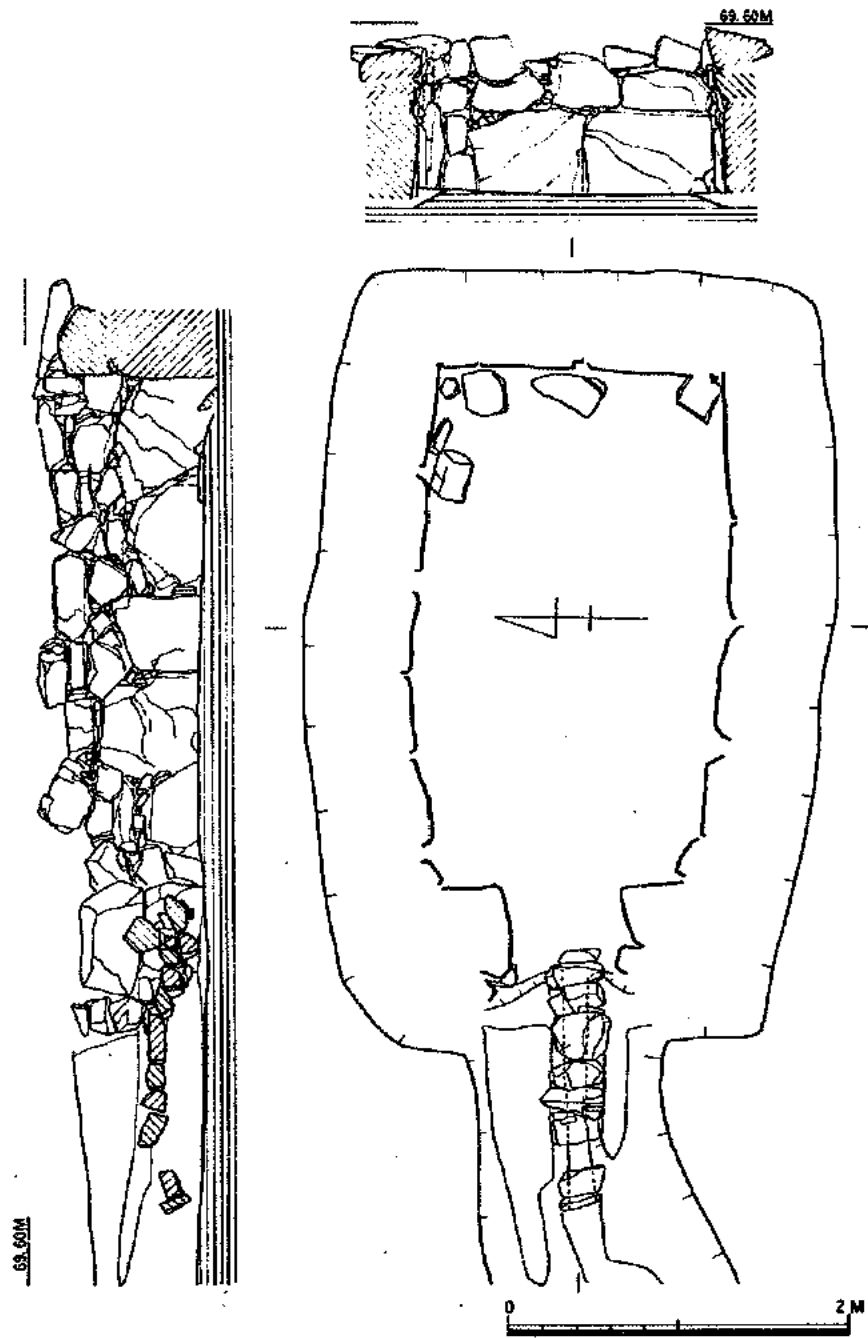
当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第54号墳の東15m、標高69.5mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確にすることはできなかった。

(1) 遺構

主体部(第61図) 主軸をN-90°-Eにとる単室の横穴式石室である。墓壇は、現状で長軸4.7m、幅3.1m、深さ1.2mを測る長方形の掘り方である。墓道は、西に開口し、約10度の傾きを持って前方へ約1.8m程延びている。当古墳では、特に墓道下に排水施設をつくりつけている。これは西に開口する墓道下に1.8m西に延び、南西に2.4m程曲って延び、南に4m程曲り、西に6m程延びる溝を掘り、この溝の上に石材を置き暗渠をつくっている。

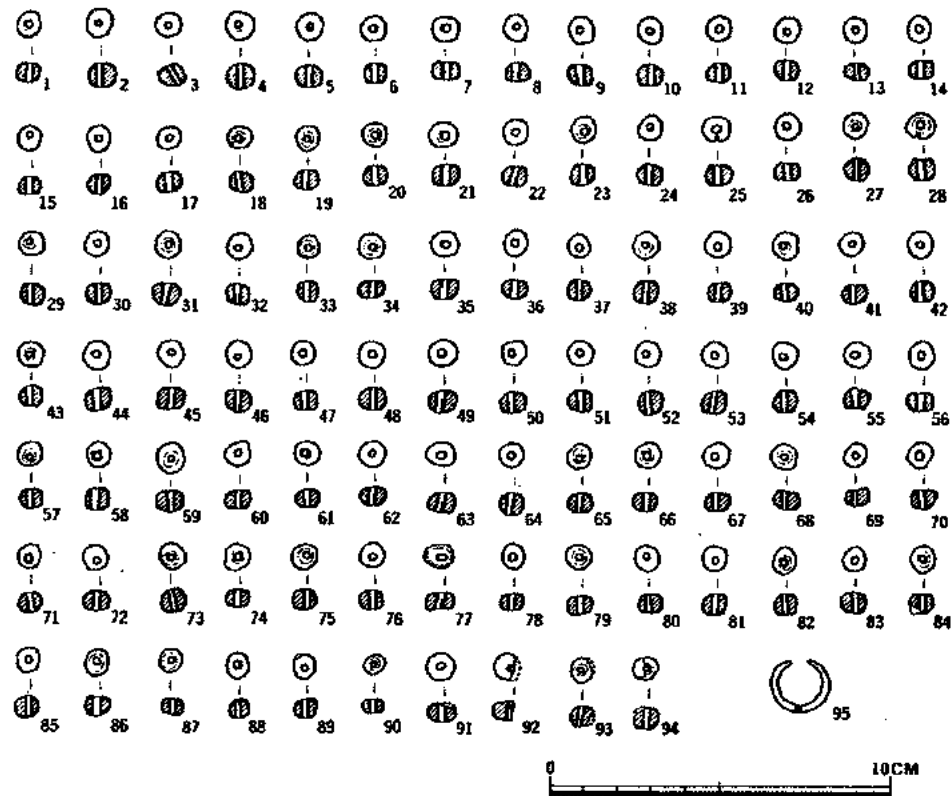
2. 発掘調査の記録



第61図 第56号墳主体部実測図 (1/40)

石室は、中央部で全長 4.3 m、長軸 3.1 m、幅 1.8 m を測る中程でやや胴の張る長方形プランを呈している。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの大板な石材 2 石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、その上段にやや大振な礫塊を整然と積み上げている。北側壁は砂岩ホルンフェルスのやや大振な石材 5 石を使用して腰石となす。その上面はほぼ水平に整えられており、この上段に礫塊を整然と積み上げている。南側壁も北側壁と同様の構築方法である。又積み石間には、小礫を持ちいて目張りされている。玄門部は南北両側壁からそれぞれ 40 cm 程石材を突出させて両袖を形成している。玄門部高は現状で 0.7 m を測る。両袖石間の幅は 65 cm である。石室前面には袖石に続く短い前庭側壁が付加される。この前庭側壁は、基底にそれぞれ 1 石の礫塊を置き、それより上段をほぼ垂直につくっている。

(2) 出土遺物

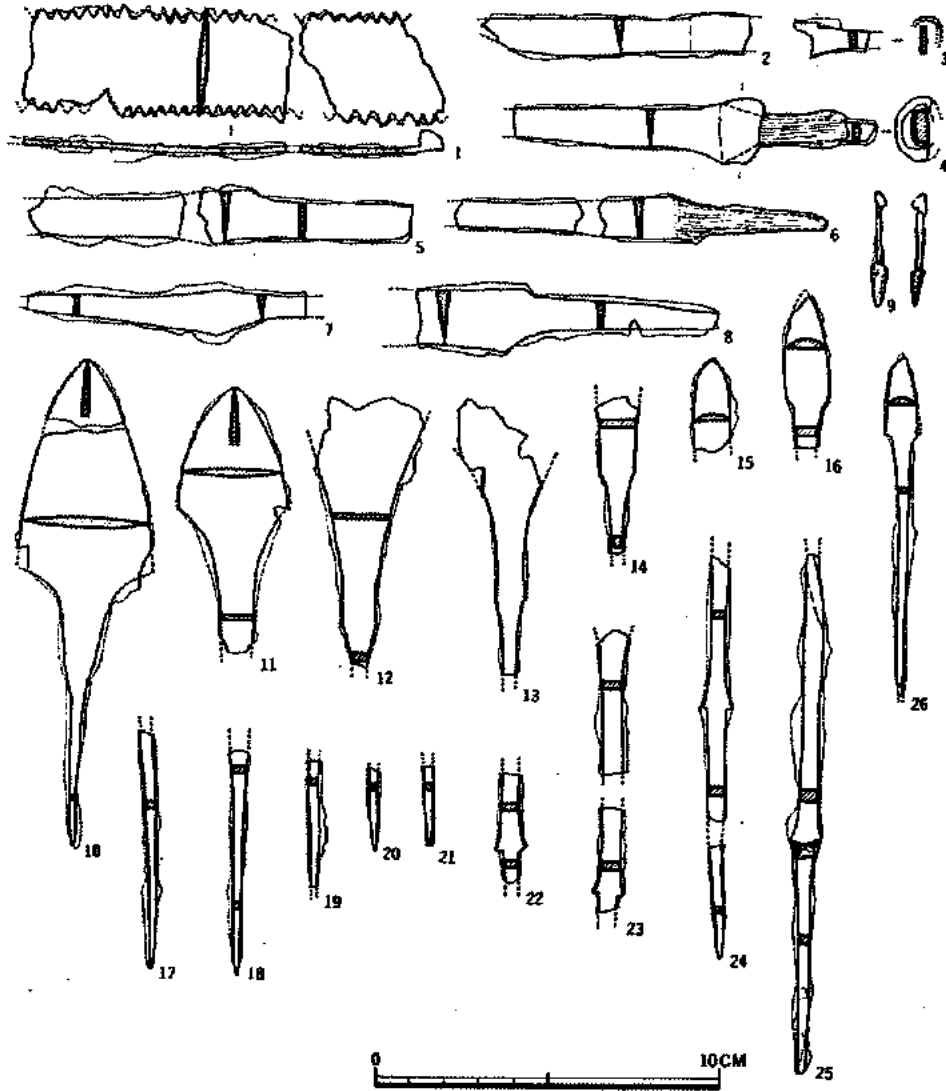


第62図 第56号墳出土遺物実測図1 (1/2)

2. 発掘調査の記録

玄室内から丸玉94個、耳環1個、鉄鏃17本、鋸1本、刀子7本、針1本、土師器の杯1個体を検出した。墓道埋土からは、須恵器の杯蓋3個体、杯身2個体、平瓶1個体を検出した。

装身具 丸 玉 94個
 耳 環 1個



第63図 第56号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)

武 具	鉄 鏃	17本
農工具	鋸	1 本
	刀 子	7 本
	釘	1 本
須恵器	杯 蓋	3 個体
	杯 身	2 個体
	平 瓶	1 個体
土師器	杯	1 個体

装身具 (第62図)

丸玉 (1~94) いずれも土製品である。径8mm前後のもので、2mmの孔をあけている。色調は黒褐色を呈している。

耳環 (95) 長径17mm、短径16mm、断面2mmを測る。銅製で細身のものである。

武 具 (第63図)

鉄鏃 (10~26) 10~14はいずれも平根式に属するものと思われる。10・11は両丸造広鋒三角形式である。現存長14.5cm、身最大幅4cmを測る完形品である。12~14は斧箭式であるがいずれも頭を欠損しているため形態を明確にすることはできなかった。15~26はいずれも尖根式に属するものと思われる。15~17は片丸造鑿箭式であろう。18~22は茎のみを遺存するものである。この中で23~26は刺筈被を持っている。

農工具 (第63図)

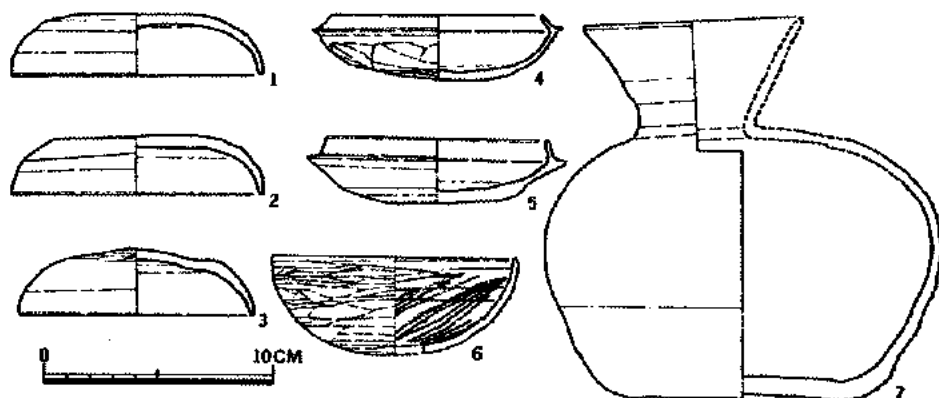
鋸 (1) 現存長12.3cm、幅3.2cm、厚さ0.2cmを測る長方形をした薄い鉄板状のものである。歯は、上下両縁にみられ、歯幅は4mm前後で、三角形の刻み目を持つ荒挽のようである。両縁の歯列に相違がみられることから、上縁と下縁では、その使用目的を異にしていたものと思われる。又歯には交互の鋸歯をつけている。

刀子 (2~8) 2は身の破片である。現存長8cm、幅1.2cmを測る。身の断面は背幅3mmの長三角形を呈している。3は関付近の破片である。現存長2.5cm、幅1.2cmを測る。茎に柄の一部である木片を遺存しており、断面は楕円形を呈している。茎断面は長方形である。4は鋒を欠損するがほぼ完形である。現存長10.8cm、幅1.4cmを測る。茎に柄の一部である木片を遺存しており、断面は長軸2cm、短軸1.4cmを測る楕円形を呈している。身の断面は背幅2mmの長三角形で茎は長方形を呈している。5は鋒と身の一部を欠損するがほぼ完形である。現存長11cm、幅1.5cmを測る。身の断面は背幅3mmの長三角形で茎は長方形を呈している。6は鋒と身の一部を欠損するが、ほぼ完形である。現存長11cm、幅1.2cmを測る。身の断面は背幅2mmの長三角形で茎は長方形を呈している。茎には柄の一部である木質を遺存している。7は

2. 発掘調査の記録

鋒と茎端を欠損するが、ほぼ完形である。現存長 8.2 cm、幅 1.1 cm を測る。身の断面は背幅 2 mm の長三角形で茎は長方形を呈している。B は身の一部を欠損する。現存長 8.8 cm、幅 1.8 cm を測る。身の断面は背幅 4 mm の長三角形で茎は長方形を呈している。

釘(9) 現存長 3.5 cm の棒状のもので、断面は 2 mm の円形を呈している。両端にはそれぞれ鹿角と木質を遺存している。用途は不明であるが、両端に遺存している鹿角や木質から推測すると何かの目釘として使用されたものと思われる。



第64図 第56号墳出土遺物実測図Ⅲ(1/3)

須恵器(第64図)

杯蓋(1~3) 1は天井部が平坦でゆるやかに内傾し、口縁部で直立するもので、口縁端部を丸くおさめている。調整は外面で器高の5/6程を篋削り調整し、それ以下を回転ナデ調整している。内面は天井部を不定方向のナデ調整し、それ以下を回転ナデ調整している。色調は内外面共に淡灰色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は、ややあまい焼きである。2は天井部が平坦でゆるやかに内傾し、口縁部で直立するもので、口縁端部を丸くおさめている。調整は外面で器高の5/6程を篋削り調整し、それ以下を回転ナデ調整している。内面は天井部を不定方向のナデ調整し、それ以下を回転ナデ調整している。色調は外面が黄灰色を呈し、内面は淡灰色を呈している。胎土は1mm前後の砂粒を含んだものである。焼成はややあまい焼きである。3は丸味をおびて内傾し、口縁部で直立するもので、口縁端部を丸くおさめている。調整は外面で器高の5/6程の部位まで、篋による切り履し痕が残っている。それ以下は回転ナデ調整である。内面はすべて回転ナデ調整である。色調は外面が黒灰色を呈し、内面は暗灰色を呈している。胎土は微砂粒を含むものである。焼成はややあまい焼きである。

杯身(4・5) 4は底部が平坦でゆるやかに内傾する体部を持つ。受部は水平に延び端部は尖っている。立上りは直線的に内傾している。立上りと受部の境は不明瞭である。調整は外面で器高の $\frac{1}{2}$ 程を時計回り方向の静止筥削り調整し、それ以上を回転ナデ調整している。内面は底部を不定方向のナデ調整し、それ以上を回転ナデ調整している。色調は内外面共に暗灰色を呈している。胎土は1mm前後の砂粒を多く含むものである。焼成はややあまい焼きである。5は底部が平坦でゆるやかに内傾する体部を持つ。受部は厚く水平に延び端部は丸くおさまられている。立上りはほぼ垂直に立ち上り端部付近で若干内傾するもので、端部を丸くおさめている。調整は外面で器高の $\frac{1}{2}$ 程を筥削り調整し、それ以上を回転ナデ調整している。内面はすべて回転ナデ調整である。色調は外面が黒灰色を呈し、内面が暗灰色を呈している。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成はややあまい焼きである。

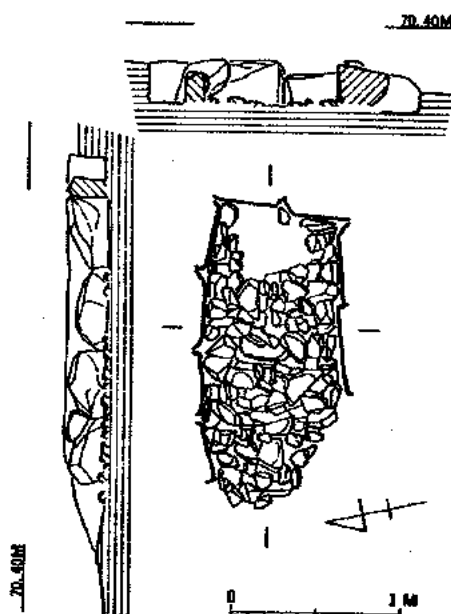
平瓶(7) 口頸部は直線的に外方へ開き、口縁端部を丸くおさめている。胴部最大径は中央部よりやや上方にあり、底部は平坦である。調整は外面が横方向のナデ調整で、内面は底部で不定方向のナデ調整で、それ以上は横方向のナデ調整である。色調は外面が暗い黒黄灰色を呈し、内面は黄灰色を呈している。胎土は微砂粒を含むものである。焼成は良好である。

土師器(第64図)

杯(6) 玄室内から出土したものである。体部は丸味をおびてゆるやかに立ち上り口縁部で直立するもので、口縁端部は丸くおさまられている。調整は外面で器高の $\frac{1}{2}$ 程を反時計方向の静止筥削り調整し、それ以上を横方向の筥研磨している。内面は左下から右上方へ時計回りに筥研磨しており、口縁部で横方向の筥研磨を施す。色調は内外面共に赤褐色を呈している。胎土は長石砂及び雲母を含む精練されたものである。焼成は良好である。

29) 第57号墳

当古墳は、丘陵尾根上に乗っており、第56号墳の東8.5m、標高70mの地点に存在している。今回調査の丘陵尾根上に乗る古墳の中で、当古墳が最高所に位置している。



第65図 第57号墳主体部実測図(1/40)

2. 発掘調査の記録

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺構

主体部（第65図） 主軸をN-77°-Wにとる単室の横穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸2.3m、幅1.6m、深さ0.2mを測る長方形の掘り方と思われる。

石室は削平を受けているため詳細を把握することはできないが、遺存する石材と石材抜き痕床面散石などから推測して、長軸1.8m、幅0.8mの奥壁側がやや広くなる羽子板状の長方形プランを呈するものと思われる。壁体の構築は、奥壁に砂岩ホルンフェルスの礎塊2石を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平である。北側壁は礎塊5石を使用して腰石となしていたものと思われる。腰石上面はほぼ水平に整えられている。南側壁も北側壁と同様な構築方法である。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

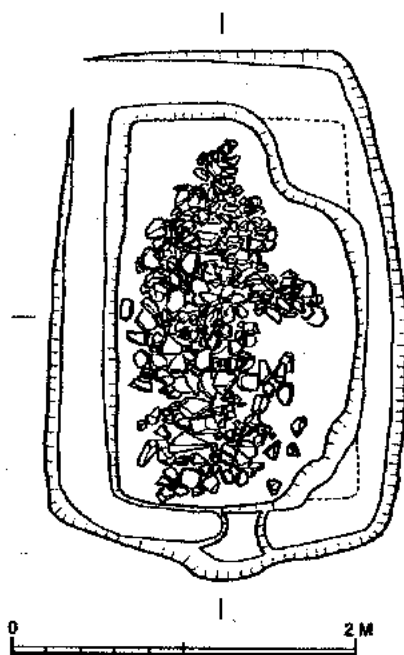
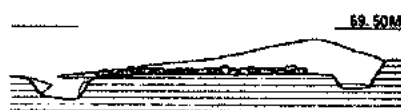
30) 第58号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第57号墳の南東13m、標高69.5mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺構

主体部（第66図）



第66図 第58号墳主体部実測図（1/40）

主軸をN-90°-Eにとる単室の横穴式石室と思われる。墓壇は、現状で長軸3m、幅2.1m、深さ0.3mを測る長方形の掘り方と思われる。

石室は、削平を受けているため、その形態を詳細に把握することはできないが、石材抜き痕や床面敷石などから推測して長軸2.3m、幅1.4mを測る長方形プランを呈するものと思われる。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

31) 第59号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第60号墳の東3m、標高70mの地点に等高線とほぼ平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

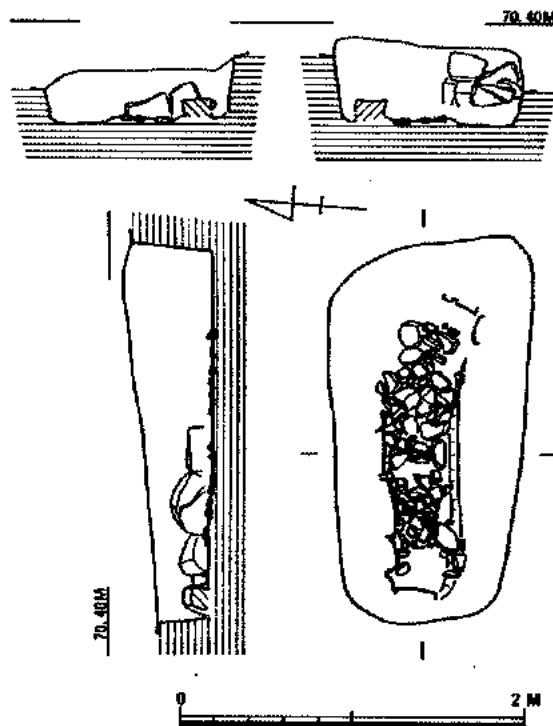
(1) 遺構

主体部 (第67図)

主軸をN-85°-Eにとる小型の縦穴式石室である。墓壇は、現状で長軸2.2m、幅1.1m、深さ0.3mを測る隅丸長方形の掘り方である。

石室は、中央部で1.7m、幅0.4mを測る長方形プランを呈しているものと思われる。壁体の構築は、東小口壁に砂岩ホルンフェルスの礫塊2石を使用して腰石となしていたものと思われる。西小口壁

主軸をN-85°-Eにとる小型の縦穴式石室である。墓壇は、現状で長



第67図 第59号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

は、礫塊1石を使用して腰石としている。両小口壁のありかたから東小口壁側を頭位にしたものと思われる。北側壁は礫塊5石を使用して腰石となしたものであると思われる。腰石上面はほぼ水平でこの上に数列の石積みがあったと思われる。南側壁も北側壁と同様の構築方法であったものと思われる。床面は10cm内外の角のとれた小礫を使用して敷石されている。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

32) 第60号墳

当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で、第58号墳の北東2.5m、標高70mの地点に等高線と平行して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺構

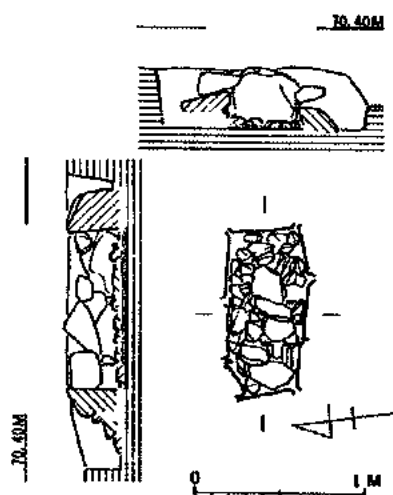
主体部(第68図) 主軸をN-82°-Wにとる小型の竪穴式石室である。墓室は、現状で長軸1.8m、幅1.3m、深さ0.3mを測る長方形の掘り方である。

石室は、中央部で長軸1m、幅0.5mを測る長方形プランを呈する。壁体の構築は、両小口壁に砂岩ホルンフェルスの礫塊をそれぞれ1石配して腰石となす。北側壁は3石の礫塊を使用して腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられており、その上段に整然と積み石している。南側壁も北側壁と同様の構築方法である。

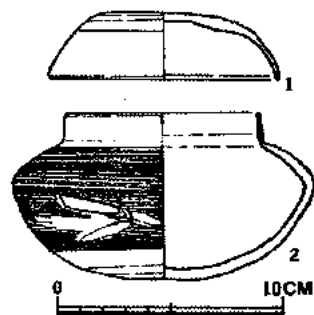
(2) 出土遺物

玄室内床面中央から有蓋短頸壺が、身から蓋を取り離してその蓋を身の横に置いた状態で検出された。

須恵器	有蓋短頸壺蓋	1個体
	身	1個体



第68図 第60号墳主体部実測図(1/40)



第69図 第60号墳出土遺物実測図(1/3)

須恵器 (第69図)

有蓋短頸壺 (1・2) 1は有蓋短頸壺の蓋である。天井部は平坦でゆるやかに内傾し、口縁部で直立するものである。口縁端部は筧によって切られており、斜めに仕上げられている。調整は外面で、器高の行程を施削り調整しており、それ以下を回転ナデ調整している。内面は底部に不定方向のナデ調整し、それ以下を回転ナデ調整している。色調は内外面共に青灰色を呈している。一部外面に灰かぶりのため黄灰色を呈する部位がある。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。2は有蓋短頸壺の身である。底部は平坦で胴部最大径を中央部よりやや上方に持つもので口縁部は垂直に立ち上る。調整は外面で底部に時計回りの施削り調整しており、体部はカキメ調整である。口縁部は横方向のナデ調整である。胴部中程に調整後の補修とみられる粘土の動きがある。内面は底部に不定方向のナデ調整し、それ以上を横方向のナデ調整している。色調は内外面共に青灰色を呈している。一部外面に灰かぶりのため黄灰色を呈する部位がある。胎土は微砂粒を含む精練されたものである。焼成は良好である。この有蓋短頸壺は、灰かぶりの状況などから推定して、短頸壺に蓋をした状態で焼成されたものと思われる。

33) 第 61 号 墳

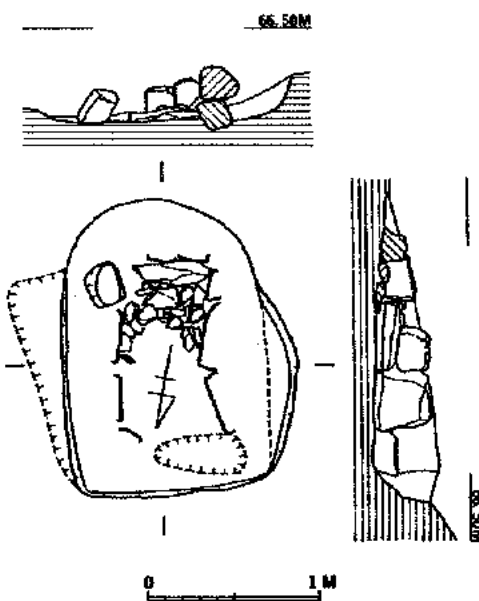
当古墳は、丘陵尾根上よりやや南側で第59号墳の東2.5m、標高70mの地点に等高線と直交して存在している。

古墳の上部構造はすでになく、古墳の規模を明確に把握することはできなかった。

(1) 遺 構

主体部 (第70図) 主軸をN-11°-Wにとる小型の竪穴式石室である。墓壇は、現状で長軸1.7m、幅1.1m、深さ0.4mを測る長方形の掘り方である。墓道は南に開口している。

石室は、中央部で長軸0.9m、幅0.5mを測る奥壁でやや広がる無袖のコ字状プランを呈する。壁体の構築は、奥壁に



第70図 第61号墳主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録

1石、西側壁に3石、東側壁に4石の砂岩ホルンフェルス礫塊を配し、腰石となす。腰石上面はほぼ水平に整えられている。床面は10cm内外の小礫によって敷石されている。玄門部には幅10cmの礫塊1石を置き仕切石としている。この仕切石前面には20cm角の礫塊3石を持って閉塞している。

当古墳内外からは、遺物がまったく出土していない。

3. ま と め

城ヶ谷古墳群は、城山から派生する大田原の舌状丘陵上に分布する古墳群である。今回の発掘調査で、33基の古墳が調査された。前回の丘陵基部から先端にかけての調査で検出された29基を合わせると一丘陵上に61基の古墳が検出されたことになる。更に今回調査分の北東に続く尾根上にも未調査ではあるが数十基の古墳が分布しているものと思われることから今後、この丘陵上に分布する古墳数は、まだ増加するものと思われる。ここでは私見ではあるが、今回調査分と前回調査分の古墳からみて考えをまとめてみたい。

当古墳群は、一丘陵上に古墳が密集していることから、一連の群集墳を形成しているようにみえる。だがその立地や分布状況などから考えると、4つのグループに区分できるものと思われる。第1のグループは、丘陵中程から丘陵端部に張り出した尾根上に分布する14基の古墳から構成されているものと思われる。第2のグループは、丘陵基部から丘陵中程に張り出す尾根上に分布する18基の古墳から構成されているものと思われる。第3のグループは、丘陵頂部から丘陵基部の尾根上に分布する19基の古墳から構成されているものと思われる。第4のグループは、丘陵頂部に分布する9基の古墳から構成されているものと思われる。第4のグループについては、丘陵がまだ北東に延びており、未調査の部分があるため、今後若干の変動があるものと思われる。

次にこれらの各グループを構成している各古墳の石室構造を考えると、大きく5つに区分できるように思われる。

I類 石棺を基本形態とした小型の竪穴式石室である。この類の石室は、長軸が1 m程で、幅が0.5 m程のものであり、その腰石が石棺のように板状の石材によって組まれているものである。

II類 I類の石室形態から発展したもので、完成された竪穴系横口式石室が成立して行くまでのものであり、4つに細分できる。II-a類は、試行的段階のもので、無袖の羽子板状プランを呈するものである。この類の石室は、長軸が2 m程で、幅が1 m程のものである。II-b類は、試行段階を終え、竪穴系横口式石室を確立する段階のもので、両袖を有する長方形プランを呈するものである。この類の石室は、長軸が2 m程で、幅が1 m程のものである。II-c類は、竪穴系横口式石室の確立段階から完成された段階のもので、両袖を有し、短い前庭側壁が付加された長方形プランを呈するものである。この類の石室は、長軸が2 m程で、幅が1 m程のものである。II-d類は、竪穴系横口式石室の完成段階から一步発展した段階のもので、両袖を有し、短い前庭側壁が付加されたやや胴張りか羽子板状の長方形プランを呈するものである。この類の石室は、長軸が2.5 m程で、幅が1.3 m程のものである。

III類 II類の石室形態から発展したもので、竪穴系横口式石室を発展させ、横穴式石室に

3. まとめ

より近づいたものであり、2つに細分できる。Ⅲ-a類は、横穴式石室の一つの特徴である前壁構造を持つものと思われるもので、竪穴系横口式石室の発展した石室で、向袖を有し、短い前庭側壁が附加される中程でやや胴の張る長方形プランを呈するものである。この類の石室は長軸が3m程で、幅が1.5m以上となるものである。石室に付設される墓道は、石室入口から斜め上方へ短く延びるものである。Ⅲ-b類は、石室構造においてⅢ-a類とほとんど同様のものである。ただ、石室に付設される墓道に相違を見る。この墓道は、石室入口からゆるやかに斜め上方に延びる長いものである。

Ⅳ類 石棺を基本としない竪穴式石室である。この類の石室は、小礫塊を利用して組み上げられた長方形プランを呈するものである。

Ⅴ類 Ⅳ類の竪穴式石室の小口壁の一方を抜いたような小型の横穴式石室である。この類の石室は、コの字状プランを呈するものである。

いま当丘陵上に検出された古墳をその石室構造によってⅠ類からⅤ類に分類した。この中でⅠ類からⅢ類は、一連の流れをもって発展したように思われる。この一連の流れの中で、被葬者の埋葬方法にも変化が生じたようである。これからは、この一連の石室構造の流れと被葬者埋葬方法の変化及び古墳の相対年代について勉強不足ではあるが考えてみたい。

Ⅰ類からⅢ類は、その石室構造から考えて、Ⅰ類の石棺を基本形態とした小型の竪穴式石室からⅡ類の竪穴系横口式石室へ、そしてⅢ類の竪穴系横口式石室を発展させたものと、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類のように推移して行くものと思われる。この推移に対して、被葬者の埋葬方法は、Ⅰ類では、この石室の構造上、被葬者は一度墳丘上にあげられ、石室の内に上から安置され、天井石を架構した後、盛土されて密封される。この石室を使用した埋葬は、再度の埋葬は困難であり追葬は考えられないであろう。Ⅱ類では、墓道及び石室の構造上、被葬者を一度墳丘上にあげるところまではⅠ類と同様であるが、被葬者は墳丘上にあげられた後、斜め下に降りる墓道を通り、横方向に開口する石室入口から安置され、閉塞石によりこれを塞ぐ。この石室を使用した埋葬は、閉塞石を外すことによって再度死者を埋葬することができるようになる。この埋葬方法は、一石室を多期に渡って使用することを可能にし、一步横穴式石室の埋葬方法に近づいたものであるが、被葬者を一度墳丘の上にあげるとは竪穴式石室に通じるところであり、竪穴式石室の埋葬方法を完全に脱却したものではない。Ⅲ類では、墓道及び石室の構造上被葬者を一度墳丘の上にあげ、斜め下に降りる墓道を通り横方向に開口する石室入口から石室内に入るところまではⅡ類と同様であるが、Ⅲ類の石室幅は1.5m以上と広く、被葬者を石室主軸方向に直行させて安置させることができる石室構造を持っている。又このような石室幅をもっている石室から主軸方向に直行して安置された状況の例が多いことなどからも、このことが推測できる。この埋葬方法は、横穴式石室にみる埋葬方法と同様の埋葬方法である。そして、この埋葬方法をとる石室の広さを確保するためには、石室の強度などから考えられた前壁

構造を持つ石室の導入が必要であろう。この石室構造が横穴式石室の特徴を備えたものである。しかし、石室構造や被葬者の安置方法が横穴式石室のそれと同様であっても、被葬者を一度墳丘の上にあげてから、墓道を通して下へ降りる作業は、竪穴式石室のそれと同様である。このようなことから被葬者の埋葬方法もⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類と変化したものと思われる。これら一連の埋葬方法の推移も竪穴式石室の埋葬方法の意識から横穴式石室の埋葬方法の意識への変化であり、墓道のあり方と石室の内法によって、その埋葬方法の意識をつかまなくてはならないものと思われる。特に墓道のあり方では、当丘陵上の第36号墳、第38号墳、第51号墳、第56号墳にみる排水施設をつくり付けているもので考えると理解できるように思われる。これは、墓道下に排水溝を掘り、この上に角礫を架構して暗渠をつくり、その上を埋めて石室入口から斜め上方に昇る墓道をつくり出している例である。この事象を考えてみると、排水施設を付設した後、水平に延びる墓道を付設したならば、石室に被葬者を埋葬する際に一度被葬者を墳丘上にあげるなどの過程がいらず、楽にその作業を進めることができるものと思われる。それよりも増して、墓道を水平につくるということは、排水施設を付設した後はほとんど埋土する必要がなく、古墳築造の工程が楽になるものと思われる。このような労働力を考えるならば、排水施設を付設したこれらの古墳の墓道は水平に延びるものでなければならない。しかし、実際にはその墓道は、石室入口から斜め上方に昇るものである。この事象をみる古墳は、なぜこのような墓道を付設しなければならなかったのか。それは、この墓道のあり方に、埋葬方法に関する大きな意味があるからではなかろうか。この埋葬方法に関する大きな意味とは、その墓道のあり方から石室内では横穴式石室の埋葬方法をとりながらも竪穴式石室の埋葬方法の意識をもっているものと考えられる。この墓道のあり方を考えて、Ⅲ類は、横穴式石室の特徴を持つ石室構造ではあるが、広い意味での竪穴系横口式石室の範疇に入るもの^{註1}としたい。

次に古墳の相対的な年代であるが、Ⅰ類は、城ヶ谷古墳群にみるⅠ類と同様のもので、当丘陵上で検出された古墳の中で最古式のものと思われる。しかし、この類の石室からは、出土遺物が検出されておらず年代を決定することは困難である。強引に年代を決定するならば、宗像市朝町に所在する朝町浦谷古墳群中のE-2号墳の石室構造が当古墳群のⅠ類の石室構造に類似するところが多いことから、このE-2号墳の築造時期とされている5世紀中頃～後半の時期^{註2}とあまり差がない時期をこの類に求めることができよう。Ⅱ類は、城ヶ谷古墳群にみるⅡ類^{註3}とほぼ同様のものである。この類の石室は、出土遺物が乏しく、馬蹄形溝の土器などからもくわしい年代決定は困難である。他の遺跡などと考え合わせて年代を決定するならば、Ⅱ-a類は、朝町浦谷古墳群のⅡ-b類^{註4}や蒲原宏行氏のⅡ-a類^{註5}とした宗像市稲元2号墳に類似する点があることから、5世紀後半の時期とあまり差がない時期をこの類に求めることができよう。しかし、この類の中に6世紀中頃の年代を与えられるものがあることも考えなければならない。Ⅱ-b類は、蒲原氏のⅡ-c類^{註7}とした遠賀郡岡垣町手野字片山に所在する片山12号墳や柳沢一^{註8}

3. まとめ

男氏のⅢ¹¹⁹類、石山熱氏のC¹¹¹⁰類に類似する点があることから、5世紀後半の時期とあまり差がない時期をこの類に求めることができよう。Ⅱ-C類は、朝町浦谷古墳群のⅡ-b¹¹¹³類や蒲原氏のⅡ-d¹¹¹²類、柳沢氏のⅢ¹¹¹³類、石山氏のC¹¹¹⁴類に類似する点があることから、5世紀後半の時期とあまり差がない時期をこの類に求めたいが、Ⅱ-C類に属する第31号墳馬蹄形溝から出土した土器をみると6世紀中頃のものであることから、この時期までの造営期間が考えられる。Ⅱ-d¹¹¹⁵類は、朝町浦谷古墳群のⅣ-a¹¹¹⁵類に類似する点や出土遺物などから、6世紀前半の時期とあまり差がない時期をこの類に求めたい。Ⅲ類は、城ヶ谷古墳群にみるⅢ¹¹¹⁶類とほぼ同様のものである。この類の石室は、朝町浦谷古墳群にみるⅣ類のものと類似する点があることや出土遺物などから6世紀中頃～後半の造営期間が考えられる。Ⅳ類は、Ⅰ類の小型竪穴式石室が形を変えながら残ったものであろう。この類は、出土遺物などから6世紀末の時期とあまり差がない時期であろう。Ⅴ類もこのⅣ類とあまり差のない時期と考えられるものであろう。これらⅠ類～Ⅴ類までの年代をみてみると、5世紀後半頃にⅠ類が出現し、5世紀後半～6世紀にかけてⅡ類が築造され、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類へと推移しているように見える。これは先にⅠ類からⅤ類までの石室推移と同様の推移をたどるもので、Ⅰ類～Ⅴ類の流れはほぼこれによいものと思われる。

さて、このように当丘陵に分布する61基の古墳についてみてきたが、このⅠ類からⅤ類の石室が丘陵上のどのような位置を占め、第1から第4までのグループを形成して行くかをみることにする。

第1グループは、丘陵の基部から丘陵端部に張り出した尾根上に分布するものである。この地に最初に出現するのが、Ⅰ類である第27号墳である。これは、このグループが占める丘陵の中位に位置するもので、場所的にもよいところを選んでいる。その後他のグループに竪穴系横口式石室の試行段階の石室ができ、これが完成され、やや発展した段階に丘陵尾根上を第11号墳、第19-1号墳、第20号墳、第22号墳、第28号墳の5基が次々に運び占地して行った。そして、Ⅲ類である9基の古墳が次々と築造されている。これらのことから、このグループは、5世紀後半段階に最初の古墳が出現し、やや時間をおいて、6世紀前半頃～6世紀中頃にかけ古墳築造のピークを迎え、その後このグループは古墳の築造をみないものと思われる。このグループの中で、第19-1号墳と第19-2号墳のあり方は、注目すべきものであろう。これは第19-1号墳が完成したあとに19-2号墳が入ってきて、1墳丘2石室の墳丘をつくり出したものである。このことは、両石室の被葬者間に血縁関係などのような深い関係が窺えるものであろう。

第2グループは、丘陵基部から丘陵中程に張り出す尾根上に分布するものである。この地に最初に出現するのがⅠ類である。第25号墳と第32号墳である。これら両者は、このグループが占める丘陵の中位と基部に位置するものである。その後他のグループに竪穴系横口式石室の

試行段階の石室ができ、これが完成されたものがこの丘陵上の第23号墳、第24号墳、第31号墳の3基である。この後、これが発展した段階である第21号墳が築造され、Ⅲ類である10基の古墳が次々に築造され、その後第26号墳、第30号墳の築造を最後に、このグループの古墳築造はみられなくなった。これらのことから、このグループは、5世紀後半頃に最初の古墳が出現し、あまり時期をおかずにⅡ類が築造され、これが6世紀中頃まで造営されていく。この間に6世紀前半から6世紀中頃の古墳築造のピークを迎えⅢ類の古墳が次々と築造された。その後大規模な築造はみられず、6世紀末頃に2基の古墳が築造されたものを最後にこのグループの古墳築造はみられなくなった。このグループの中で、第3号墳は、城山から北西に派生している舌状丘陵に分布している古墳の中で、現在唯一の前方後円墳である。しかし、その規模は小さく、築造された時期や周囲の古墳などから考えて、首長墓といわれるようなものとは思えず、どちらかと言えば、家父長的な性格を持ち、このグループの盟主的存在であったものと思われる。

第3グループは、丘陵端部から丘陵基部の尾根上に分布するものである。この地に最初に出現するのが、Ⅰ類である第41号墳、第42号墳、第43号墳である。この3基の古墳は、いずれもこのグループの占める丘陵中程に密集して分布しており、他のグループのあり方と異なるようである。その後竪穴系横口式石室の試行段階である第50号墳、第51号墳の2基が築造される。そして、この竪穴系横口式石室が他のグループで完成し、このグループにやや発展した段階で導入され、Ⅲ類である9基の古墳が次々に築造され、その後第40号墳、第44号墳の築造を最後に、このグループの古墳築造はみられなくなった。これらのことから、このグループは5世紀後半頃に最初の古墳が出現する。そして、このグループ内で、小型の竪穴式石室から一步進んだ竪穴系横口式石室の導入を図ったものである。これらを基に他のグループで完成された竪穴系横口式石室が築造されたものと思われる。又、他のグループで完成された竪穴系横口式石室をやや発展した形で導入し、6世紀前半から6世紀中頃の古墳築造のピークを迎えることになる。その後6世紀末頃の古墳2基が築造されたものを最後にこのグループの古墳築造はみられなくなった。

第4グループは、丘陵頂部に分布する9基の古墳を検出しているが北東に延びる丘陵が未調査のため明確にはできないが、これを除去して考えると、この地に最初に出現するのが、Ⅰ類である第53号墳である。これは、このグループが占める丘陵頂部の中心に位置するもので、場所的にも良いところを選んでいる。その後この石室を発展させた竪穴系横口式石室の試行段階である石室を築造した。そしてやや時間があいてⅢ類の竪穴系横口式石室の発展した石室が築造された。その後に第55号墳、第59号墳、第60号墳の小型竪穴式石室と第61号墳の小型横穴式石室が築造されたのを最後に古墳の築造はみられなくなった。これらのことから、このグループは、5世紀後半頃に最初の古墳が出現し、この発展段階である2基の古墳が築造される。この後、若干の時間的空白の後に、この丘陵全体にみる古墳築造のピーク時期にこのグループの

3. まとめ

盟主的存在である第56号墳が築造される。しかし、このグループにみる古墳築造のピークは6世紀末に小型の石室かできる時期にみられるようで、他のグループとは異なっている。

今、第1グループから第4グループまでみてきたが、これらの事象から、当丘陵上に分布している古墳の被葬者は、族長級のものでなく家父長性格の強いものであろう。この中で、第3号墳や第56号墳にみるような盟主的存在のものが各グループに存在しているようである。この盟主的存在のものは、6世紀前半頃の石室にみられ、それ以前のものにはみられない。又、この丘陵に分布する古墳の中で、この6世紀以前のは少なく、その半数以上が6世紀前半以降のものである。このような時期に爆発的に古墳が増加する現象は、6世紀前半というこの時期に筑紫の国造磐井の乱と大きな関係があるものと思われる。これは、継体天皇21～22年の戦いに磐井が敗れたことにより、北部九州で磐井の勢力下にあった家父長層達が古墳を築造できるようになったものと考えたい。そして、この後柏屋の屯倉などの支配下におかれ、家父長層が古墳の築造ができなくなったものと思われる。これらのことを考え合わせて、当丘陵上に分布する古墳をみると、5世紀後半に古墳が出現し、6世紀前半から中頃にかけてピークに達し、6世紀末の築造以後は、古墳の築造をみないこの現象と符合するように思われる。これらのように一丘陵上に分布する古墳の群構成について述べてきた。しかし、まだ不十分であり、周囲の古墳群などとも考え合わせ新たな展開をみせるもので、今後の課題として考えなければならない問題であろう。

(安部)

- 註1 波多野院三 『城ヶ谷古墳群』 クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社 1977年
- 註2 原俊一 『浦谷古墳群1』 宗像市文化財調査報告書第5集 1982年
- 註3 註1に同じ
- 註4 註2に同じ
- 註5 蒲原宏行 「壱穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』 雄山閣 1983年
- 註6 西谷真治 『稲元古墳群第1期調査報告』 稲元古墳調査団 1976年
- 註7 註5に同じ
- 註8 石山勲 『片山古墳群』 福岡県文化財調査報告書第46集 1970年
- 註9 柳沢一男 「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』1975年
- 註10 石山勲・川述昭人 「平原古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』福岡県教育委員会 1972年
- 註11 註2に同じ
- 註12 註5に同じ
- 註13 註9に同じ
- 註14 註10に同じ
- 註15 註2に同じ
- 註16 註1に同じ
- 註17 註2に同じ

三郎丸堂ノ上遺跡

1. はじめに

本報告は、宗像市大字三郎丸字堂ノ上に所在する5基の古墳と1基の石積遺構からなる三郎丸堂ノ上遺跡の調査報告である。

本遺跡は、第1章に述べてあるように、住友不動産株式会社およびクボタハウス株式会社による大規模な住宅造成予定地内の東端に位置し（第2図）、かつて、昭和52（1977）年に福岡教育大学歴史研究部考古学班によって調査報告された『城ヶ谷古墳群』の立地する尾根の東隣りに位置する。これらはいずれも標高約370mの城山から西方へ複雑に派西する丘陵上に占地し、本遺跡での最高地点は標高約70mである。この尾根は20数年前の宅地造成工事によってすでにその大部分を失っており、今回の調査はその基部のごくわずかにしかすぎず、古墳群の全容を復原・解明することはほぼ不可能である。しかし、調査区の北を限る県道を挟んで、更に北側でも大規模な古墳群を確認しており、それらとの関連付けは今後の課題である。

調査前の状況は、給水タンクの脇から第4号墳と石積遺構S X 1の間をぬって城山へと通じる小規模な登山道が調査区内を縦断するほかは一面に笹や灌木が生い茂っていた。

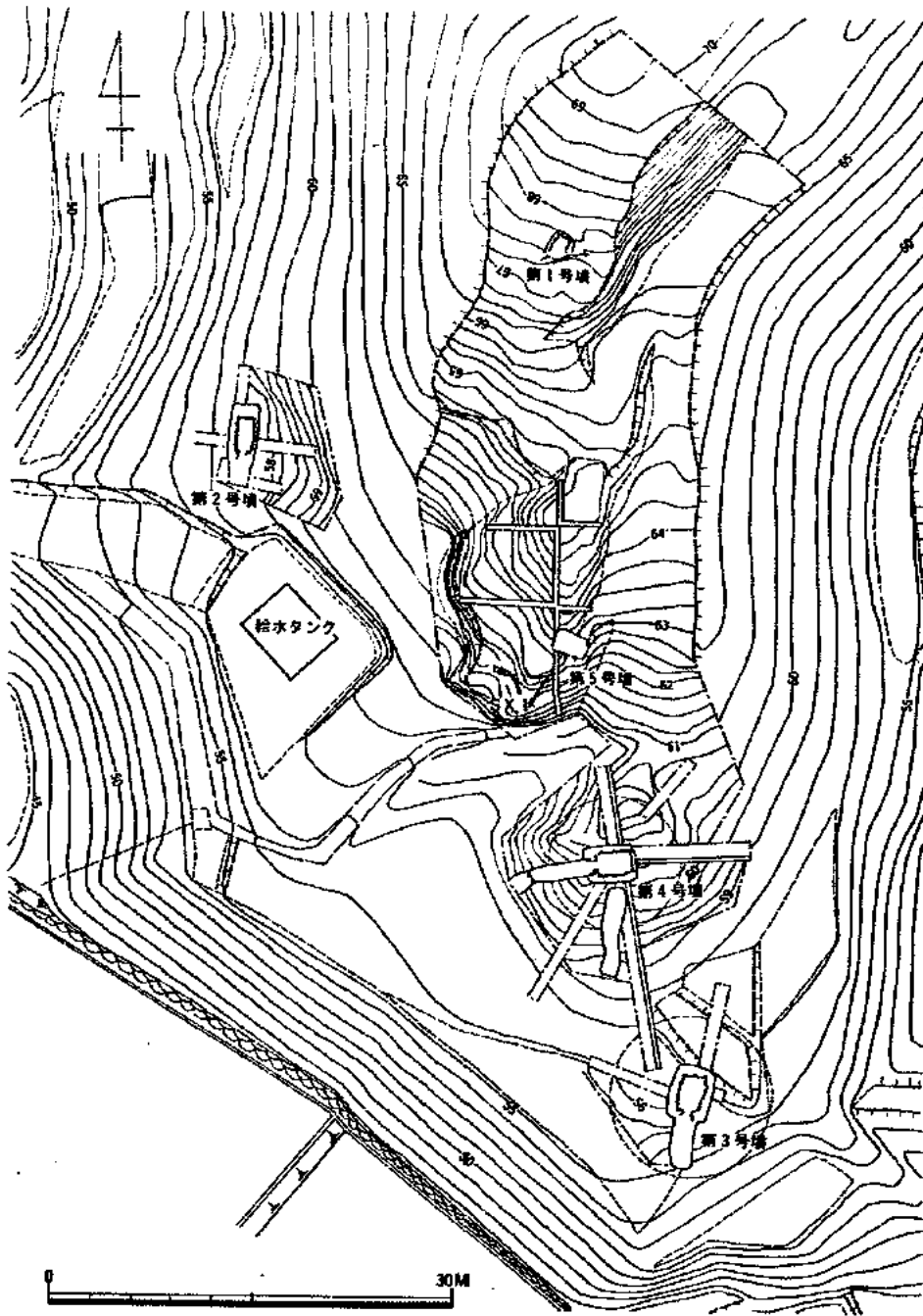
調査の方法は、古墳の存在が予想された第4号墳、石積遺構S X 1と第5号墳の位置する小丘はトレンチを設定して人力で発掘し、その他の部分は重機を使用して表土を掘削し、地山を露出させていった。ただ、調査区の縁辺部分は傾斜が急であることや、すぐ下方に民家や溜池などが存在するために防災上の配慮から本調査のままであるが現状では古墳を確認していない。

重機による掘削の結果、調査区の北半には遺構が存在せず、中央付近で1基の石室（第1号墳）を、そのすぐ南で人頭大の石材と浅い掘り込みを検出したが、後者は遺構とは認められなかった。調査区の南西部では、予想外の急斜面で第2号墳を、そして南東部で第3号墳を相次いで発見した。以後、盗掘坑の清掃、トレンチ発掘などで第4号墳、第5号墳、石積遺構S X 1などを検出していった（第71図）。

なお、調査は昭和58（1983）年12月7日より始めて、翌59（1984）年1月18日に終了した。

先述したように、当遺跡は標高60—70mの高所に位置する。尾根の西側は大きくカットされて一面に笹が繁茂しているだけで、比高30mの尾根上は12月ともなると冷たい強風の吹きさらしに合い、強風は砂塵をまき上げる。ときには画板が風をうけて躍り出し、図面実測のできないことも再三ならずあった。このような悪条件の下で、毎日発掘作業に参加して頂いた作業員の方たち、および福岡教育大学、福岡大学の学生諸氏に謝意を表します。

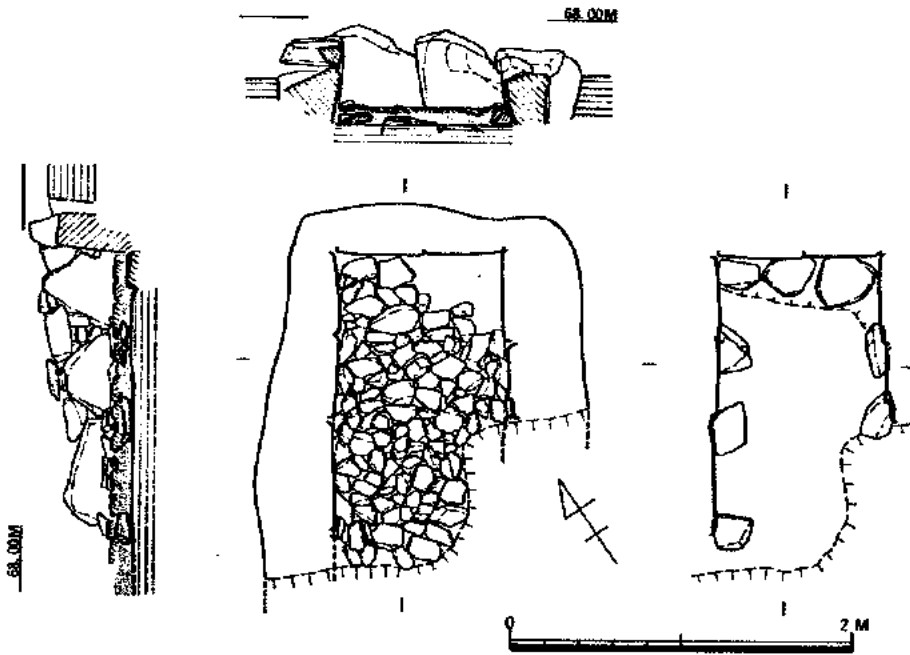
1. はじめに



第71図 三郎丸堂ノ上遺跡遺構配置図 (1/500)

2. 発掘調査の記録

1) 第1号墳 (第72・73図、図版10-2・3)



第72図 第1号墳主体部実測図 (1/40)

(1) 主体部 (第72図、図版10-2・3)

重機による表土掘削時に検出した。遺存しているのは敷石、腰石の一部のみで榎石等の石室前半部は失われている。石室プランは奥壁幅0.6m、残存長1.6mで長方形をなす。敷石は長さ10-20cmの扁平な石材を使用する。また、敷石の下で腰石間に埋置した根石を検出した。



第73図
第1号墳出土
遺物実測図
(1/2)

(2) 出土遺物 (第73図、図版)

敷石上で検出した。胴身の鎧は不明、茎は扁平な長方形の断面をもつ。

2) 第2号墳(第74・75図、図版11-1・2)

調査区の南西部、標高約57mの急斜面に位置する。そのために封土は流失し、さらに二次堆積土が石室を覆っていた。石室の東側にあけたトレンチでは、おのおの幅約1.5mにわたる灰褐色土の落込みを2ヶ所確認したが、溝状に巡る状況は認められず、また埋土も堅緻であった。

(1) 主体部 (第74・75図、図版11-1・2)

石室は奥壁幅約1.2m、長さ約2.6mの長方形プランで玄門部分でやや幅を減じる。腰石はとりわけて大きい石材を用いるというわけではなく、奥壁も同様である。壁体の石積みは破壊のためか整然としているとはいえないが、ほぼ5段目まで遺存しており、内傾する。袖石は側壁から約30cm内側へ張り出し、最下段は石材を立てるが、以上は横積みに築く。前庭部の貼石の側面観は逆三角形に近く、小規模である。床面には径10-20cmの小礫を敷きつめていた。

閉塞は框石上に石材を3-4段横積みにし、その前面に大きな板石を立て掛けておこない、間隙に小礫を充填する(第75図)。また、墓道は確認できなかったが、石室の形態から推して框石に緩く傾斜して取りつく短いものであったと考えられる。

(2) 出土遺物 (第76-77図、図版17・18)

遺物は、石室内左奥隅のほぼ4区画に集中して、敷石上で検出したが、個々は散在しており、原位置を失っていたと考えられる。また、周辺の二次堆積層で若干の土器を出土している。

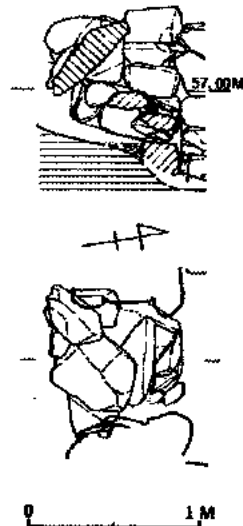
装身具(第76図、図版18)

切子玉(1) 透明度の劣る水晶を用い、計12面をカットしている。長さ1.6cm、径1.2cmで、穿孔は片面からおこなう。

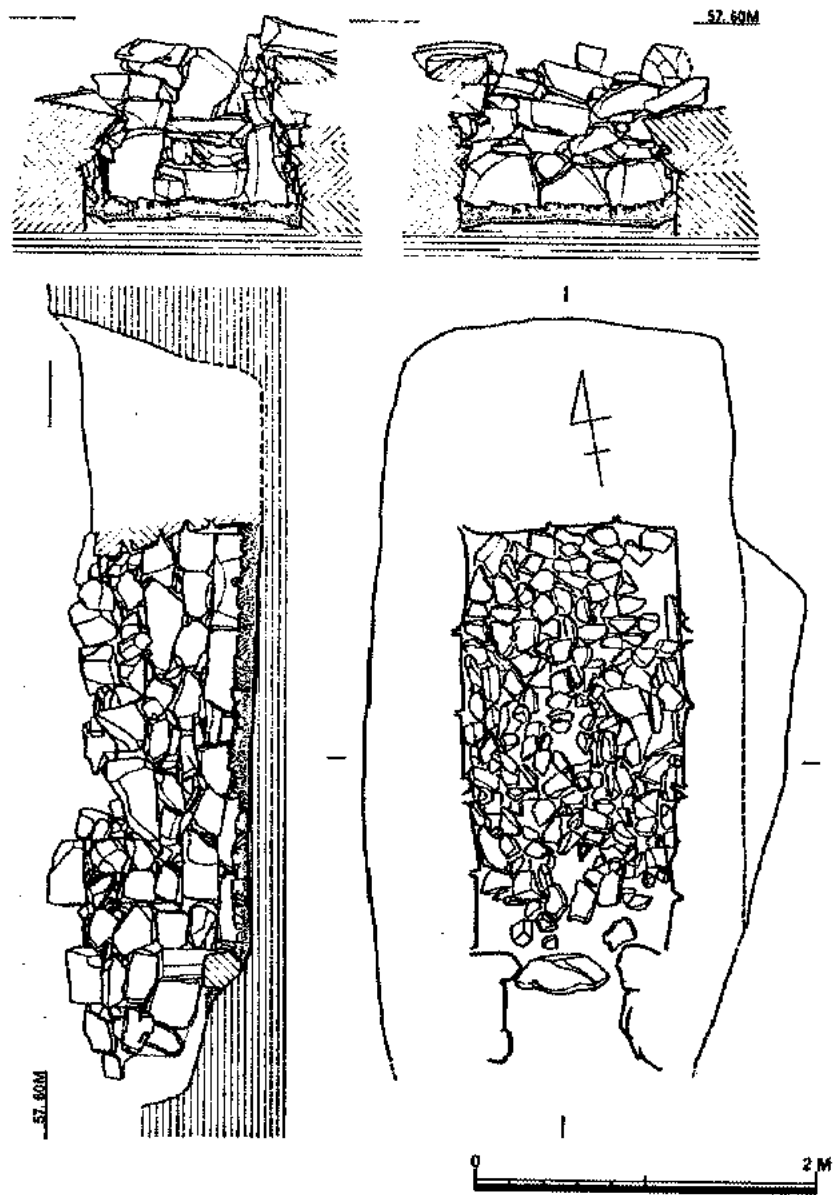
耳環(2) 鍍金等の痕跡はなく、青銅の地膚が露出している。断面は径3-4mmの楕円形を呈し、中実である。

鉄器(第76図、図版18)

鉄鏃(3-16) 大きく6類に分類できる。I類(3)は広根式に属し、鏃身は幅4cmの三角形を呈し、鋸を持たない。II類(4-6)は主頭式の長頸鏃。III類(7・8・13・15-16)は片丸造りの柳葉形式で、茎の形状でさらに2種に細分できる。IV類(9・10・11)は片刃簡式。V類(12)は脇挟をもつ柳葉形式。VI類は小片であるが斧箭式と思われるものである。

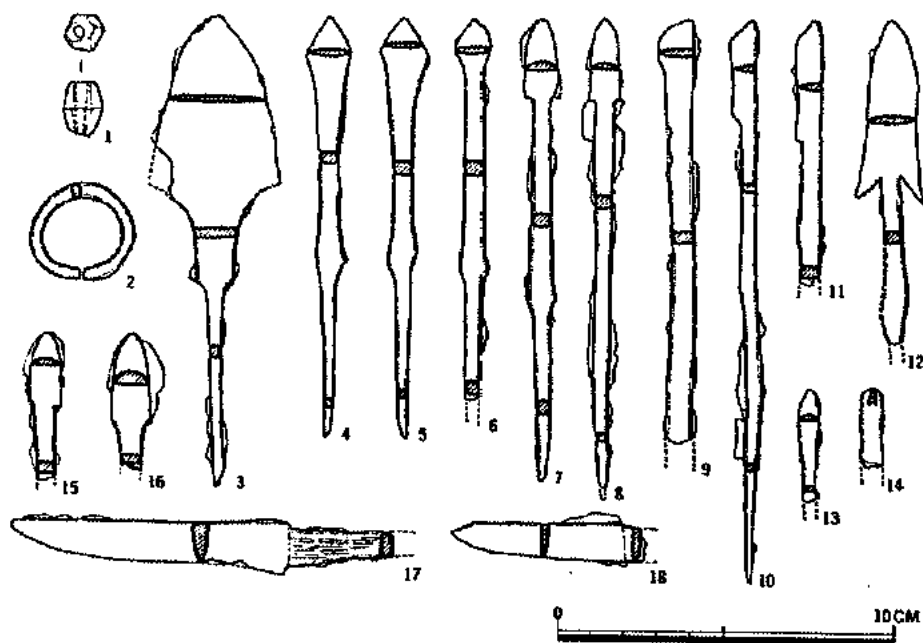


第74図 第2号墳主体部
閉塞状況(1/40)

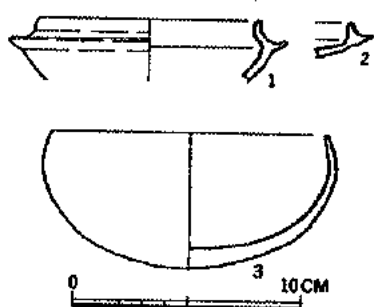


第75図 第2号填主体部実測図 (1/40)

2. 発掘調査の記録



第76図 第2号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/2)



第77図 第2号墳周辺出土遺物実測図Ⅱ

刀子(17・18) 17は比較的に残りが良く、柄の先端を欠損するのみである。関は両関で、幅約1.6 cm 刃部長約8 cmを計る。18も両関造りのようで、刃部長は約5.1 cmある。

須恵器(第77図、図版17)

1は墓道と推測される地点の二次堆積層から、2は石室周辺の二次堆積層からおのおの出土した。これらの示す年代は、石室プランをもとに推定する年代との隔たりが大きく、本古墳とは無関係と考えられる。

土師器(第77図、図版17)

これも第2号墳主体部周辺の二次堆積層から出土したものである。ほぼ完形に近く復原できる器で、口径約11.8 cm、器高約6 cmを計る。器表は風化が著しく、調整痕は確認できない。器についての編年資料は乏しく、位置付けは困難である。

3) 第3号墳(第78・79図、図版11-3・4)

調査開始の時点では古墳と想定していなかったが、重機による掘削で石材を検出したために以後はトレンチを設定して人力で発掘を行った。しかし、石室の東側は急傾斜して崖落ちとなり、下方に民家が存在するためにトレンチを延長できず、墳裾を確認していない。

(1) 遺構(第78・79図、図版11-3・4)

墳丘 石室の北側および西側に設定したトレンチで墳裾(盛上の範囲)を確認できた。北トレンチでは、石室の中心から約5.9 mの地点に盛上の開始点があり、その北側では幅約2 m深さ約0.4 mの落込みを検出した。一方、西トレンチでは削平を受けたために盛土は石室中心から約4.7 mの地点から始まり、そこから同6.1 mの地点までは地山が露出していた。したがって、墳裾は石室中心から4.7-6.1 mの間に求められる。この2つのトレンチ観察から、本古墳は直径約12 mの範囲にわたって盛土をもっていたと予想される。また、北トレンチで検出した落込みは、西トレンチでも幅約3 m、深さ0.3 mの落込みに続くと考えられ、石室の北側から西側にかけて周溝を推定できよう。

主体部 主体部は、奥壁幅約1.6 m、長さ約2.6 mの単室横穴式石室で、弱い胴張り有する。壁体の上半は破壊され、4-5段の石積みが遺存する。袖石は大石を3段横積みして構成するが、その前面で1-2列の貼石を以て安定させている。敷石は攪乱されており原位置を保っていたものはない。また、地山面では腰石間に根石を検出した。

根石は袖石の中ほどに一枚の扁平な石を敷き、その前面に5個の石を並べて構成する。閉塞はその上に、高さ・幅とも50 cm余、厚さ20 cmの大石を立て掛けて、間隙を大小の礫で塞ぐ。

墓道は約2.2 m延び、床面はほぼ水平である。

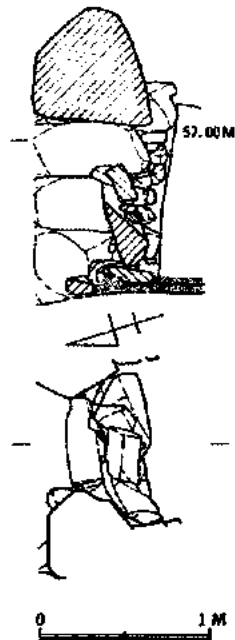
(2) 遺物(第80・81図、図版17・18)

遺物は、墓道・墳丘から須恵器を、石室から鉄器片等と人骨片を出した。うち、人骨は頭骨で、石室左奥隅で床面から約10 cm浮いた状態で検出したが、遺存状態が悪く、取り上げ時に粉砕してしまった。

鉄器(第80図、図版18)

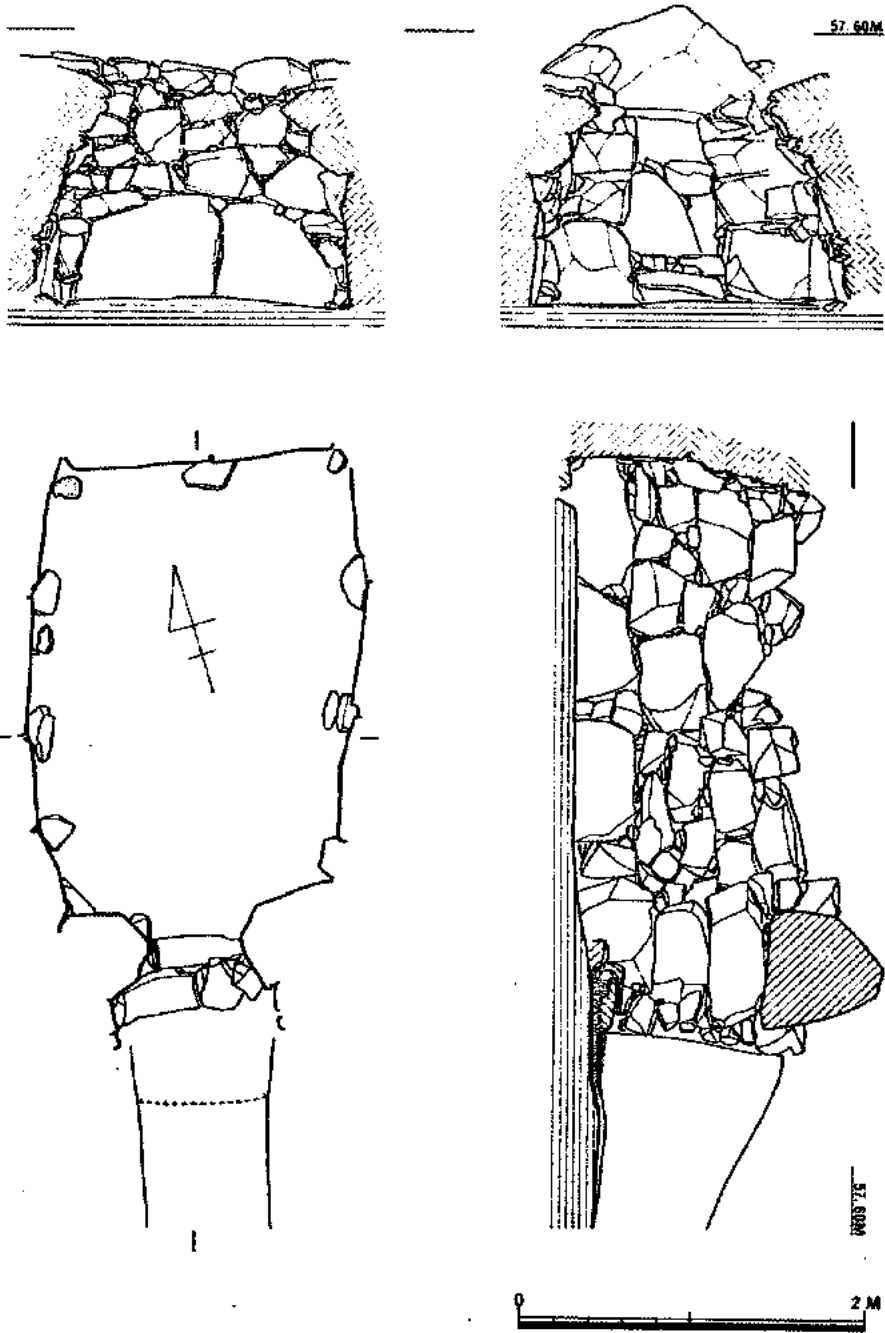
鉄鏃(1・2) 小片である。2に鏃は観察できない。

鉞(3) 刃部幅約0.9 cm、同長4.8 cmの細身のもので、断面は三



第78図 第3号墳主体部
閉塞状況(1/40)

2. 発掘調査の記録



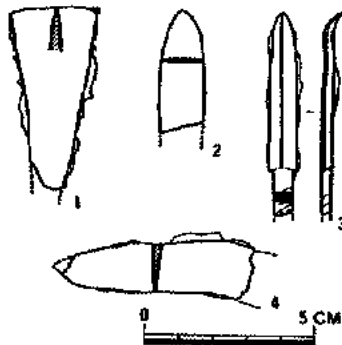
第79図 第3号墳主体部実測図 (1/40)

角形をなし、背に鑄をもつ。基には樹皮と思われる装着痕が付着している。

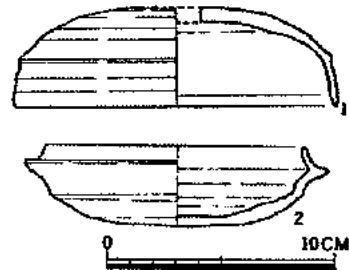
刀子(4) 刃部の小片。残存長6cm、幅約1.7cm。

須恵器(第81図、図版17)

1は墳丘から、2は墓道からそれぞれ出土した。1は約半を残す杯蓋で、復原口径約14.2cmである。天井部と口縁部の間に鈍い段をもつ。2はほぼ完形の杯身で、口径約13.2cm、器高3.6cm。焼成は甘い。



第80図 第3号墳出土遺物実測図Ⅰ(1/2)



第81図 第3号墳出土遺物実測図Ⅱ(1/3)

4) 第4号墳(第82・83・84・85図、図版12-1・2・3)

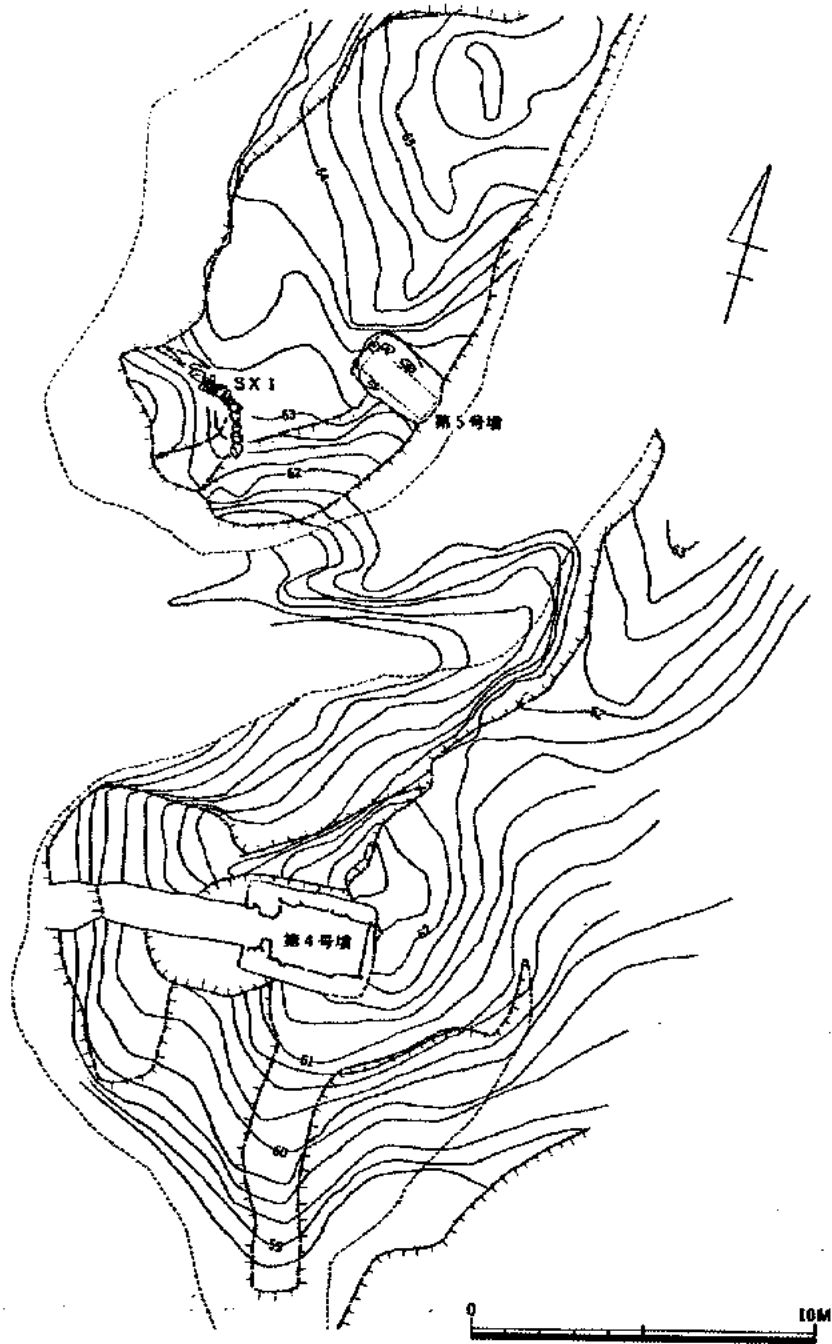
調査前から古墳と考えていたものである。墳丘はかなり変容・カットされ、頂部には幅約3m、長さ7mの大きな陥没坑があった。調査は、陥没部分の埋土を除去して石室を検出する作業と、墳丘に3本のトレンチ(おのおの方位の英語頭文字を冠して、N・E・Sトレンチと呼ぶ)をあける作業を併行しておこなった。その後、作業の進捗状況をみて順次サブトレンチ、(NEトレンチ、SWトレンチと呼ぶ)を設定し、最終的には盛土をすべて削いで墳丘部分の地山面を検出した。

(1) 遺構(第82・83・84・85図、図版12-1・2・3)

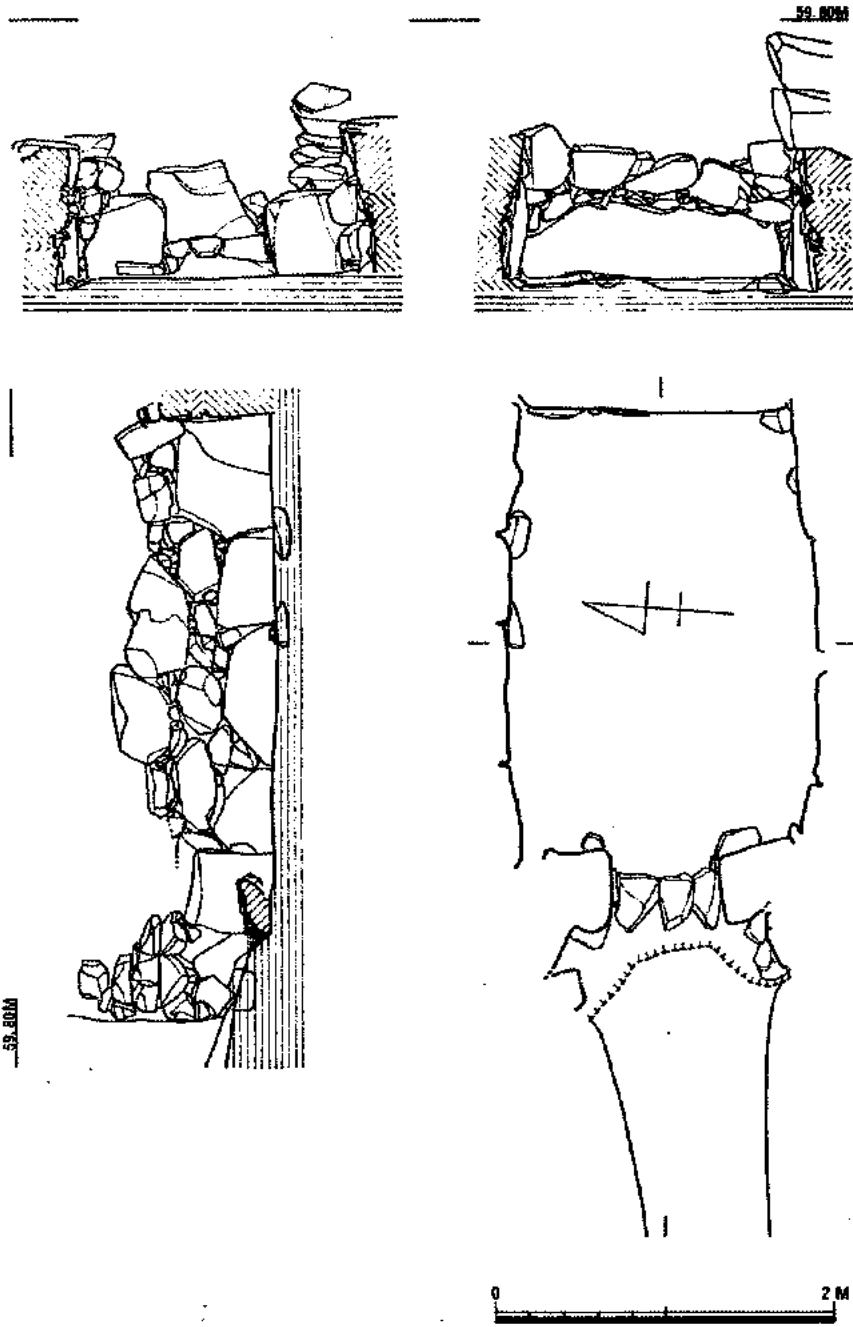
墳丘 トレンチで観察できた知見を以下に記す。

Nトレンチでは、盛土は石室中心から約3.6mの地点まで遺存していたが、以北は登山道などで大きくカットされていたために墳裾は確認できない。地山面(旧地表と思われる)は北から南へと緩く下降し、残存部では約1.8mの距離をもつ南北2点間で0.6mの比高差をもつ。Eトレンチでは、盛土が石室中心から約5mの地点で開始され、その厚みは最大1.5mある。

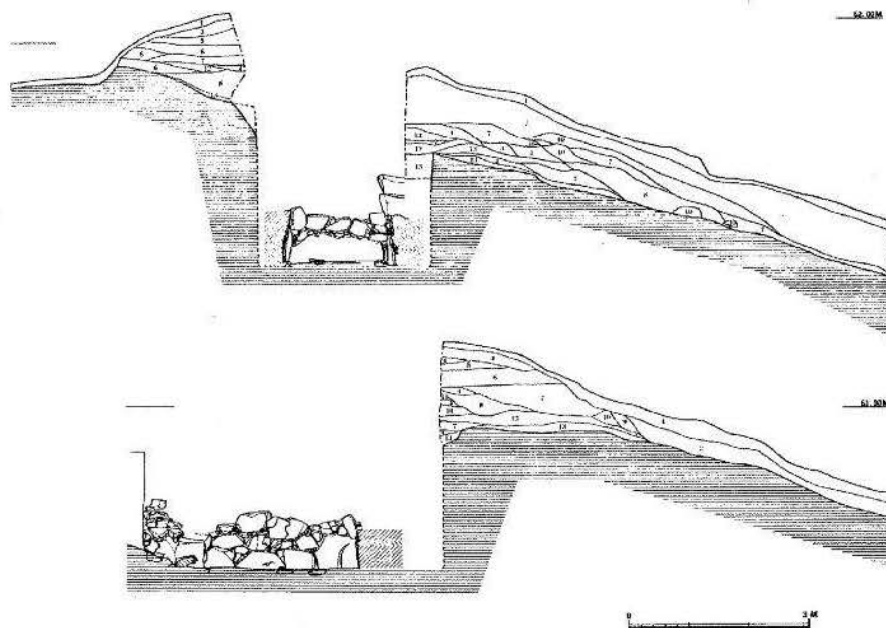
2. 発掘調査の記録



第82図 第4号・第5号墳周辺地形測量図 (1/200)

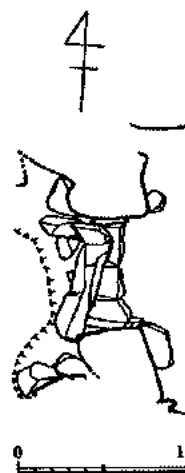


第83図 第4号墳主体部実測図 (1/40)



第84圖 第4号墳土層図 (1/60)

2. 発掘調査の記録



第85図 第4号墳
主体部閉塞状況
(1/40)

周溝らしい落込みは観察できず、地山面はそのまま緩やかに下降して行く。Sトレンチでは、土上の流失・二次堆積が著しく、填層の識別が困難であったが、石室中心から約4.8mの地点で確認できた。以上のことから、本古墳は径10m前後の円墳に復原できる。また、トレンチに周溝は現われていないが、第5号墳や石積遺構S X 1との間に掘削されていたと思われる。

主体部(第83図、図版12-1・2) 主体部は西へ開口する単室の横穴式石室である。現状では、墳頂から石室床面まで約4mある。

石室は、腰石とその上方の石積1-2段を残すのみで大破していた。床面の検出作業中、散乱した敷石上で、伏せて積み重ねた5個体の土師器皿を検出した(図版90)。これは、盗掘時に遺棄されたというのではなく、墓地として再利用された痕跡であろうと考えている。その時期はおよそ13世紀頃であったろう。

石室の平面プランは、奥壁幅約1.6m、長さ約2.6mで第3号墳主体部とはほぼ等しい。框石は、楠石の中央あたりに3個の石材を一行に並べて構成する。また、玄門前面の貼石は1-2列の小規模なものである。

閉塞は、框石上に扁平な大石を立て掛けて、その間隙を大小の礎で充填している。これに取り付く墓道は、水平な床面をもって約4m延びるが、そこでカットされている。

(2) 出土遺物 (第86・87図、図版17・18)

遺物は、石室内から数点の鉄器片と中世の土師器を、墳丘からかなりの量の須恵器・土師器を検出したが、それらの出土状況は確認できていない。以下で、墳丘出土の土器に関してはその出土地点をⅠ-Ⅳ区と記すが、それは墳丘を石室の中軸線で4分割しその北西部分をⅠ区、以下時計回りにⅡ-Ⅳ区と呼称したものである。

鉄器(第86図、図版18)

石室埋土中から出土したもので、原位置を保っていたものではない。

鉄鏃(1-4) 1・2は片刀箭式の、3は圭頭式、4は柳葉形式で片丸造りである。

刀子(5) 背の厚みは約4mm、断面楕円形に近い柄縁金具が残る。

須恵器(第87・88・89図、図版17)

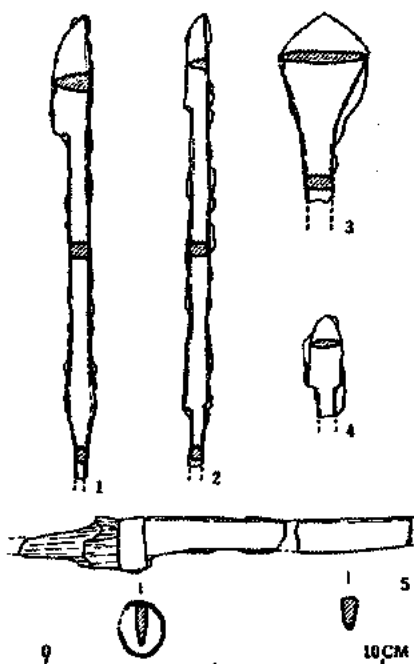
杯蓋(第88図1) Ⅳ区出土の小片。図上復原したが、口径は信頼性に乏しい。天井部と口縁部の境に明瞭な稜はなく、鈍く屈折するのみである。内面に粘土紐巻上げ痕を残す。

杯身(第88図) これも盛土中から出土した小片。

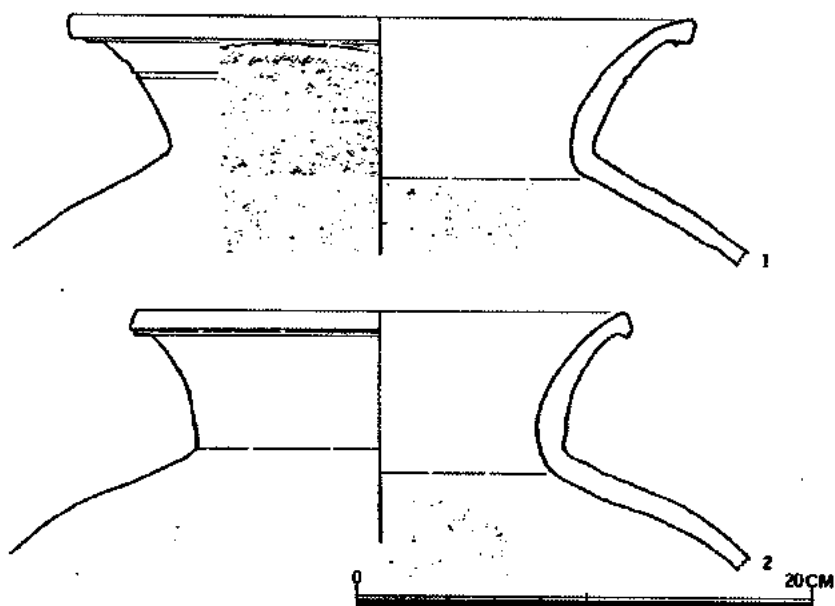
短頸壺・蓋（第87図3・4） IV区から出土したほぼ完形品で、セットと考えられる。蓋の口径は10.5cm、器高3.8cm、短頸壺は同8.3cm、5.7cmである。ともに外面の篋削りは比較的丁寧で、内外から外側へ向って左回りに施す。短頸壺は肩の張りが顕著で、口縁部は緩やかに外彎する。底部内面は約5.5cmの径をもって小さく凹む。また、底部内面と肩部外面に篋削りが見られる。

鉢合（第88図8） II区NEトレンチ発掘中に出土した。実測図は小片からの復原図である。受部は口径28cm、深さは7cmほどであろう。口縁部は屈折して開き、端部断面は短形に近い。外面の中位に甘い凹線文をラセン状に施し、その上下を櫛描波状文で装飾する。文様帯の下方はカキ目調整する。

脚部は透孔を両側に残し縦長の残片である。これから推して、4方に長方形透孔を5段以上にわたって縦一列に穿孔していたと考えられる。各段の透孔の間は甘い凹線で区画し、おのこの文様帯を1—

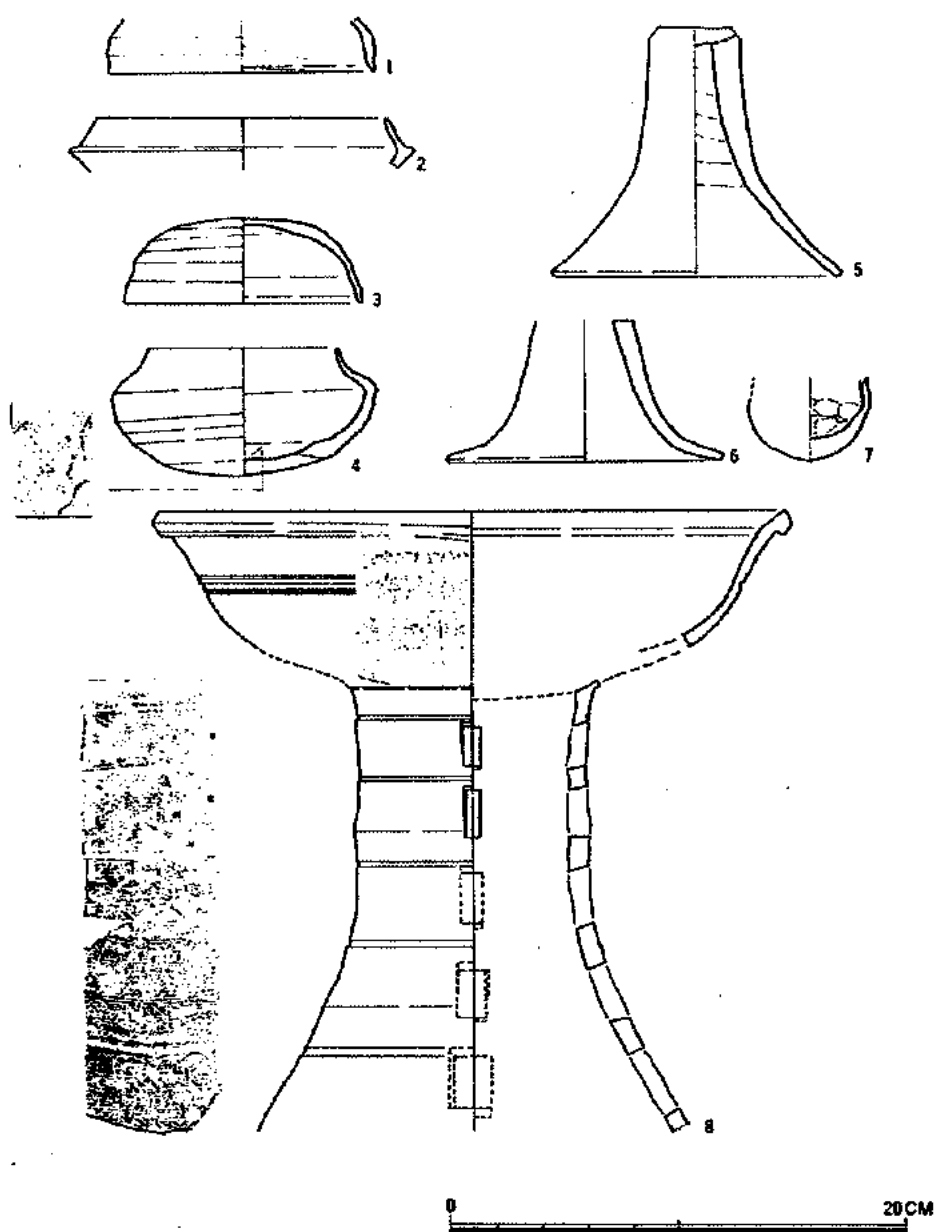


第86図 第4号墳出土遺物実測図1 (1/2)



第87図 第4号墳出土遺物実測図II
(1/3)

2. 発掘調査の記録



第88図 第4号墳出土遺物実測図面（1／3）。

3単位の推定な櫛描波状文で充満する。

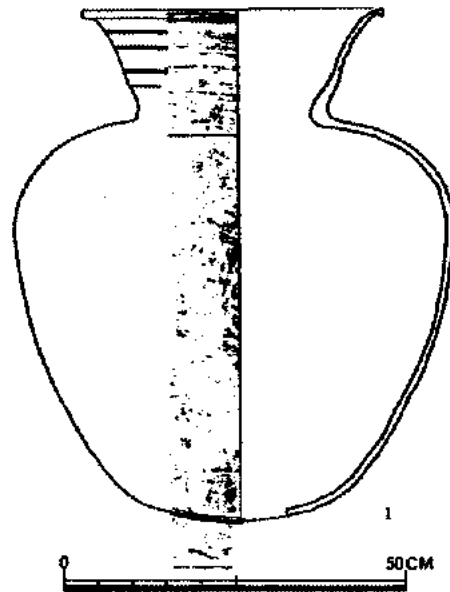
壺（第87図1・2、第89図1） 第87図1・2はIV区から出土した。1は口径約27cm、7は同21cmを計る。1は口縁端部を断面三角形に肥厚させ、その直下に同じく断面三角形のシャープな内帯を巡らす。以下、頸部上方までを文様帯とするが、中位やや上方に一条の凹線を刻んで分割し、おのおのに櫛描波状文を施す。2は口縁端部が肥厚し、小さく垂下する。

第89図1はSトレンチで押し潰されたような状態で出土した。ほぼ完形に近く復原でき、口径44cm、器高76cm。肩部にはりをもち、口縁部は緩く蛇行して大きく開く。口縁部外面を3条の沈線で区画し、上から順に櫛描波状文、同刺突文、同波状文を施文する。

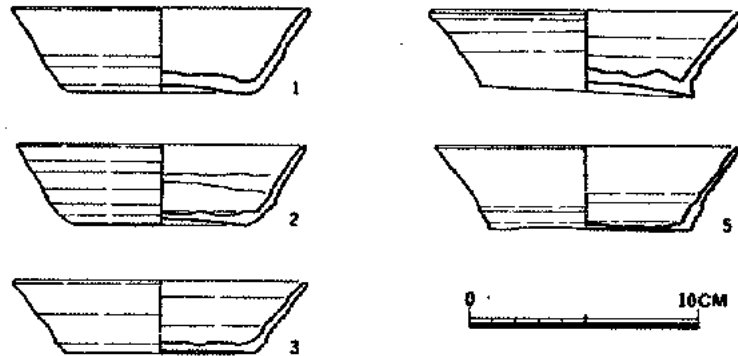
土師器（第88・89図）

高杯（第88図5・6） 竊道埴土中から出土した。5は脚部内面上半に幅約1cmの粘土紐巻上げ痕を残す。両者とも外面調整は不明である。

手握ね土器（同7） 口縁部を欠損する。外面調整は不明だが、内面は全面に指頭圧痕を残す。1区出土。



第89図 第4号墳出土遺物実測図IV（1/10）

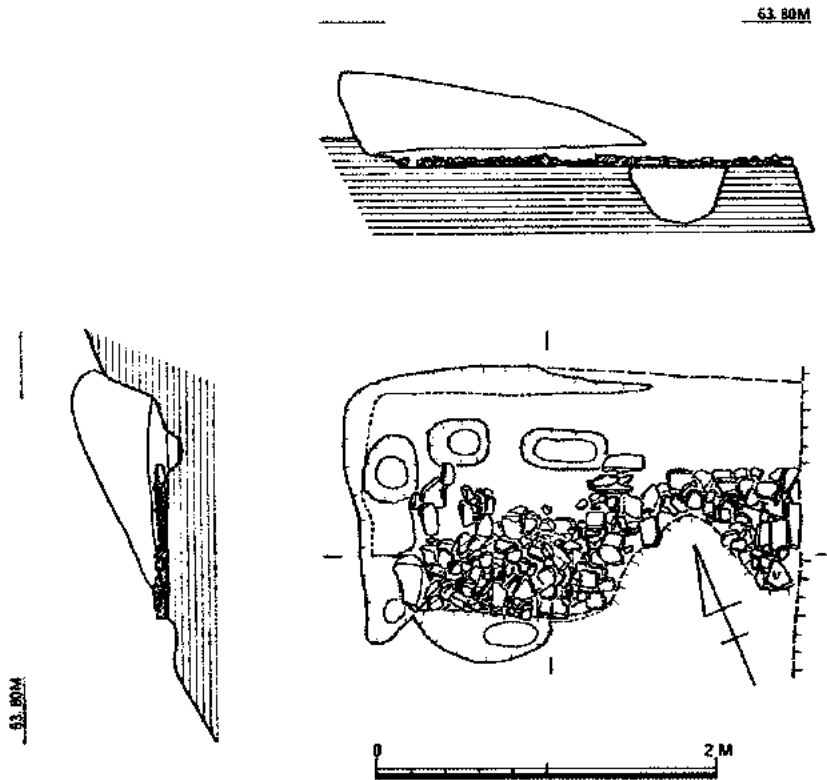


第90図 第4号墳出土遺物実測図V（1/3）

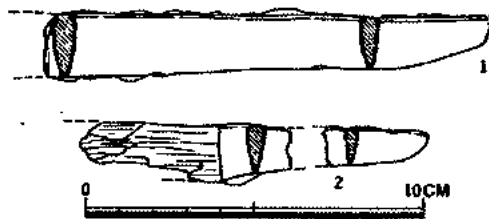
2. 発掘調査の記録

皿（第90図1-5） 石室の敷石上に伏せてあったものである。5個体とも同様で、口径13cm前後、器高約3cm。底部は平底あるいは小さな上げ底で、いずれも回転糸切痕を残す。

5) 第5号墳（第82・91図、図版12-4）



第91図 第5号墳主体部実測図（1/40）



第92図 第5号墳出土遺物実測図（1/2）

(1) 遺構（第91図、図版12-4）

調査当初に設けたトレンチでは遺構を発見できなかったが、全面を地山まで下げた段階で検出できた。壁体はまったく遺存しておらず、敷石を残すのみである。

畔の土層観察でも盛土は確認できなかった。敷石は現地表の20cm下位に位置しており、盛土・地山ともにすでに大きく削平をうけていたといえる。

敷石は径10-20cm前後の小礫を用い、その分布から推定できる石室内法は、幅約0.9 mで、長さは2.2 m以上ということである。また、掘形の北西側小口部分は中央部がやや高い平坦面となり、向側に石材の採取痕があることからここを玄門とする横穴式石室を想定できる。さらに、敷石の範囲を考慮するならば堅穴系横口式石室であった可能性が強い。

(2) 遺物 (第92図、図版18)

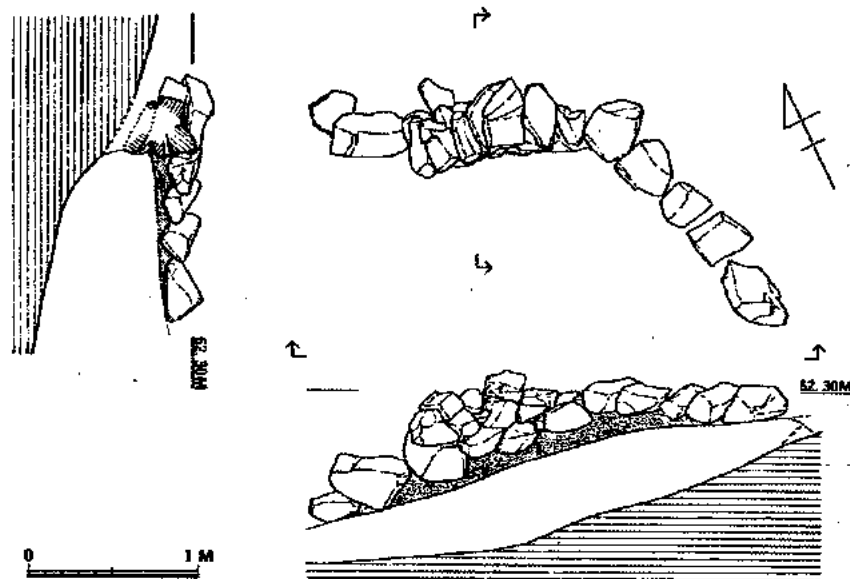
敷石上から2点の鉄器を出土したのみである。

鉄器 (第92図、図版18)

刀子 (1・2) 1は大型の残片。背幅は6mm、残存長約13cm。2は刃部中央を欠く。両は木質に覆われており、形状は不明である。

6) 石積遺構 S X 1 (第93図、図版13)

(1) 遺構 (第93図、図版13)



第93図 石積遺構 S X 1 実測図 (1/40)

3. ま と め

第5号墳の南西に位置する。検出時は人頭大の角礫が乱雑に積み重なっており、崩壊した古墳を想定していた。しかし、土層観察では掘形などの明瞭なラインを認めなかったために畔を除去した。その際に西半部分で石材の面を揃えた石積みを検出し、以後その面を追って石材をはずして行った。その結果、1-3段の石を面を揃え、約3.2mにわたって緩くし字状に配列した石積遺構S X 1を検出した。

揃えた面はほぼ垂直に近いが、基底部は南東部分から北西部分へ向って傾斜し、その比高差は60cmある。このことから石室の可能性は否定されよう。一方、前方後円墳のくびれ部に施こされた葺石と仮定しても、そうした場合の主体部となるべき第5号墳の石室中心までは約5mであり、前方後円墳としては小規模にすぎず。また、石積みの面が垂直なこと、市内では前方後円墳を含めて葺石を施した古墳を確認していないという現状も葺石説には不利である。したがって、現段階ではこの遺構の性格は不明であり、また、伴う遺物もなく築造時期も判然としない。ただ、石材が石室に使用されているものと種類、大きさとも共通するということと、第5号墳に近接しているという理由から、第5号墳に関連する遺構であろうと推測しておく。

3. ま と め

以上が今回の調査で得た知見である。

かつて、1971年に福岡教育大学歴史研究部考古学班によって調査された「三郎丸古墳群」^{註4}の正確な所在地は承知していないが、本遺跡とは直線にして約700mの距離を隔てており、同じく「三郎丸」の地名を冠しているものの、遺跡に直接的な関連を認めているものではない。

最後に、本遺跡の遺構をまとめて結びとしたい。

今回の調査では、5基の古墳と1基の石積遺構を検出した。

第1号墳は石室・墳丘ともに規模は不明である。また、築造時期を示す遺物もない。

第2号墳も墳丘規模は不明である。石室は、1.2m×2.6mの長方形プランをもち、竪穴系横口式の形態をとると考えられる。本来は南へ延びる短い墓道が付設されていたであろうが検出できなかった。細かな年代決定をしようような遺物は出土しなかったが、石室形態から推して6世紀前半を中心とする時期に造営されたものであろう。

第3号墳は墳丘径約12mで周溝を有するが、全周はしないであろう。石室は規模1.6m×2.6mの単室横穴式石室で、短い墓道が南に延びる。墳丘および墓道から出土した土器は6世紀後半のものであり、型式を異にすることから追葬が行われたと思われる。

第4号墳は墳丘径約10mの円墳で、周溝の有無は確認していない。石室は1.6m×2.6mの長方形プランをもつ単室横穴式石室で第3号墳主体部に極似する。墳丘からかなりの土器を出土したが、これらは6世紀中葉～後半に位置付けられるものであろう。

第5号墳は敷石のみを遺存する。そこから復原される石室規模は、幅0.9m、長さ2.2m以上の狭長な長方形プランであり、おそらく竪穴系横口式石室であったと思われる。年代を示す遺物は残っていないが、石室プランからみて6世紀前半にはすでに築造を終えていたであろう。

石積遺構S X 1も、構築時期、性格とも確定できる遺物をもたないが、先述したような理由から、第5号墳に付属するものと考えられる。

以上のような年代推定が認められれば、本古墳群の形成は以下ようになる。

まず、6世紀前半代頃までに第2号墳および第5号墳が築造される。いずれも石室形態から推測したものであるが、同様にして両者の間の先後関係は第5号墳が先行すると考えられる。その後、第4号墳、第3号墳が6世紀中葉、同後葉頃に相次いで築造される。この両者は、石室プランが極めて相似していることから、表現の上で「中葉、後葉」と区別したものの、実際の時期差はさほどでもなかったと考えられる。また、第5号墳、第4号墳、第3号墳は尾根上にはほぼ一直線に構築されており、かつ相互に17—18mの等間隔を保っていることは、これらの被葬者、あるいは古墳の造営者たちが近い関係にあったことを推測させる。

第1号墳の時期を位置付ける資料はないが、上述したように第3号墳～第5号墳が高所から低位へと築造されていることから、第5号墳に先立つ可能性がある。(飛 野)

注1 クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社『城ヶ谷古墳群—福岡県宗像郡宗像町大田原所在遺跡—』、1977

注2 1984年5月—12月に調査を行った、宗像市大字富地原字梅木に所在する富地原梅木遺跡第7号墳（横穴式石室を主体部とする、径約8mの円墳）では、龍泉窯系青磁碗4、阿波1、白磁口売げ皿1などの輸入磁器のほかに、須恵器指鉢、瓦質土器指鉢（以上完形品）や多数の土師器を出土した。これらは出土状況からみても、14世紀に石室を墓として再利用したものであろう。

石室から中世の遺物を検出することは決して珍しいことではなく、それらの中には再利用時の供献土器が少なからず存在すると考えている。

注3 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4、1978

注4 福岡教育大学歴史資料室「三郎丸古墳群—宗像郡宗像町三郎丸伊牟田山古墳群調査報告書—」『福岡教育大学紀要』21、1971

第4章 結 語

平等寺・三郎丸地区の宅地開発に伴う発掘調査は、1974年と1983～1984年の2次にわたる。

1次調査は福岡教育大学歴史研究部考古学班の手で、2次調査は宗像市教育委員会が担当したが、この10年間は、事業計画等の変更により、8年間のブランクを持ったことになり、この間に行政と開発との密な事前協議が行なわれておれば、調査計画もゆとりを持ち、破壊せずに保存のできた古墳も数多く見い出せたものと思われる。今回の事業終了にあたり、このことだけは悔やまれてならない。

今回の発掘調査が大規模なものとなったのは、当初の事前踏査による古墳数を大巾に上まわる古墳が検出されたためである。当初の踏査において約15基の古墳に墳丘が認められ、調査日程にも余裕があったが、既に開鑿されていた丘陵部に墳丘を失った古墳が群集して発見された。

さらに事前協議の段階では保存の決まっていた1支群の古墳群が調査中途において、現状保存が不可能になり、急遽、発掘調査をせざるを得なくなったためである。

ここ数年來の宗像市内の緊急発掘調査において、特に5～6世紀にかけての古墳は、宗像地方特有のものかと思えるほどに、主体部の墓壇が深く、天井石の高さに墓壇の上端がくるものがほとんどである。このために、墳丘盛土は少なくてすみ、必然的に低い墳丘をつくることになる。分布調査あるいは開発に伴う事前踏査においても、この種の古墳は、非常に発見が困難であり、担当者泣かせといえる。墳丘を失った古墳が処女墳であったという経験を何度もするのは、宗像のみであろうか。

城ヶ谷古墳群は、2回にわたる調査において1支丘に61基もの古墳が群集するという、まれに見るものとなったが、調査の結果からすると、遺構の遺存状況は非常に悪く古墳の築造過程を詳細に捉えることは不可能である。このため、調査の主眼を主体部に置かざるを得なかった。墳丘規模は第3号墳（前方後円墳、全長22m）を除くと、直径20mを越えないものばかりであり、平均して10～15mの間に収まるものと推定できる。

主体部は、小型の堅穴式石室と単室の横穴式石室である。横穴式石室は堅穴系横口式石室と呼称するもので、羨道を持たず、玄室に向かって下降する墓道を付設するものを主体として、玄室に前壁構造をつくるものも含めている。この種の石室の特長は、石室長軸が丘陵尾根に並行するか、緩斜面の等高線に直交する立地をとるため、6世紀後半以降に見られる、丘陵斜面に位置し、石室長軸が等高線に直交し、玄室床と同じ床面高の墓道を付設する古墳とは異にしている。このため、宗像に特有の深い墓壇を生かすには、玄室から登り勾配の墓道をつけるか、長い墓道を付設する必要が生じる。宗像における堅穴系横口式石室の出現期（5世紀後半）には、非常に短い墓道、あるいは前庭部と墓道をつくり、むしろ石室入口の前面に堅杭を掘り、さらに横口に至るというもので、墓道のイメージからは若干はずれる構造のものである。

第4章 結 語

深い墓道に収まる石室は、墓壇壁そのものが壁体の補強に強い役割をはたしており、前庭側壁も貼石状のものではなく、基底部から積みあげて、側壁末端は墓壇壁で包み込まれるために強固なものとなっている。この深い墓壇壁そのものが、宗像地域に、羨道をもつ横穴式石室の導入を遅らせたものと推定できる。

遺物は、石室の内外に各種見られるが、当古墳群の時期には、石室内への土器の副葬はまだ見られない。第17号墳の墓道脇の地山整形面においてあった耳環と空玉を入れた須恵器と土師器を使った容器の埋置は、古墳築造時、とりわけ地山整形時における「まつり」として注目できる。このような例は最近の調査でも類例を増やしつつある。

玄室内の出土遺物については、大半の古墳が著しい盗掘を受けているためにめぼしいものはなかったが、第2号墳出土の鋸は両刃で現存長16.3cmを測り、基部から先端へ向けて先細りするものである。近年の調査では宗像市の朝町百田遺跡B-2号墳、須恵クヒノ浦古墳（前方後円墳）、大井三倉古墳群（仮称）からの出土がある。いずれも両刃である。

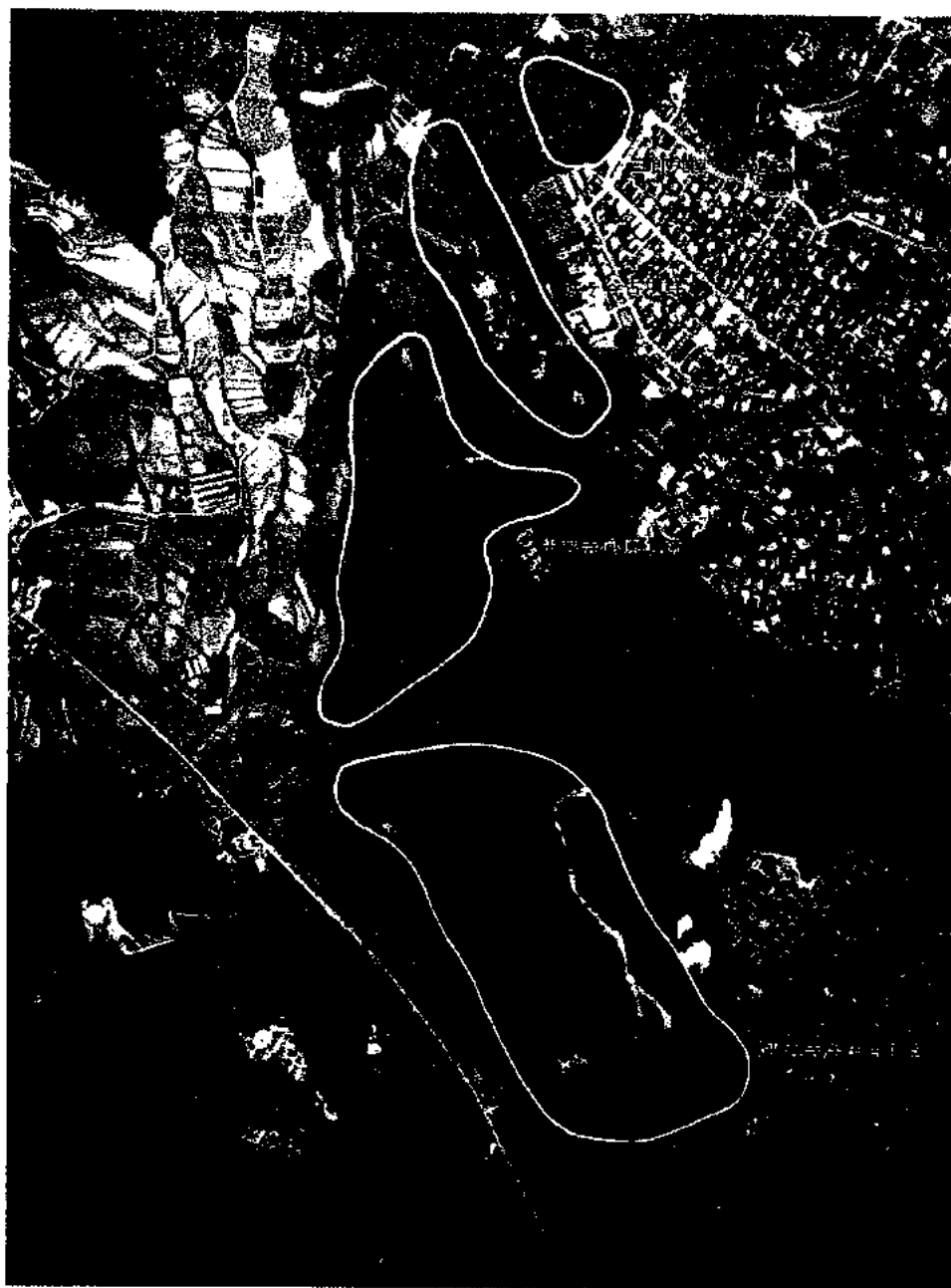
宗像地域の古墳の副葬品には、他地域に比べ鉄製品、金銅製品の多さに驚く。主要な副葬品の多くは朝鮮半島からの搬入品と考えられる。古代宗像は、大きく2つに分けられる。津屋崎町・玄海町・福岡町の海岸部と宗像市・福岡町の内陸部である。この2つの地域は漁業と農業をそれぞれに生業として持ち、互いにおぎないあいながら宗像族として存在していたものと思われる。朝鮮半島から鉄および金銅製品は海岸部漁民の航海術に負うところが大きい。

城ヶ谷古墳群の61基に及ぶ古墳は、5世紀中頃から6世紀中頃までの約100年間に築造されたものであるが、この築造期間の前後には当古墳群ののる丘陵には古墳の築造はなく、近くに後続する古墳群を探すとすると、平等寺向原遺跡Ⅰ・Ⅱ群があてはまるものとなろう。

宗像をはじめ、他地域においても古墳が大群集するのは6世紀後半以降であり、それ以前に当古墳群のように群集することは異様といえる。宗像における堅穴系横口式石室が主流となる5～6世紀の100年間は、従来の稲元古墳群・朝町浦谷古墳等に見られるように、1群の中で1連のものとして群構成をしており、その対比において、今後、築造集団の位置づけが課題となる。

最後に、本来果たすべき役割である過去の遺産を未来への声として、保存活用すべき責務を1冊の報告書と出土遺物に置きかえなければならなかった担当者の力不足と怠慢を深く反省し今後の指針とすることで結語としたい。

版 圖



城ヶ谷古墳群・三郎丸堂ノ上遺跡 航空写真



1. 第2次調査全景（西から）



2. 調査後全景（東から）



1. 20号墳 (西から)



2. 第30号墳 (南西から)



3. 第31号墳 (西から)



4. 第32号墳 (西から)

図版 4



1. 第33号墳（南から）



2. 第34号墳（西から）



3. 第35号墳

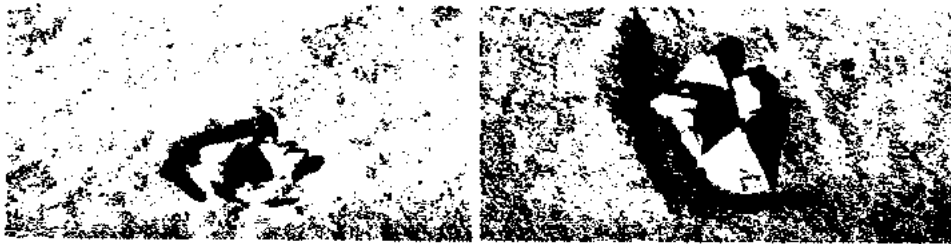


4. 第36号墳（西から）



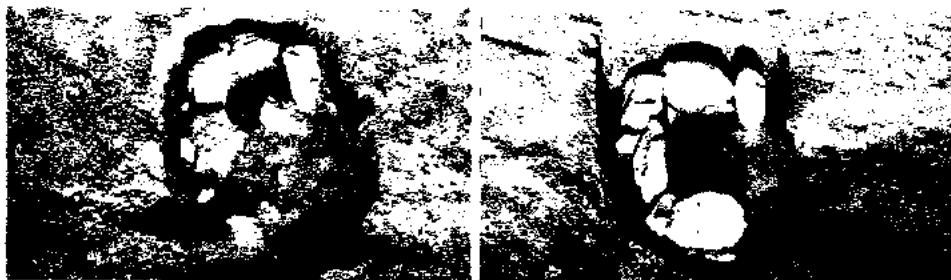
1. 第38号墳（西から）

2. 第39号墳（西から）



3. 第40号墳（北東から）

4. 第41号墳（北西から）



5. 第42号墳（西から）

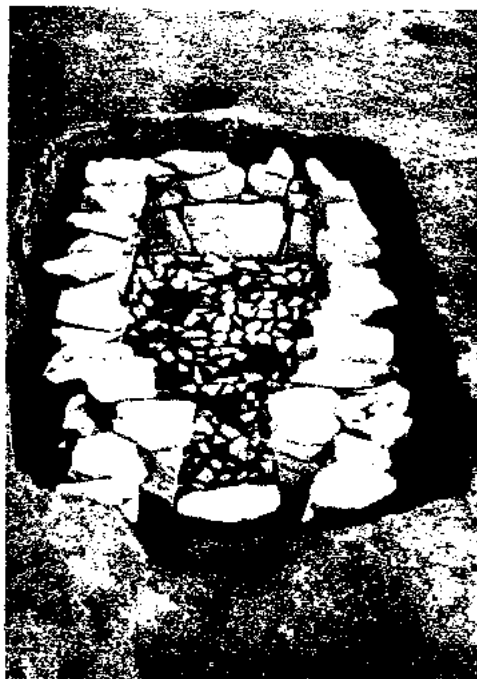
6. 第43号墳（南から）



1. 第44号墳（南から）



2. 第45号墳（南から）



3. 第46号墳（西から）



4. 第46号墳遺物出土状況



1. 第47号墳（西から）



2. 第48号墳（西から）

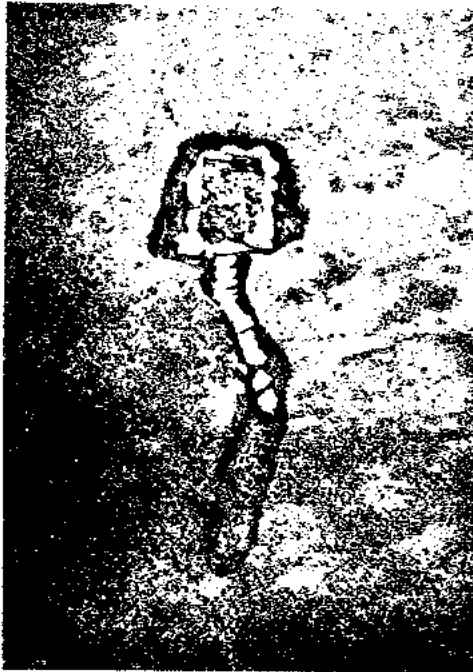


3. 第49号墳（西から）

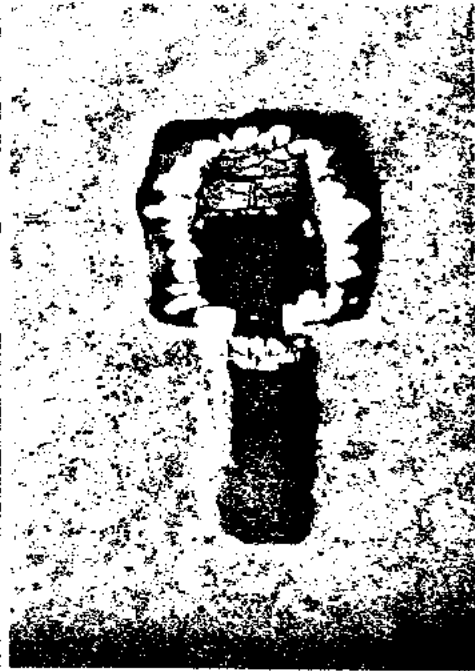


4. 第50号墳（西から）

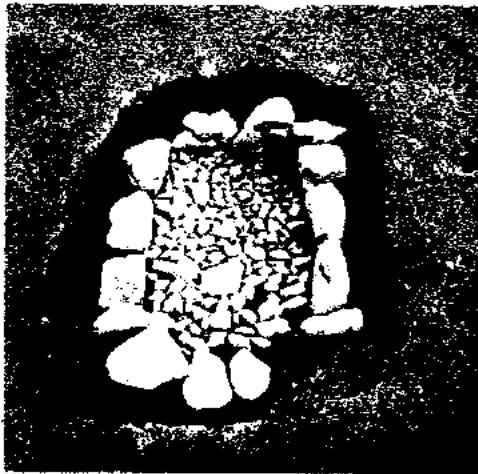
図版 8



1. 第51号墳（西から）



2. 第52号墳（西から）



3. 第54号墳（西から）



4. 第55号墳（西から）



1. 第56号墳（西から）



2. 第57号墳（西から）



3. 第60号墳（西から）



4. 第60号墳遺物出土状況（西から）

図版10



1. 全景（南から）



2. 第1号墳（南から）



3. 第1号墳（南から）



1. 第2号墳 (南から)



2. 第2号墳 (南から)



3. 第3号墳 (南から)



4. 第3号墳 (南から)

図版12



1. 第4号墳（西から）



2. 第4号墳（西から）



3. 第4号墳遺物出土状況（南から）



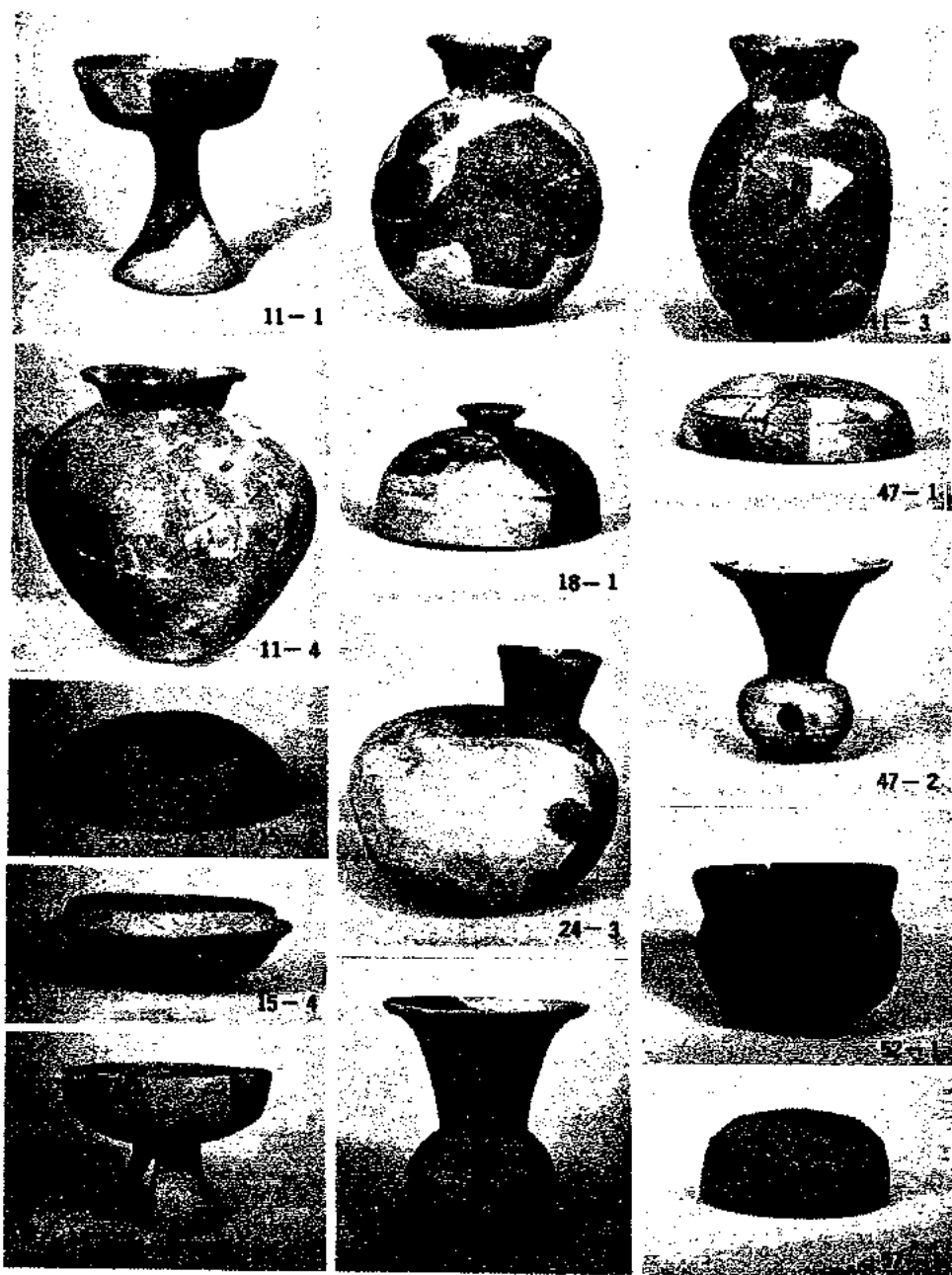
4. 第5号墳（東から）



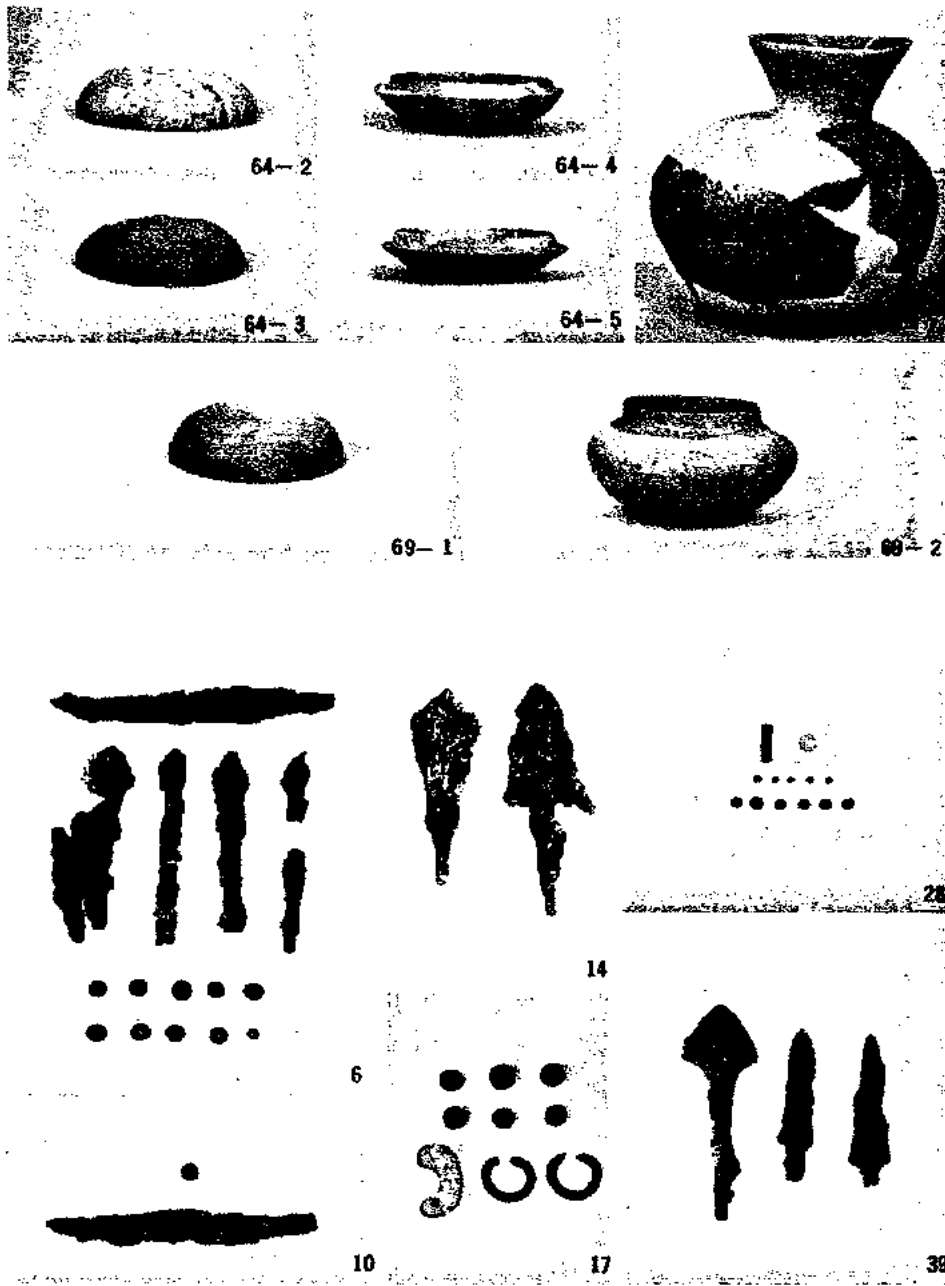
1. 石積道構S×1 (西から)



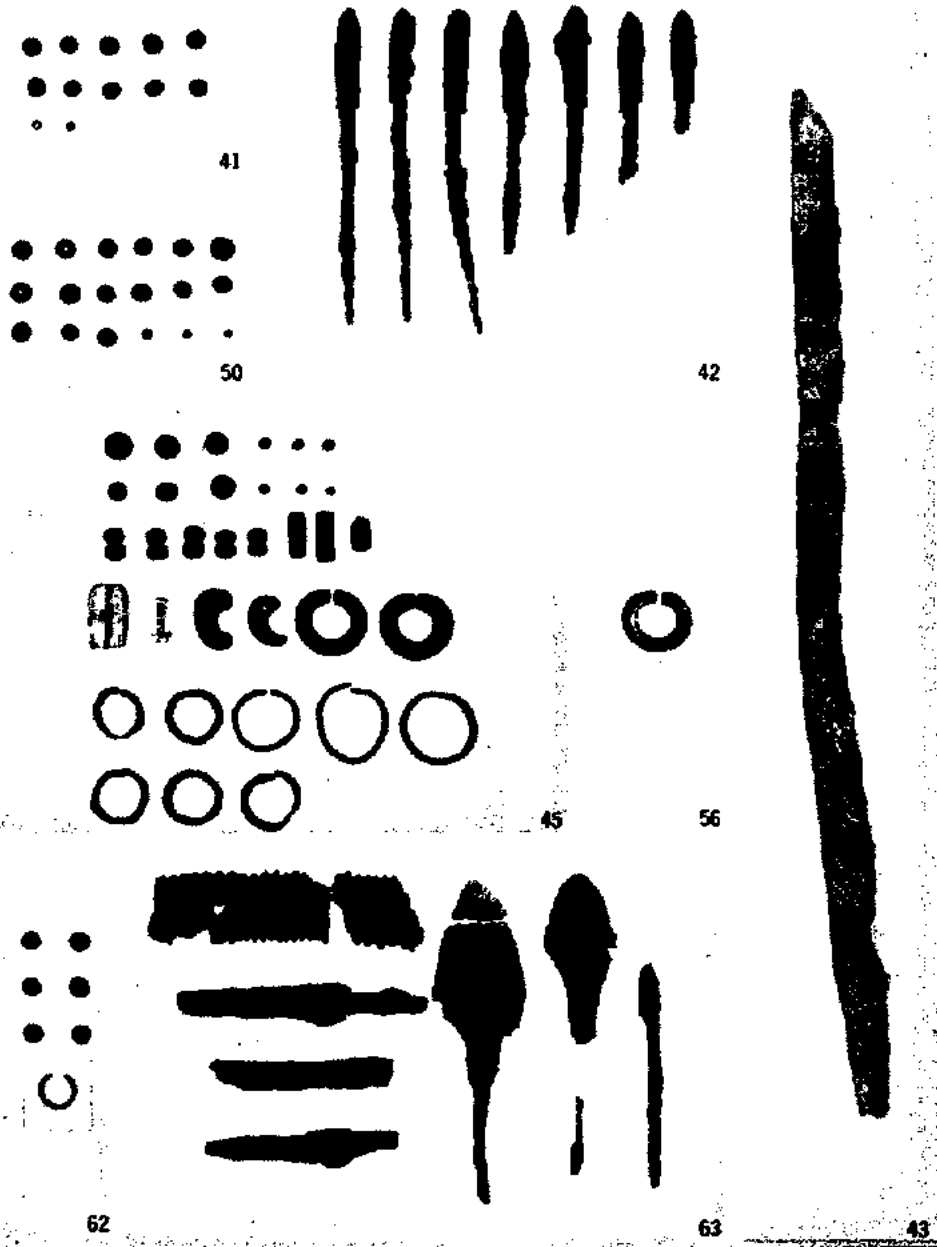
2. 石積道構S×1 検出状況 (西から)

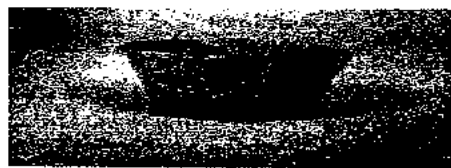
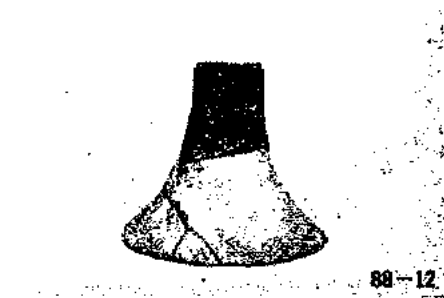
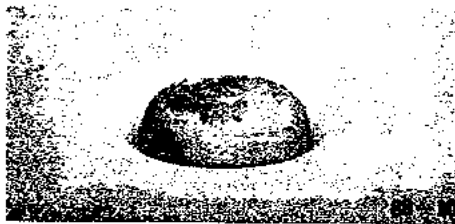
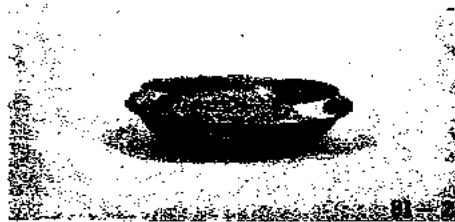
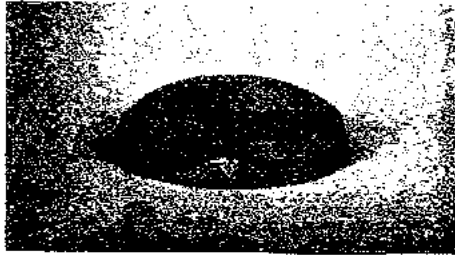


出土遺物1



図版16





出土遺物 I

图版18



宗 像
城ヶ谷古墳群Ⅱ

— 1983年度 —

宗像市文化財調査報告書 第 8 集

1985 年 3 月 31 日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷986番地

印刷 釜瀬印刷
福岡県宗像市河東